

いしかり暦第17号 創立45周年記念特集号

# 柏林

郷土研究四十五周年

石狩市郷土研究会

## 発刊のことば

ふりかえれば四十五年

石狩市郷土研究会会長 村山耀 一

石狩市郷土研究会が昭和三十五年（一九六〇）に発足し今年で四十五年目を迎えるにあたり、記念誌『柏林』を発刊できたことを、会員と共に喜びたいと思います。また、これまで支え育んでくださった多くの歴代会員の皆様や関係機関の方々にお礼と感謝を申し上げます。

石狩市は今から約四〇〇年前の慶長年間に松前藩が石狩場所の区画を設定したことから始まります。また、初代村山伝兵衛が宝永三年（一七〇六）に石狩地方場所を請負ってからまもなく三〇〇年を迎えようとしている歴史ある都市（まち）です。明治維新後も北海道の開拓史に重要な役割を占め、鮭漁業はもとより開拓農民の苦闘と努力により、砂地と泥炭地を豊かな畑作・酪農・水田地帯に変えることができました。時代が変わり昭和四十年（一九六五）頃から札幌に隣接する立地から、大規模住宅団地の造成ならびに石狩湾新港とその後背地域の開発が進められ、人口が急増し平成八年（一九九六）石狩市が誕生し新たな発展にむけて歩み始めています。

このような、石狩の伝統ある歴史と文化そして豊かな自然をきちんと調査・記録し後世に残していく事を目標に郷土研究会が発足されました。その時の中心的な存在であった会員が現在本会の顧問をしておられる田中實氏（三代会長）と高木憲了氏（四代会長）と元理事で現会員の青木隆氏でした。いずれも三代で郷土愛に満ちた青年であり、その当時の意欲に敬意を感じます。初代会長は今亡き石狩八幡神社宮司の花田知也氏で活動が開始されました。途中組織的活動は一時停滞した時期もあったようですが、二代会長の山口福司氏の頃から、活動形態も整い例会の定例化や会誌『いしかり暦』や刊行物の発行が組織的に行われ、今に至っています。

現在の会員は三十二名で女性会員も多くなりました。会員は個性的で多才であり趣味・特技を持ち、他の団体やサークルでも中心になって活動されているのが特徴です。平成十五年度は古文書解読研修や初の公開講座を開くなど新たな試みを入れて活動をしています。これからも郷土研究会の活動が会員の研修にとどまらず、その成果を石狩市にも反映できるように会員と共に研鑽を積んでいく決意であります。

平成十六年三月

## 祝 辞

### 歴史を記録する貴重な会

石狩市長 田岡 克介

石狩市郷土研究会が創立四十五周年を迎えましたことを、心からお祝い申し上げます。研究会がこれほどまで長く続けて来られたのは、力強いリーダーシップの存在と石狩の歴史に尽きない興味をいだく会員みなさんの研究熱心なところにあると思われまふ。

かえりみますと、昭和三十四年秋、高岡地区で発見された土器を調査するため訪れた専門家たちにより、石狩の財産ともいえる遺跡や遺物保存の大切さを教えられました。以来、住民は石狩の先史・近代史に目を向けるようになり、その半年後に郷土研究会が設立されたようです。発足当時の会員で、現在も活躍しておられる田中實氏や青木隆氏、高木憲了氏の業績には頭の下がる思いがします。

田中氏は石狩市史の生き字引的存在であり『石狩町誌』の執筆を、青木氏は石狩の暮らしを写真で記録し、その写真は先ごろ発行された『21世紀に伝える写真集』にいかされました。高木氏が個人で収集されました石狩に関する資料と遺物は、了恵寺の宝蔵館に常設され、館は市民の学びの場となっております。

いまは亡き会員の長谷川嗣氏は『空知集治監初代典獄／渡辺惟精の日記』を、前川道寛氏は『石狩俳壇誌』をのこされました。金子仲久氏は金子家の古文書を石狩市に寄贈してくださり、文書は市の指定文化財『金子家文書』として大切に保存しております。ほかにも、石狩市発行の史料集や歴史に関する刊行物には、会員各位の協力なくしては成り立たなかつたことでしょう。

会が発行している『いしかり暦』をはじめとする数冊の刊行物は、石狩の歴史を知るうえで貴重な本であり、将来、より良い石狩市を築き上げるために役立てていきたいと思ひます。

歴史を究明することは、一途に過去に執着することではなく、過去の事柄を通して現在が如何にして成り立っているかを知ることにあります。時間と空間が紡いだところに起きた事象を採集し、選択して具体的に記録するには多大な時間が必要とし、たゆまない努力が要求されます。

石狩市郷土研究会が今後ますます活躍され、発展することを祈念いたします。

平成十六年三月

いしかり暦第17号 創立45周年記念特集号

「柏林―郷土研究四十五周年」

発刊のことば  
祝辞

石狩市郷土研究会会長  
石狩市長

村山 耀一  
田岡 克介

目次

第一章 石狩市郷土研究会四十五年のあゆみ

四十五年間の足跡……………7

第二章 活動の記録

第一期 創立(昭和三十五年)から昭和五十年まで……………9

第二期 昭和五十一年から六十二年まで……………21

第三期 平成元年から十五年まで……………30

第三章 発刊図書

『いしかり暦』(創刊号から第十六号)……………53

いしかり郷土シリーズ1 『石狩の空襲を語りつぐ』……………58

いしかり郷土シリーズ2 『石狩の碑第一輯―石碑等に見る石狩町の歩み』……………59

いしかり郷土シリーズ3 『石狩の碑第二輯―石碑等に見る石狩町の歩み』……………60

いしかり郷土シリーズ4 『鎌田池菱と尚古社―中島家資料に見る石狩俳壇と各地の俳人たち』……………60

『町内資料に読む―石狩町女性史年表』……………61  
 「石狩町本町地区市街図―明治三五年～四〇年（一九〇二～一九〇七）」……………62  
 『石狩市21世紀に伝える写真集』……………62

第四章 回想録―郷土研究会と私

郷土研究会と私……………64

資料編

1 歴代役員と会員名簿……………84  
 2 石狩市郷土研究会会則……………90  
 3 予算の移り変わり……………92  
 4 新聞・広報紙などで紹介された研究会……………94

付

1 明治三十九年九月十八日 石狩案内 石狩新聞社……………119  
 2 石狩町勢要覧 石狩町役場 大正十一年七月……………99

あとがき

表紙題字 原澤文子  
 挿絵 吉岡玉吉

## 第一章 石狩市郷土研究会四十五年のあゆみ

### 四十五年間の足跡

石狩町郷土研究会（平成八年から石狩市郷土研究会）が発足したのは、昭和三十五年三月三十日である。会員は七十四名。会長に花田知也石狩八幡神社宮司、副会長に若林清作前町議を選出した。当面の事業として、遺跡・海浜植物・寺社・風俗慣習及び集落の入植状況の各調査と、文化財台帳の作成、古老談話集の編集を決めた。

この事業推進のため石狩・志美・花畔・南線・樽川・生振・石狩東及び高岡の八支部を置き、自主活動を促した。なお、発会式当日は北海道大学講師の大場利夫博士による「石狩の古代遺跡について」と題する講演がなされ、「蝦夷地の南・北両文化の交流地点が石狩、外来文化発見の可能性もあるだろう」と力説され、会員一同は大いなる期待をもった。

高岡地区の遺跡調査と海浜植物の標本作りは、町教育委員会職員の積極的な参加によって成果をあげた。三十七年からは、開町百年記念事業を目的に歴史文献の収集・文化財と町内の写真撮影及び統計表作成などの活動を行った。この時代の青木隆会員の写真が、平成十四年三月に発行された『21世紀に伝える写真集』を飾っている。

期待はずれだったのは支部活動であった。農事の繁忙などで会合が流れることが多く、研究会活動は個人活動が主となって行った。三十九年、「石狩町文化財保護条例」が制定された。同年、現在の花川南地域に大規模住宅団地の開発が進められることとなり、同地域の紅葉山遺跡調査が教育委員会主体で実施された。郷土研究会はこれに全面的に協力した。

四十年代の石狩町は、歴史の分水嶺に立った時代で、農漁業のまちから都市化を指向したまちに変貌するため激動した。大規模住宅団地と石狩湾新港地域の開発事業、それに加えて本町と八幡町の石狩川築堤工事などが相次ぎ、三百戸を超える住宅の解体移転と学校の開閉校・寺社の移転など集落の大移動があった。会員は、生活産業道具・歴史資料の収集保管に奔走し、それらの物は公民館・資料館・了恵寺に集められた。会の活動が低下した矢先に道文化財保護協会の石狩支部に組織換えして新発足との話があり、協議を重ねたが見送りとなったのが四十二年。四十二年には『石狩弁天社史』を発行し、同年十二月に同社が町文化財第一号に指定され、会の活動にもはずみがついた。翌四十三年の開町百年記念事業への参加協力では、展示会場の一部に郷土コーナーを設け土器や歴史資料を展示して町民に好評を得た。

その後は会員個々の研究が主となり、会の活動は関係行事への参加協力を留まり、五十年の会員数は十五名、

五十四年には十名と減少した。この打開策として会誌『いしかり暦』を発行したのが五十五年で、二百部発行したところ、新興団地の花川地域に転住した住民が初めて入会し、会員が二十一名に増加した。会の活動も会誌発行・町外研修・歴史資料の展示など活発になった。

五十八年には山口福司会員が会長に就任。前住地の紋別市での活動を活かし、会のチームワークを図り活動計画を立てた。その成果が各調査班による『石狩の空襲を語りつぐ』（班長青木隆）、『石狩の碑第一輯（集）』（班長金子仲久）である。

他に、長谷川嗣、前川道寛両先達会員の単行本が出版され、次いで『石狩の碑第二輯』と、創立二十五周年記念会誌『いしかり渡船場物語』を発行し、会の郷土研究活動が町内外にクローズアップされた。その後、山口会長が町文化協会会長に就任されたので、平成四年に田中實会長となり石狩俳句史・明治期石狩市街図・交通史の調査班活動が実施された。また、『鎌田池菱と尚古社』（中島勝久著、平成七年三月刊行）、『清雅帖 尚古社連句集』（前川道寛著、平成八年三月刊行）を発行した。平成八年、「市制施行記念歴史パネル展」を市役所ロビーで開催し祝意を表した。さらに、町歴史写真集刊行事業の写真収集や女性史年表研究調査に着手、市教育委員会発行の『ふるさといしかり』誌の朗読テープの作成はユニークな活動であった。同年に高木憲了会員が会長

に就任、同会長は創立会員として活動歴が長く、文芸や美術面での豊かな経験を活かして「北海道・東北史研究会石狩シンポジウム」を成功させ、コレクション鑑賞なども実施した。十一年秋、石狩市郷土研究会は石狩市民芸術文化賞を受けた。翌十二年三月、「結成四十周年記念・市民芸術文化賞受賞記念 石狩の詩情展」を開催し、石狩川河口地区と防風保安林の絵画と詩歌を集めて展示し、他の文化団体との交流も深めた。

十四年三月、『石狩町女性史年表』（駒井秀子著）が発行された。これら一連の数多い出版物は発足時からの市・教育委員会のご理解と力添えに寄るところが大きい。平成十五年、会長は村山耀一会員にバトンタッチされた。毎月の例会のほかに古文書研修チーム、石狩の碑調査チーム、創立四十五周年記念誌の編集チームを設け、それぞれ活動している。さらに、市民向けの公開講座を開催した。平成十五年末月現在の会員は三十二名である。今後は、石狩市の未来の生活に繋がるためにも、この地に住み慣れ風土に染まった会員と、昭和四十年代から来住した会員のしがらみのない史観、フレッシュな感覚、まち造りへのエネルギーを結合させた郷土史の追求と研究が一層大切と思われる。

（文責 田中實）  
（注）初出・石狩市広報「広報いしかり」八月号二〇〇二年所収を加除した。

## 第二章 活動の記録

平成十六年三月、石狩市郷土研究会は創立四十五周年を迎えた。前項でこれまでの活動概要を述べたが、その道は決して平坦ではなかった。活動が停滞した時期もあったが、こうした状況を乗り越えられたのは、会員各自の「石狩の歴史を知りたい」という強い思いがあったからである。

ひとつのグループが、四十五年間も続いてここに「在る」ということは稀である。リーダーのためまない努力や会員同志の親交のほかに、会の運営にその秘密がかくされているのかもしれない。

「活動の記録」の項では、会の運営内容を例会・研修会・調査と研究活動・通信「いしかり暦」の発行・刊行物の項に分け年代順に追った。さらに、単発的に企画された行事や外部団体との連携として、公民館まつりや石狩市文化祭への参加なども付け加えた。但し、資料が少ない時期については、月日順を主とした。

創立から昭和五十年までを第一期、五十一年から六十二年までを第二期、六十四年・平成元年から十五年までを第三期として分け活動経過を記した。

### 第一期 創立(昭和三十五年)から昭和五十年まで

#### 石狩町郷土研究会創立以前

石狩町郷土研究会が設立されるまでの間、石狩町役場職員や町内在住者のなかに石狩の歴史について関心を持つ人たちがいなかったわけではない。日常生活に追われ、グループを作り組織として調査、研究するまでに至らなかっただけである。

高岡地区の畑から石器が出ているという農家の人たちの声を聞けば、それを調査しなければならないと考え、それを肯定するように昭和三十三年十一月三日、北海道学芸大学(現在の北海道教育大学)の河野広道教授が訪れ高岡地区の遺跡調査の後、「保護することの大切さ」を説いた。

この日は、第四回石狩町文化祭が石狩中学校を会場にして開催されており、展示会部門には「郷土文化資料」として町内から出土された土器や石器、石狩町の地質や変動した海水面や陸地の図表が展示された。

また、十一月、調査研究を続けてきた『石狩町年表』が、当時、道石狩地区農業改良普及所長であった田中實会員(石狩町出身)によって執筆され発行されている。

翌三十四年九月二十一日、北海道大学医学部解剖学教



室医学博士の大場利夫氏が、高岡地区を遺跡調査のため訪れた。

この調査は、石狩町教育委員会と石狩町郷土研究会（設立準備会）が主体となって進められたもので、調査には青木隆・高木憲了・田中實各会員も参加している。

「石狩町遺跡予備調査概要」によれば、次のような結果を得た。

「調査概要」採集せる土器及び石器を観察した後、高岡地区の遺跡を視察して、次の結果を得た。

1 年代的には、縄文文化中期の円筒式文化以降、後期の野幌式晩期の前北式、亀ヶ岡式及び続縄文期の後北式の各年代のものが見られる。

2 文化の系統としては、南方的要素（円筒式、亀ヶ岡式）北方的要素（北筒式、前北式）などが見られるが、これらの交流型もある。また、円筒式の一型式で石狩式とも言われるような独自なもので、道内では目下、岩内・柏木・北村・厚真村などだけに分布が知られている種類のものもある。

3 石狩町全域殊に石狩川の北岸地区に於ける遺跡の分布状態と土器・石器の出土から推察すれば、本地帯には縄文時代の各年代にわたって住居が営まれており、そしてかなりの集落が構成されていたものと思われる」

また、同年、石狩町教育委員会の青木隆会員が主体となって道から高野専門技術員を招き、海浜植物調査が行われ、ハマナス・ハマボウフウ・ハマニンニクなど約三〇〇種があったことが記されている。

このような状況のなかで「石狩の歴史を知る」機運が町民の間で高まり郷土研究会設立への準備が着々と進められていった。

「石狩町広報」第94号（昭和三十五年二月一日付）には、会員募集の記事と高岡から出土された石器や土器の写真が掲載されている。引用文が長くなるが、当時の意気込みが伝わってくるので記すことにしよう。

「石狩町郷土研究会をつくります」私たちの町の歴史を正しく理解し明日への指針にしましょう（見出し）」

私たちの住む石狩町の歴史は、北海道開拓史の一頁ともいえる位に、重要な役割を占め、古くからの伝統と多くの文化財とを持っており、豊かなる自然は町民の「生活源」であると共に「憩いの場」でもあります。

私達町民は、この郷土に寄せる親愛感を、ほんとうの郷土愛にまで発展させるべきであることは、云うまでもないことでありますが、其のためにまず、郷土石狩の歴史的、風土的、社会的な環境をよく知り、そして古きにおいて、営々辛苦を重ねて今日を築き上げた祖先の業績を学ぶことによって明日への正しい指針を求めることが

大切であろうと思われます。

また、遠い昔から色々な時代の移り変わりに沿って、幾たびかの困難な変遷を過ごしながら、現在まで残ってきた文化財は、それぞれ郷土の過去を知る上に貴重な価値をもっておりますだけに、これを正しく理解し認識し、愛情をもって保護保存につとめ後世に正しく残さなければなりません。

それでは町内の文化財としてどんなものがあるか？いまままでに判明したことやこれから調査研究したらよいと考えられることを述べてみますと、まず、先史時代の遺跡が南線紅葉山から手稲町境界にかけて、或いは高岡地区に数カ所、その外にもたくさん発見されております。昨年秋季に北大の大場講師に予備調査をしてもらいました。これらの地帯には五、六千年以前から各年代にわたって引き続き住居が営まれ、そしてかなりの集落が構成されていたと考えたと発表しております。

このような遺跡はみだりに発掘することが法律で禁ぜられておりますので、町教委では今春雪解けを待つて正式な手続きのもとに専門家の指導による発掘調査することを計画しています。

その外にも鮭の漁場として古くから栄えた当町では、社寺や旧家その外いろいろな方面に往時を知る上に貴重なことがありますが。

また、各部落に祖先が入植した当時のことや開拓の状況なども正しい記録にして関係の資料などと共に後世に残したいものです。

さらにあまり一般的に関心を向けられておりませんが、西浜地区から銭函に至るまで五里の長さにわたるカシワは海岸の純林として本道で最も代表的であることや、ハマナスを始め数多くの海浜植物も、他の海岸では見られない豊富な植物群として専門家の認めるところであり、私達が今まで眼についていても気がつかずにいたことも、よく観察すれば非常に興味深く、価値の大きいことを発見する場合があります。

町内には今まで郷土文化研究のための正式な組織がなかったので田中實、高木憲了、鰻目幸次郎の諸氏が何年もの間にいろいろ資料を集め調査をされ、そうした努力による成果の一部分を町の文化祭に発表して戴いてきました。

この活動を今後は一層、伸張活発化させ石狩町のよりよき繁栄に資するため前記の諸氏と町教委では御相談を致しまして、「石狩町郷土研究会」を正式に発足させ町内多くの人達によつて次のような会としての活動を行いたいと思ひますので、どうぞ御賛同の上、多数御入会下さることを切望致します」

## 昭和35年

### 石狩町郷土研究会創立

昭和35年

3月30日 石狩町郷土研究会が創立された。8支部、会員は74名。会則が決まり(別の項に詳細あり)

年会費一〇〇円。

3月30日 大場利夫講師の講演会「石狩町の古代遺跡について」を、郷土研究会創立総会の後に開催した。

石狩郷土研究会創立総会が、三月三十日午後一時より石狩中学校を会場にして開催された。議題は創立までの経過報告と会則の決定、役員の選出、三十五年度の事業計画及び予算について——である。石狩・志美・花川・南線・樽川・生振・高岡・五の沢・石狩東の八支部からなり、活動予定は

- 1 町内古代遺跡の発掘調査
- 2 石狩海浜植物の調査と発表
- 3 「古老談話集」の編集
- 4 社寺・その他文化財の調査と「町内文化財台帳」の作成
- 5 風俗習慣に関わる調査及び資料等の作成
- 6 各支部内における入植以降の歴史及びその他参考事

項の調査であった。

会長／花田知也、副会長／若林清作、理事／田中實・高木憲了・青木隆・石黒善次郎・鰻目幸次郎の各役員を選出した。

4月14日 石狩町郷土研究会石狩支部の総会が役場会議室に於いて開催され、事業計画などを検討した。

4月27日 石狩町郷土研究会石狩支部の例会が開催され、各サークル別の事業計画が話し合われた。石狩支部の会員は三十三名で、その事業名と内容の詳細は次の通りである。

- 1 古老談話集  
鮭盛漁時代の石狩の思い出話を談話形式にして編集する。テーマは鮭漁・漁場・漁夫・先住民アイヌ・遊廓・建造物・交通・輸送・火災
- 2 神社・仏閣などの調査及び資料蒐集  
神社・仏閣等についての建造・書跡・彫刻・工芸品・古文書・その他歴史的な事項等の調査と資料蒐集  
(例) 写真撮影、その他
- 3 交通と運送及び渡船場に関する変遷  
水路、陸路の交通や運送並びに渡船場についての変遷調査と資料蒐集  
(例) 弁財船・川崎船・茨戸丸・臯月丸・駄鞍馬・馬鉄車・渡船場の民営、町営、国営について

#### 4 官公庁・会社・学校・団体医療機関などの調査

灯台・郵便局・警察署・役場・学校・病院・金融機関  
・会社・消防・治水・孵化場・水難救済会・青年婦人  
団体・その他の沿革調査

#### 5 海浜植物及び動植物の生態

海浜植物の調査及び標本、スライド製作。その教育的  
観光的な利用。野性・自生の動植物の調査・渡り鳥・  
回遊動物の調査・鮭の回帰性についての調査

#### 6 人情・風俗について

盆踊り・泥炭・衣服類の特色・食事、料理の特色・住  
まいの特色・方言

遊廓、料理店の変遷・小説や映画及び歌などに現れた  
石狩のことがら・明治・大正年間のヤン衆の生活動向  
・焼き魚・子供の歌や遊び

#### 7 産業の沿革

漁獲（方法・収入・品種）、加工（新巻・筋子・飯す  
し・佃煮・燻製・焼きガレイ・缶詰）

#### 8 町政一般の沿革

人口、戸数の推移・町行政上の主要事項・町内行事の  
主要事項・町内主要企業などについて・火災・水難・  
空襲・事故・事件

以上、これらを調査するため、事業別担当者を決めそ  
れぞれが活動するように話し合った。

#### 昭和36年・昭和37年

昭和三十六・七年度は個人と各支部活動が主となり、  
会としての例会や研修会は開催しなかった。三十七年度  
の石狩支部例会を列記すると次の通りである。

昭和37年

10月10日 例会を役場に於いて開催した。

10月25日 例会を能量寺で開催し次のことを話し合った。

①開町一〇〇年記念式典を目途に資料の収集  
をする

②統計を取り纏める

③文献の整理と配付

④石狩町内の文化財を写真集または文集にす  
る

⑤高岡・五の沢地区の住宅を調査する

12月1日

例会を能量寺で開催した。「古老談話」とし  
て聞き取りした宮森要三郎さんの昔話（聞き  
取り者／藤井隆会員）のテープ録音を聞いた。

#### 調査と研究活

郷土研究会石狩支部の活動として、町内に在住してい  
る古老者の宮森要三郎さんほか十七名を、藤井隆・篠山  
孝義・石川厚信・田中實・飯尾田仁会員がそれぞれ分担

して聞き取り調査をした。また、海浜植物の調査については、その標本づくりが町教育委員会職員によって大きな成果を上げた。

## 昭和38年

郷土研究会の活動が停滞した。会の創立総会に決められた八支部は農業に従事している会員が多いため農繁期は仕事に追われ、例会が流れてしまうことが多かった。

また、会員のなかの役場や教育委員会職員は、職場の業務として「郷土研究・調査活動」をするため、個人活動が主となった。

そのような状況のなかで、昭和三十八年、生振中学校創立十周年記念の企画として「郷土開拓資料展」が前川道寛会員を中心として進められた。この資料展は町民に大好評を得て、その後の石狩町文化祭展示部門への出品へと繋がっていった。

十二月一日、石狩町企画課と石狩町教育委員会が、北海道史編集室の永田富智室員を招き、石狩弁天社の調査を実施した。

## 昭和39年

昭和三十九年四月二十日、南線地区発展期成会会員と内外緑地(株)との間で土地売買契約が調印された。札幌市郊外の大規模団地としての造成が始まり、四十年九月から第一次分譲が開始された。石狩町が漁業や農業の町から都市化指向をめざし、変貌しようとしていたなかで、文化財の保護が大きな課題となった。

9月1日 石狩町文化財保護条例が施行された。

11月2日 石狩町文化祭に郷土資料を展示した。

この年 石狩支部会員が聚富川流域の遺跡調査を実施した。

## 昭和40年

5月7日 石狩支部会員が、石狩弁天社と金龍寺の遺物を調査した。

6月13日 郷土研究会会員と町教育委員会で、高岡の伊藤清氏の畑の遺跡を調査し、農作業に支障があるを集積した埋没地から多数の土器・石器を掘り上げ、教育委員会に納めた。

11月3日 石狩町文化祭に会員が出品した。

11月28日 厚田村聚富小学校の藤村久和先生が、聚富川

流域の遺跡と若生町の旧石狩役所跡調査の件で来町した。

12月27日 北海道史家で詩人の更科源藏氏が来町し、石狩町の地名調査について石狩支部会員から聴取した。

この年、石狩町社会教育委員会に部門制が敷かれ、総務部に郷土研究会の長谷川・前川両会員が、郷土部門に高木・田中両会員が就任した。

## 昭和41年

3月1日 北海道の開拓記念物調査が実施され、高倉新一郎氏が石狩町を訪れた。

4月10日 聚富川流域遺跡調査等の件で藤村先生が来町し打ち合わせをした。

4月21日 40年8月に、生振村四線で発見されたアイヌの人骨などについて、北大の児玉作左衛門名誉教授と北海道・石狩支庁・町教委・郷土研究会が調査にあたった。合わせて村内の古建築物・吉田光義氏所有地出土の土器・石器を調査した。

4月21日 郷土研究会会員と町教育委員会で高岡の伊藤清氏畑の遺物を調査した。(5月29日・9月

18日も実施)

7月1日 石狩町文化財保護委員に関する規則が施行された。

7月30日 石狩町第1回文化財保護委員会が開催された。委員8人中に郷土研究会の花田知也・鰻目幸次郎・長谷川嗣・前川道寛・高木憲了・田中實各会員6名が委嘱された。

9月1日 町文化財保護委員が約5時間にわたって石狩弁天社を調査した。

9月24日 小樽市博物館一行約25名が石狩弁天社と史跡などを見学するため来町、郷土研究会会員が案内説明にあたった。

10月28日 石狩海浜の天然記念物(西浜―小樽内川間のカシワ林を主とする埴生調査)に道文化財委員の今田敬一氏・田川隆氏及び道教育庁文化財保護係員が来町し調査にあたったため、郷土研究会会員と町教委職員が案内した。

11月16日～18日 高岡地区段丘・平地の遺跡調査に札幌医科大学の三橋教授、星園高校の藤本先生ほか来町、町教委職員と郷土研究会会員が案内説明にあたった。

## 昭和42年

会主体の活動が停滞し、町各地域での活動や、委嘱された各種委員会における会員としての立場での活動が多かった。

2月4日 第1回石狩町史編さん委員会が開催され、長谷川嗣会員が委員として出席した（事務局長は田中實会員）。

2月5日 南線地区部落史編集会議が開催された（高木憲了会員ほか参加）。

6月6日 町教育委員会・文化財保護委員会等による南線地区（紅葉山旧砂丘3カ所）と生振地区の遺跡調査を実施した。

8月21～25日 南線地区旧砂丘の埋没文化財調査を町教育委員会主催で実施し、郷土研究会も参画協力した。指導者は峰山巖氏と藤本英夫氏、協力は札幌医大、花川中、樽川中、石狩町青年団体連絡協議会であった。

9月4日 役員会で今後の郷土研究会活動について話し合われた。「いままでの組織を10月末で発展的に解消し、11月3日に新組織を発足させる方向でいきたい」との町教委担当主事の提案について話し合った。会への町補助金は『石狩弁天社史』の発行と紅葉山遺跡発掘のため

に支出することも話し合われた。

9月15～20日 石狩町大字樽川村南5線142番地・樽川村南5線299番地・樽川村南6線359番地の3カ所で遺跡発掘調査が実施された（発掘責任者は町教育委員会）。後援団体・発掘参加団体として郷土研究会も名を連ねた。とくに、高木憲了会員の協力は大きかった。

10月1日 役員会において、これからの郷土研究会は、「北海道文化財保護協会石狩支部」として発足することが望ましいのではないかと話し合われた。

11月3日 町文化祭が花川小学校で開催され、郷土室に出品した。

11月4日 新組織の準備会を開催した。「町の文化財保護について」・「北海道文化財保護協会について」北海道文化財保護協会藤本英夫幹事、北海道教育庁山田係長の説明があった。

11月14日 紅葉山旧砂丘の品川遺跡と海岸防風林のカシワ林地調査に道教委文化財保護係長ほかが来町、郷土研究会会員が案内説明した。

11月18日 役員会を社会福祉センターに於いて開催し、郷土研究会の再発足についてや事業計画について話し合われた。総会は43年1月下旬に開催する予定とした

12月22日 町教育委員会は石狩弁天社を町文化財第一号に指定した。

(注) 北海道文化財保護協会石狩支部への改組は諸状況の変化により取り止め従前どおりで進むことになった。

#### 刊行物

10月5日 石狩町郷土資料第二輯『石狩弁天社史』が発行された。執筆者は田中實会員（発行／石狩町教育委員会・石狩郷土研究会）。

### 昭和43年

1月15日 町内出土の土器・石器の調査に、道教育大学の岩崎氏、畑氏が来町した（町教委保管品・田中会員所蔵品）。

3月1日 『石狩町年表』が発行された。執筆者は田中實会員（発行／町史編さん委員会）。

4月13日 若生遺跡の調査が実施された（調査員／田岡克介氏・田中實会員）。

6月16日 道教育委員会と町教育委員会が進めていた紅葉山遺跡の発掘調査現場で一七〇〇〜一八〇〇年前の住居跡が発見された。

7月24日 町文化財保護委員会第1回会議で、町内の農業・漁業及び商業関係等の開拓記念物を収集

することに、郷土研究会の全面的な協力を要望された。

8月1日 沢登道文化財保護委員ほか来町し、本町の社寺を調査した。郷土研究会会員が案内した。  
12月11日 長谷川嗣会員から「石狩川河口文化研究会」の開催方について提案があった。

石狩町開町百年記念町民文化祭への参加

8月30日～9月1日 開町百年記念町民文化祭が開催され、石狩中学校会場に於いて、郷土コーナー「石狩町過去展・未来展」と題して研究成果を展示した。

### 昭和44年

激動の町政に対応する町施策の実施に係わる郷土研究会会員が多いため、会としての共同活動は停滞気味で、研究テーマを持った会員の個人活動が主となった。

7月6日 伊達邦直主従一行の厚田村シップ仮住まい跡、伊達専用棧橋跡の調査に、当別町史編集委員



の坂田資宏氏ほかが来町したため、郷土研究会会員が対応した。

8月1日 石狩の俳句結社である「石狩尚古社」から発行された俳句集『尚古集』（明治四十三年に発行）が中島家（中島勝久会員宅）から発見された。このことは、その後の前川道寛会員の石狩町における俳句史研究に大きな幸運をもたらした。

11月1日 石狩町文化祭に郷土研究会が出品した。

11月5日 道開拓記念館の沢道専門員ほか、鈴木信三氏コレクション、寺社等を調査のため来町、郷土研究会会員が対応した。

## 昭和45・46年

会の資料が無いので活動状況は不明であるが、関連する事項を挙げると次の通りである。

45年

6月1日 町内建造物緊急調査（明治末期までの建造物）のため道文化財専門委員遠藤明久氏一行が来町、郷土研究会会員が対応した。

6月12日 町文化財保護委員（郷土研究会会員が主メンバー）が、本町地区の建造物を調査した。

46年

11月1日～4日 石狩町文化祭に郷土研究会会員が出品した。

この年 生振村の生振治水工事跡から貝の化石が発見され、北海道開拓記念館赤松守雄氏の調査により、石狩低地帯の自然層から貝が発見されたのは初めてという結果を得た。前川道寛会員が案内し対応した。

## 昭和47年・48年

会の活動記録がないので、関連事項を記すと次の通りである。

47年

5月30日 北海道教育委員会石狩教育局主催の「石狩管内文化振興会が札幌市で開催され、石狩町郷土研究会の田中實会員が「石狩町域の石狩湾新港開発にともなう遺跡・開拓記念物調査の現況」について発表した。

5月1日 町文化財保護委員は、花田知也・長谷川嗣・前川道寛・高木憲了・沖本義尚・鰻目幸次郎・田中實の7名（定員8名中1名欠員）で、全委員が郷土研究会会員であった。

11月3 / 5日 第17回石狩町文化祭が青少年会館において開催され、生活展のなかに高木憲了・前川道寛両会員の「特別コーナー」が設けられた。このコーナーには、鮭漁で栄えた本町地区の商家の諸道具や生振治水跡から発見された貝が展示された。

この年 前川道寛会員ほかが生振地区貝類包含層の調査をした。

48年

2月1日 町文化財保護委員会で、町内の開拓記念物等の資料作成について協議した。これにより教育委員会は、町内各地域に開拓記念物収集協力員を委嘱した。

8月8日 役員会を開催し今年度の研究会活動について話し合った。

①郷土に関する資料の収集

②町広報紙・教育広報紙・展示会など通じて郷土史の関心を高める

③郷土資料館建設を促進する母体となるよう努力する

9月20・21日 北海道立図書館・石狩町公民館主催による「昭和48年度第2回古文書解説講座」が石狩公民館に於いて開催され、会員がそれぞれ参加した。講師は北海学園大学学長高倉新一

郎氏、2日目の石狩湾周辺研究会の講師は同前、説明は郷土研究会会員の長谷川嗣・田中實両会員であった。

10月15日 石狩町文化協会が設立され、設立と同時に団体加入した。

11月2 / 4日 第18回石狩町文化祭が青少年会館において開催された。郷土研究会会員が石狩町文化協会の副会長（前川道寛会員）、理事（高木憲了・田中實・花田知也各会員）に就いていることもあり、文化祭の行事にそれぞれの立場で協力した。

昭和49年

2月20日 前川道寛会員が執筆した『石狩町俳句小史』（発行／石狩町郷土研究会・生振村史編集委員会）を発行した。

6月22日 / 10月16日 八幡町遺跡発掘調査に協力した。

10月14日 石狩町文化祭への協力について話しあった。

10月22 / 24日 開拓記念物の収集と整理にあたった。

10月29日 「開拓記念展」の展示を設営した。

11月2 / 4日 石狩町文化協会主催で第19回石狩町文化祭が開催されたことに伴い、郷土研究会は郷

土の歴史を物語る生活用品一五〇点余りを「開拓記念展」と題し、石狩町社会福祉センターに於いて展示した。また、森山軍次郎教授の講演会に協力した。

11月4日 「郷土の歴史」と題して専修大学北海道短期大学教授森山軍次郎氏が講演した。

## 昭和50年

調査と研究活動として、次にあげるものを計画し進めた。

- 1 八幡町遺跡分布調査の協力
- 2 開拓記念物収集及び整理（目録を作成すること）
- 3 石狩町郷土館建設調査の協力
- 4 八幡町遺跡資料の教育的活用
- 5 埋蔵文化財の保護及び啓蒙
- 6 埋蔵文化財分布台帳の整備協力
- 7 石狩町「花と木」の制定協力

8月8日 弁天社及び生振仮収蔵庫を視察。北海道開拓記念館三野・氏家両学芸員を招き、石狩町文化財資料整備に伴う事前研修会を行った。

研修会は、郷土研究会会員と文化財保護委員を対象に

して開催され、その趣旨は「石狩町内における生活文化財の収集及び整理方法と町指定文化財の石狩弁天社の老朽化に伴う保存対策について検討し、今後の石狩町の文化財、保存保護の指標にしたい」というもの。午前十時に福祉センターへ集合の後、午前中は弁天社・生振仮収蔵庫を視察した。午後一時から三時までは生振公民館に於いて

①弁天社保存対策について

②生活文化財分類整理法について

の二点について、開拓記念館学芸員のお話を聞き、今後の課題として「石狩町は、地域開発と生活の急激な変化により、生活文化財の収集の緊急性を感じ昭和47年度から収集を始め現在、相当数の資料が集められている。しかし、基礎的な作業が進んでおらず、次の二点が重要な課題である」とした。その二点とは、

1 資料の基礎的データを作る

2 分類・整理方法を確立する

ということ、早急に対処しなければならないことを確認した。

第二期 昭和五十一年から六十三年まで

昭和51年度 (昭和51年5月10日～昭和52年6月15日)

1 例会

会員の個人活動に重点がおかれ、会としての活動が停滞し例会が開催されなかった。

2 研修会

活動が停滞し研修会が開催されなかった。

3 第21回石狩町文化祭を共催

第21回石狩町文化祭が十月三十一日～十一月三日まで花畔村の青少年会館に於いて開催された。従来は、石狩町文化協会が中心となって町文化祭実行委員会が構成され運営して来たが、今年度は郷土研究会が主催者側に加わり、石狩町文化協会と石狩町郷土研究会が共催して石狩町文化祭が開催された。

10月31～11月3日 展示部門に「郷土遺跡展」と題して八幡町遺跡から出土された遺物を中心に町内

から発掘された土器や石器を展示した。  
11月3日 文化祭の催物部門では「郷土を語る会」を開催し、八幡町遺跡のスライドを映写した。また、「遺跡がつぶやく石狩のあゆみ」と題して北海道大学助教授吉崎昌一氏の講演もなされた。

11月3日 文化祭の催物部門では「郷土を語る会」を開催し、八幡町遺跡のスライドを映写した。また、「遺跡がつぶやく石狩のあゆみ」と題して北海道大学助教授吉崎昌一氏の講演もなされた。

昭和52年度 (昭和52年6月16日～昭和53年4月25日)

1 例会

個人活動に中心になり、会としての活動が停滞したため例会が開催されなかった。

2 研修会

個人活動が中心となり研修会がもたれなかった。

3 調査と研究活動

北海道開拓記念館が進めている石狩町内の開拓記念物の調査と収集について協力した。調査カードを九月までにとりまとめるように努めた。

6月16日 総会のあと浜町の相原家倉庫の鮭建網漁具を調査した。

この年の収集品171点、樽川開拓資料館収蔵目録の収集品206点。また、個人的には、小西茂会員が「花畔墓地考」を、長谷川嗣会員は「町村の始まり―総代人会議に就いて」をテーマにして研究活動が進められた。

昭和53年度・昭和54年度 (昭和53年4月26日～昭和55年3月28日)

## 1 例会

6月17日 総会で決められた53年度の事業について、具体的な活動についてどうするかを話し合った。

昭和55年  
3月2日 郷土研究会の件について、田中實会員と石橋孝夫会員が打ち合わせをした。

## 2 研修会

個人活動が中心となり、研究会の活動が停滞したため研修会は開催されなかった。

## 3 調査と研究会活動

昭和55年

3月10日 金子仲久会員所蔵の「金子家文書」の調査を田中實会員が実施した。

通年して、北海道開拓記念館が進めている開拓記念物の調査と収集への協力を努めた。また、石狩町教育委員会が進めている『石狩町の文化財 ①大昔のいしかり』（発行は昭和五十五年三月二十七日）の編集に協力した。

## 4 文化協会設立5周年の表彰

第23回石狩町文化祭が昭和五十三年十一月三日から五日まで花畔の青少年会館・老人憩いの家・花川中学校の三会場で開催された。文化祭総合開会式場において、文化協会設立五周年記念にあたり功労者として前川道寛会員が表彰された。

11月3日 文化協会設立五周年功労者として前川道寛会員が表彰された。

前川道寛会員は協会設立時から副会長としてその任務にあたり、また石狩町の俳句歴史研究にたずさわり『石狩俳句小史』を発刊、その後、二十一年間にわたる研究の成果を『石狩俳壇誌』に纏めて出版した。石狩町文化史における貴重な一面を発掘したものと評価された。

## 5 第24回石狩町文化祭への参加

第24回石狩町文化祭が昭和五十四年十一月三・四日と十一月十・十一日の二回に分けられて、町内五会場に於いて開催された。

11月10日・11日 企画展「石狩歴史散歩」で、石狩弁天社の紹介と郷土資料展(旧隔離病舎)を開催したため、資料の収集と展示に協力した。

また、石狩町文化協会が第24回文化祭事業の一環として『いしかり歴史散歩』(発行は昭和五十四年十一月三日)を発行することになり、その編集に協力した。

## 昭和55年度 (昭和55年3月29日～昭和56年7月17日)

### 1 例会

4月15日 総会で決まった55年度の事業にもとづいて具体的な活動について話し合いをした。

- ① 研究会会誌の発行
- ② 個人研究の発表
- ③ 町内に在住する古老談の採集
- ④ 郷土資料の収集

また、役員体制とそれに伴う予算についても話し合われた。

6月9日 郷土研究会機関紙の発行について、6月末日まで今まで研究してきたものを集め、編集することが話し合われた。

7月19日 郷土研究会機関紙(会誌)出版に伴う予算について話し合った。

9月22日 『いしかり暦』創刊号の配付と、今後の活動について話し合った。

11月24日 『いしかり暦』第2号の編集について話し合った。

昭和56年  
1月18日 道立文書館設置に関する要望書の提出について／『いしかり暦』第2号の原稿について／56年度事業についての要望を次回までに提出することなどを話し合った。

### 2 調査と研究活動

会員が個人的に調査し研究してきたものについて、発表する場として『いしかり暦』の発行が検討されてきたが、八月に創刊号が発刊された。内容については別の項に譲るが、研究対象が多岐にわたっていることがわかる。また、郷土研究会独自の調査ではないが、会員が教育

委員会とタイアップして調査した事業は次の通りである。

4月23日 石狩弁天社再調査について打ち合わせをする。

4月28日 石狩弁天社の調査を開始する（花田知也・田中實・石橋孝夫各会員）。

5月20日 親船町共同墓地の調査（田中實会員）。

7月16日 若林清作氏（89歳）を訪問し聞き取り調査をした（田中實会員）。

7月19日 尚古社俳句資料について話し合う（前川道寛・田中實両会員）。

7月28日 尚古社俳句の件について打ち合わせ（前川道寛・田中實両会員）。

3 刊行物

昭和55年

8月30日 『いしかり暦』創刊号を発行した。

昭和56年

3月31日 『いしかり暦』第2号を発行した。

4 開拓の歴史聞き取り調査への協力

十月二十九日、開拓の歴史聞き取り調査（石狩町教育委員会主催）が樽川公民館において開催され、その調査の協力をした（福田佐市会員・田中實会員）。聞き取り

は座談会形式でカセットテープに収録された。

調査の内容

①樽川地区の酪農の発生、当時の模様と発展

②砂地水田の試験栽培と成功について

5 「石狩ふるさと教室」への協力

昭和五十六年一月八・二十二・二十九日、「石狩ふるさと教室」（石狩町教育委員会主催。五十五年十二月四日より六回の講座）が開催され、田中實会員が三回を受け持ち協力した。内容は次の通り

1月8日 石狩場所経営と村山家／弁天社と村山家／旅行者、探検家が見た石狩

1月22日 石狩町の成立と街のにぎわい／集団移民による開拓と開拓者の生活／ファンゲントラのお雇い外人と石狩／弥生社・尚古社の俳句活動

1月29日 昭和の石狩の世相／石狩空襲

昭和56・57年度（昭和56年7月18日～昭和58年8月

28日）

1 例会

活動が停滞し例会は開催されなかった。個人研究にとどまり、その結果は『いしかり暦』に発表された。

2 研修会

昭和56年

9月20日

町外研修―札幌市今井デパートに於いて「北海道文化財展」が開催されたので、自由参加による見学をうながした。石狩町から「関羽正装図」（額絵）が出品された。

3 刊行物

昭和57年

1月30日 『いしかり暦』第3号を発行した。

昭和58年度（昭和58年8月29日～昭和59年7月5日）

1 例会

昭和59年

1月28日

『空知集治監初代典獄／渡辺惟精の日記』からみる空知・宮城・三池監獄裏面史について  
―発表者 長谷川嗣。

2 研修会

研究会の活動が停滞し研修会が行われなかった。

3 刊行物

昭和59年

2月25日 『いしかり暦』第4号を発行した。

4 第28回石狩町文化祭への参加

10月9・10日 第28回石狩町文化祭が花川北中学校で開催され、「目でみるふるさとの歩み展」と題するパネルを出品した。



昭和59年度 (昭和59年7月6日～昭和60年6月24日)

1 例会

60年

3月25日 駒井秀子会員が転居することになり、送別会を開催して例会にあてた。

2 研修会

9月16日 町内研修―生振村春光寺を見学した。

10月28日 町外研修―浜益村郷土館を13名の会員が参加し見学した。

3 研究会通信「いしかり暦」の発行

会員相互の連絡を密接にするため、おしらせ版「いしかり暦」を発行することにした。

4月5日 おしらせ版「いしかり暦」No.1号を発行した。

昭和60年度 (昭和60年6月25日～昭和61年4月25日)

1 例会

8月10日 石狩空襲の記録と、町内の石碑などの調査について打ち合わせをした。

9月21日 石狩空襲の聞き取り調査の中間報告―発表者 青木隆／『いしかり暦』第5号の発刊報告と配付について―報告者 石橋孝夫／個人研究誌『石狩俳壇誌』の編集―報告者 前川道寛。

10月5日 生振地区の石碑の調査を行った。

11月30日 石碑調査・石狩空襲調査の中間報告・『いしかり暦』第6号の編集について話し合った。

12月21日 『いしかり暦』編集委員の選出・『石狩俳壇誌』の頒布について・「北の朗唱1986」後援について話し合った。

昭和61年 1月25日 新年会を兼ねた例会を開催した。

2月15日 前川道寛会員が出版した『石狩俳壇誌』出版記念会が茨戸ガーデンに於いて開催され、その出席をもって例会とした。

3月28日 昭和61年度の事業計画―主に石狩町内の石碑と石狩空襲の記録を話し合った。

## 2 研修会

7月13日 町内研修―了恵寺宝物を見学、14名が参加した。

10月20日 町外研修―当別町開拓記念館・伊達別邸と月形集治監を見学した。

## 3 調査と研究活動

年間を通し、町内の石碑などの調査と石狩空襲の聞き取り調査が行われ、例会で調査の進行状況が中間報告された。

## 4 研究会通信「いしかり暦」の発行

7月1日 おしらせ版「いしかり暦」No.2号を発行した。

7月31日 おしらせ版「いしかり暦」No.3号を発行した。

9月7日 おしらせ版「いしかり暦」No.4号を発行した。

9月30日 おしらせ版「いしかり暦」No.5号を発行した。

## 5 刊行物

8月1日 『いしかり暦』第5号を発刊した（奥付は60年3月31日）。

昭和61年

3月31日 『いしかり暦』第6号を発刊した。

## 6 第30回石狩町文化祭への参加

第30回石狩町文化祭が十一月三・四日の両日、花川北中学校に於いて開催された。郷土研究会は「郷土資料展」と題して石狩の昔を知るパネルを展示した。

昭和61年度（昭和61年4月26日～昭和62年5月28日）

## 1 例会

5月24日 新年度事業の打ち合わせ・石碑調査について。

7月19日 石狩町内の石碑と石狩空襲についての調査を打ち合わせた。

8月2日 石碑及び石狩空襲の調査費用について話し合った。

10月18日 渡船記録映画の試写をした。

11月17日 石碑調査の編集会議を開いた。

12月12日 石狩空襲調査の編集会議を開いた。

12月23日 石狩町内の碑と石狩空襲について調査した結果を話し合う全体会議を開いた。

昭和62年

4月18日

『郷土シリーズ2 石狩の碑第一輯』と『郷土シリーズ1 石狩の空襲を語りつく』が刊行され、これらの本に対する道からの補助金や販売についての報告・62年度の事業を打ち合わせた。

## 2 研修会

6月21日

町内研修―弁天社・八幡神社ほかを見学した。

9月28日

町外研修―小樽市内・余市運上家跡・博物館を見学した。

## 3 調査と研究活動

会員がそれぞれの調査班に属し、石狩町内の石碑と石狩空襲の調査をした。八月～十一月までは調査、十二月末までに原稿を完成し、翌年一月には印刷所に渡した。各調査班の構成は次の通りである。

### ①石狩町石碑調査班

金子仲久・山口福司・高木憲了・村井喜久司・鈴木トミエ・田中實・吉田重男・阿部徹雄・畑宮清一郎・大島龍・岡崎源次郎

### ②石狩町空襲調査班

青木隆・福田佐市・沖本義久・吉本愛子・前川道寛・高瀬たみ・池田孝夫・川村正三・黒田晶子・吉野惣栄・駒井秀子・石橋孝夫

### ③編集委員

青木隆・金子仲久・山口福司・吉本愛子・田中實・石橋孝夫・花田知也・長谷川嗣

## 4 刊行物

昭和62年

2月28日

『郷土シリーズ1 石狩の空襲を語りつく』を刊行した。一〇二五部、一部八〇〇円

2月28日

『郷土シリーズ2 石狩の碑第一輯―石碑等にみる石狩町の歩み』を刊行した。五二五部、一部八〇〇円

## 5 北海道文化財保護協会へ団体加入

北海道文化財保護協会へ加入した。

昭和62年度 (昭和62年5月29日～昭和63年7月15日)

1 例会

7月20日 石狩町内の石碑調査を打ち合せた。  
9月30日 石碑調査を打ち合せた。  
12月26日 『郷土シリーズ3 石狩の碑第二輯―石碑等にみる石狩町の歩み』の編集を打ち合せた。

昭和63年

3月5日 『郷土シリーズ3 石狩の碑第二輯―石碑等にみる石狩町の歩み』の編集を打ち合せた。  
3月6・12・13・15・21日 石碑の補足調査を行い記録した。

6月3日 『郷土シリーズ3』発刊までの経過 発表者 石橋孝夫／連絡事項 『いしかり暦』第7号の編集について。

2 調査と研究活動

『郷土シリーズ3 石狩の碑第二輯―石碑等にみる石狩町の歩み』を発行するため、例会は編集打ち合わせ会にあてられた。三月には、すでに原稿が整っていたものの、碑の補足調査を行い正確を記すよう努力した。

3 刊行物

4月30日 『郷土シリーズ3 石狩の碑第二輯 石碑等にみる石狩町の歩み』(奥付は63年3月20日)を発刊した。なお、この本は、北の生活文化振興補助金の交付を受けた。

4 石狩管内文化団体協議会への協力

10月25日 石狩管内文化団体協議会(札幌市を除く三市三町三村の文化協会で構成)主催の石狩管内文芸交流大会が花川北コミュニティセンターに於いて開催され、田中實会員が「石狩町の文芸の歴史的背景」について講演した。

昭和63年度 (昭和63年7月16日～平成1年6月23日)

1 例会

11月12日 『いしかり暦』第8号の編集と、石狩町内の渡船場の歴史についての調査と資料収集を話し合った。

12月3日 『いしかり暦』第8号の編集について(故長

谷川嗣会員の特集号)協議する。渡船場の歴史について調査するための体制づくりを話し合った。

平成1年

1月21日 郷土研究会創立35周年記念号について話し合った。

2月18日 『いしかり暦』第8号の編集について、年度内に刊行するよう体制づくりができた。

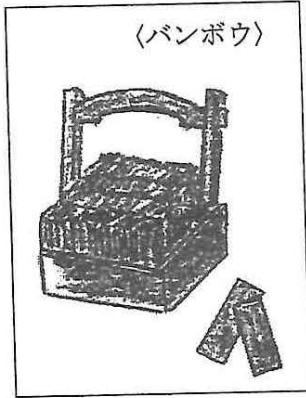
## 2 刊行物

昭和63年

9月30日 『いしかり暦』第7号を発刊した。

平成1年

3月31日 『いしかり暦―長谷川嗣氏追悼号』第8号を発刊した。



## 第三期 平成元年から十五年まで

平成元年度 (平成元年6月24日～平成2年9月30日)

### 1 例会

平成元年

7月8日 郷土研究会創立35周年の記念事業について、花畔分館に於いて打ち合わせた。

### 2 研修会

7月23日 町外研修 北海道開拓記念館特別展「海を渡つた武士団」を見学し、映画「大地の侍」を鑑賞した。参加者は23名であった。

10月21日 町内研修 上花畔1遺跡発掘現場を見学した。

### 3 調査と研究活動

7月～11月 郷土研究会創立35周年記念事業への取り組みとして「石狩町内の渡船場について」の調査を行った。

12月9日 渡船場調査の総まとめを行った。

平成2年

1月～3月 渡船場調査の原稿執筆について、打ち合わせた。

6月4日 「渡船場の歴史について」原稿執筆を打ち合わせた。

4 刊行物

平成2年

9月26日 『創立35周年記念特集号―いしかり渡船場物語―いしかり暦第9号』を刊行した（本の奥付は平成2年3月31日）。目次については別の項による。

5 第34回石狩町文化祭への参加

平成元年

10月13～15日 花川北コミュニティセンターに於いて開催された第34回石狩町文化祭に「石狩町郷土パネル展」と題し、写真などを展示した。

平成2年度（平成2年10月1日～平成3年1月26日）

1 例会と研修会

平成二年度は次の事業を計画していたが、例会がもたれることなく会全体の活動が停滞し、会員の個人研究や調査活動に留まった。

①郷土シリーズ第1号～3号までの販売促進

②会員の拡大

③郷土館博物館の建設促進運動の継続

2 第35回石狩町文化祭への参加

平成2年

10月12～14日 花川北コミュニティセンターに於いて開催された第35回石狩町文化祭に「石狩町の歴史に関するパネル」を作成し展示した。

平成3年度 (平成3年1月26日～平成4年8月30日)

1 例会

平成4年

6月13日 当会の今後の運営について話し合った。

6月27日 第1回理事会において、今後の取り組みを話し合った。

7月1日 第2回理事会において、郷土研究会事業の今後の取り組みについて話し合った。

2 刊行物

平成3年

7月6日 『いしかり暦』第10号を刊行した。

3 第36回石狩町文化祭への参加

10月11～13日 花川北コミュニティセンターに於いて開催された第36回石狩町文化祭に「石狩町歴史に関するパネル」を作成し展示した。

平成4年度 (平成4年8月31日～平成5年4月24日)

1 例会

9月17日 上花畔1遺跡発掘調査の成果と課題―発表者 石橋孝夫。

10月15日 石狩尚古社について・石狩の俳句と連句―発表者 前川道寛。

12月17日 『石狩町沿革史』について―発表者 石橋孝夫／石器「刀子型石製模造品」について(了惠寺蔵)―自由討議。

平成5年

2月18日 高島家文書「旧東西蝦夷地場所請負人村山伝太夫略歴」について―発表者 田中實。

3月18日 「石狩観鮭漁の記・関場梅屋」資料について―発表者 田中實／石狩町郷土資料館構想提言書について―発表者 山口福司。

2 研修会

9月9～11日 町外研修―北海道立開拓記念館において「平成4年度アイヌ民族文化財専門職員等研修会」が開催されたので、会員の5名が参加した。

10月11日 町外研修―札幌市にある北海道立開拓記念館と開拓の村を見学した。

11月4日 町外研修―札幌学院大学公開講座「チングスハーンの陵墓を探して」に参加した。

平成5年

2月28日 町内研修―石狩尚古社を見学した。

### 3 調査と研究活動

会員は三班に別れて調査を開始した。

①石狩町俳句史調査班 尚古社の連句および尚古社以降の石狩町の俳句活動の調査（担当／前川道寛ほか九名）

②明治期石狩市街調査班 料亭および遊廓関係の実態調査並びに市街地の形態に関する調査、市街地図の作成（担当／田中實ほか十一名）

③交通史調査班 石狩町と札幌市間の各種交通機関（定期航路・馬鉄）の調査並びに月形定期航路、石狩鉄道関係の資料収集活動（担当／青木隆ほか十名）

ほかに、会員が個人研究として「石狩弁天社・八幡神の成立」にたずさわった。

4 石狩弁天社創建三百年記念事業の協賛

石狩弁天社が創建されてから三百年を経るにあたり、記念行事が計画された。郷土研究会として記念誌作成などの行事に協賛し協力することになった。

5 第37回石狩町文化祭への参加

10月16日～18日 花川南コミュニティセンターで開催された石狩町文化祭に、パネル展「石碑にみる花川南地区の歩み」を展示した。

平成5年度（平成5年4月25日～平成6年4月27日）

### 1 例会

5月13日 小樽新聞の「助役町政を攪乱する」（大正4年3月20日付）にみる石狩／北海道開拓時代をささえた石狩川水運の歩み（久米洋三著）について―発表者 石橋孝夫。

6月17日 石狩の海濱学校・「石狩海濱学校」映写と資料による―発表者 田中實。

7月15日 尚古社句集『新婦美月』解説―発表者 前川



道寛。

8月19日 石狩町弁天社創建三百年祭執行報告―発表者

田中實／八幡町墓地樺太アイヌ遺骨調査の経過について―発表者 石橋孝夫。

9月16日 イギリス人、A・ヘンリー・サーヴィジ・ラ

ンドー『外人の見たエゾ地』の紀行文のなかの石狩にいた樺太アイヌについて―発表者石橋孝夫／村山家文書について―発表者 田中實。

10月14日 石狩町文化祭の展示物搬入。

11月18日 採花女と池菱の連句―発表者 前川道寛／渡

辺勝・カネ日記―発表者 駒井秀子。

12月16日 神道について―発表者 山口福司。

平成6年

1月20日 運上家のお正月（樋口忠次郎の記）・北海道

のお正月―発表者 田中實。

2月17日 古文書「石狩郡村方流失仕候義」の背景と当

時の石狩―発表者 田中實。

3月17日 古文書「安政4年コーヒーの飲み方」解説と

資料の背景―発表者 田中實。

## 2 研修会

7月8・9日 町外研修―道立文書館古文書解読講習会

へ参加した。

11月7日 町外研修―芦別市「星の降る里・芦別市百年

記念館」の見学をした。

## 3 調査と研究活動

昨年に引き続き三班に分かれて、石狩町俳句史・明治期石狩市街・交通史を調査した。また、俳句史については資料をまとめ一部原稿を取りまとめた。

## 4 町指定文化財石狩弁天社創立三百年祭記念事業への参加と協力

会長と会員が記念事業実行委員会の役員に就任し、記念テレホンカードの販売や記念誌の編集、協賛金の協力などの記念事業に参加した。

## 5 第38回石狩町文化祭への参加

10月15日～17日 花川南コミュニティセンターに於いて開催された石狩町文化祭に、「石狩弁天社創建三百年祭写真パネル展」を展示した。

## 6 郷土資料館建設促進運動の推進

教育委員会で進めている郷土資料館の建設について、積極的に意見を述べていくことを決めた。

平成6年度 (平成6年5月27日～平成7年4月26日)

### 1 例会

5月19日 「若生から八幡へと拓(ひらか)れる」 明治

・大正・昭和の町のできごと―発表者 田中  
實／『ふるさといしかり』所収の写真と絵図  
―発表者 石橋孝夫。

6月16日 松前藩における神官と神事(小山内忠司著

『松前町史研究紀要』亀法鮫大明神由来置  
記(村山家文書)・蝦夷地場所請負人山田家  
について―発表者 石橋孝夫／明治39年4月  
発行の「石狩明細地図」にみる南線と樽川  
(現花川北南地区)について―発表者 田中  
實。

7月14日 『鮫』(矢野憲一著)と弁天社の鮫さまの由  
来について―発表者 石橋孝夫。

10月20日 「石狩辨天社由来」について(村山家文書北

大図書館蔵) 解説とその背景―発表者 田中  
實／『石狩辨天社史』について―発表者 石橋  
孝夫。

11月17日 鮭の味覚について・『津軽一統志』(石狩関  
係)―発表者 田中實。

12月15日 明治中期の花畔村史「金子清一郎履歴書草稿」  
解説／金子家蔵「居之隊」等資料―発表者  
田中實。

平成7年

1月19日 『北海道地方史考』(畑宮清一郎著)につい  
て―発表者 石橋孝夫。

2月16日 石狩町議会についての参考資料／大河の謎・  
石狩川の長さに挑む(君尹彦教授筆)―発表  
者 田中實／田所正義履歴書(高島文書)・  
『漢字引アイヌ語地名』の紹介―発表者 石  
橋孝夫。

3月16日 北海道の地震について―発表者 石橋孝夫／  
地震・わが町の安全度―発表者 田中實。

### 2 研修会

9月16・17日 町外研修―余市町に於いて開催された北  
海道地方史研究協議会主催の古文書解説ゼミ  
ナーに9名が参加した。

3 調査と研究活動

石狩町の俳句史調査書を、郷土シリーズ4号として刊行することが決まった。

4 刊行物

平成7年

3月20日 「郷土シリーズ第4号 鎌田池菱と尚古社」を発行した。

5 石狩町文化協会20周年記念事業への協力

設立20周年にあたり、記念行事や記念誌の編集などに協力することが決まった。

平成7年度 (平成7年4月24日～平成8年4月27日)

1 例会

5月25日 道シリーズ「軽石軌道」について―発表者 田中實。

6月22日 新琴似4番通りについて―発表者 田中實。

7月27日 石狩町の防災について(砂防スライド 遮断緑地について)―発表者 中野昭治郎防災研究所々長。

8月24日 「パンナグルものがたり」 能登西雄談話聞書にみる石狩―発表者 田中實。

10月19日 石狩と文学・道シリーズ「石狩街道・創成川」について―発表者 田中實。

11月16日 石狩を舞台とした歌謡曲・道シリーズ「当別道」について―発表者 田中實。

12月21日 石狩川治水のあゆみ・銃後のくらし―発表者 田中實／北海道における女性史研究の現状―発表者 駒井秀子／石狩町の写真―発表者 青木隆。

平成8年

2月15日 「石狩修学旅行記」(明治44年9月25日―庁立札幌中学校1年生記録 学友会雑誌行啓記念号・明治45年)にみる当時の石狩―発表者 田中實。

3月21日 「快風丸蝦夷聞書」―発表者 田中實。

2 研修会

9月30日 町外研修―旭川市博物館・井上靖記念館・中

原悌二郎記念彫刻美術館を、会員16名が見学した。

### 3 調査と研究活動

石狩町俳句史の調査については、『清雅帖』を編集集中である。また、明治期石狩市街地調査については、明治35～40年本町地区住居図の原図が出来上がり、製図の段階にある。

### 4 刊行物

平成8年

3月31日 『いしかり暦第11号―清雅帖』を刊行した。

前川道寛会員が、尚古社社員鎌田池菱の明治後期の連句手控え帖を解説したものである。

平成8年度 (平成8年4月27日～平成9年4月16日)

### 1 例会

5月16日 「快風丸蝦夷聞書」に見る石狩(二回目)―

発表者 田中實。

6月20日 報告事項―石狩町歴史写真展終了の報告・

『ふるさといしかり』朗読テープ5巻の吹き込み完了報告・「明治35～40年石狩本町地区市街地図」の取り組み完了報告。協議事項―『歴史写真帖』と『女性史年表』の取り組みについて。

7月18日 「石狩の昔話」(石狩町弘報 昭和27年8月

10日付)による石狩町名について／「行政機構の変遷一覧表」について―発表者 田中實。

8月22日 札幌アイヌ文化協会設立まで・イシカリアイ

ヌ史とアシリ・チェップ・ノミについて―発表者 札幌アイヌ文化協会会長 豊川重雄。

9月19日 道史研究協議会の古文書解読ゼミナーに出席

したため例会中止。

10月17日 戦争中の暮らしの記録―発表者 田中實。

11月21日 市制施行記念受賞会員と、会員の執筆による

図書出版記念お祝いの会。

12月19日 医療の昨今・生活習慣病・医療の実態など―

発表者 山口福司／差出人榎本武揚の手紙(高木憲了会長蔵・田中会員解読)―発表者

田中實。

平成9年  
1月16日 写真が語る明治末期の石狩川河口―発表者

田中實。

2月20日 石狩尚古社資料館の資料から 荒井閑窓―発

表者 中島勝久／資料の読み方・学び方 小樽新聞明治33年8月18日付「石狩行（一）」

（二）（三）―ほか―発表者 田中實。

3月13日 琥珀について・紅葉山49号遺跡から―発表者

石橋孝夫／北海タイムス紙に読む昭和2年の石狩の冬―発表者 田中實。

## 2 研修会

9月12・13日 市外研修―古文書解読ゼミナー（北海道

地方史研究協議会主催）が苫小牧市中央図書館において開催され、会員の5名が参加した。

## 3 調査と研究活動

①仮称『石狩町歴史写真集』刊行事業

二カ年計画で石狩町に関する写真の所在、絵図を調査し、所有者のリストを作成した。

②石狩町女性史研究調査

六月の例会で「石狩町女性史研究」について協議され、石狩町内（九月からは石狩市内）の女性史を調査研究する活動が開始された。市内で発行された関係団体誌などのなかから女性に関する情報などを収集した。

## 4 研究会通信「いしかり暦」の発行

いままでは会からの連絡事項を電話で知らせていたが、会員が増えたので「通信」を発行して知らせる必要にせまられた（昭和六十年四月五日に、おしらせ版「いしかり暦」No.1を発行、その後、5号まで発行したが途絶えていた）の例会欠席者には例会の発表内容を短くまとめて掲載し、興味を持たせて次回からは出席するよう配慮した。その他、連絡事項はもとより会員の動向を知らせ、全会員に配付した。

8月7日 郷土研究会通信「いしかり暦」No.1を発行した。

9月6日 「いしかり暦」No.2を発行した。

11月8日 「いしかり暦」No.3を発行した。

平成9年

1月12日 「いしかり暦」No.4を発行した。

## 5 刊行物

6月19日 平成4年度から取り組んで来た「明治期石狩市街地図（明治35年～40年）」の作成については、石狩本町地区の居住者、寺社、公共施設、商店名などを個別に入れたイラストを加

えた市街地図を作成し、市役所はじめ関係者に配付した。

6 石狩市制記念「歴史パネル展」の開催

6月10～17日 石狩町役場庁舎1階ロビーに於いて開催された。青木隆会員の撮影した写真を中心に、昭和30年前後の石狩市内の写真を展示した。

7 朗読テープの作成

7月8日 『ふるさといしかり』（石狩町教育委員会発行）を三島照子、星川富美子両会員が朗読し、視覚障害者に石狩町の歴史を知ってもらおうと努めた。吹き込みが完了した録音テープ5巻は石狩市社会福祉協議会へ寄贈した。

平成9年度（平成9年4月17日～平成10年4月22日）

1 例会

4月17日 榎本武揚から福島安正宛の書簡（高木会長蔵）  
解説―発表者 田中實。

5月15日 鮭の料理とその周辺（吉岡タカ聞き取りによる）―発表者 吉岡玉吉／千人針・奉公袋・

寄せ書き披露―発表者 金子仲久。

6月19日 石狩湾、石狩河口を中心とした風向き、風位と石狩の水泳―発表者 吉岡玉吉。

7月17日 幻のニシンを追って―発表者 吉岡玉吉。

8月21日 異国の地バレンバンに戦没者の慰霊碑が建つまで―最後の慰霊祭―発表者 阿部哲雄／漁

業労働歌を考察して―発表者 吉岡玉吉。

9月18日 北海道開拓初期の産婆制度に関する年表（北

隅静子さんの研究を基にして）―発表者 田中實／石狩浜の童戯あれこれ・その1―発表

者 吉岡玉吉。

10月16日 石狩鮭天覧品製造の写真によせて―発表者

田中實／アイヌの戸籍・地名等について―発表者 山口福司／日高アイヌの風俗について―発表者 吉岡玉吉。

11月20日 佐々木トメ老婆の碑について（小川茂会員調査）／生振地名考察について（吉野惣栄会員調査）の紹介／南線神社について―発表者

田中實／石狩浜の童戯あれこれ・その2―発表者 吉岡玉吉／太郎代天曝観音（縁起・その1）―発表者 高瀬たみ。

12月18日 子供のころの思い出―発表者 金子仲久／太

郎代天曝観音（縁起・その2）―発表者 高瀬たみ／石狩浜の童戯あれこれ・その3―発表者 吉岡玉吉。

平成10年

1月22日 石狩の昔の石油砒を採る―発表者 中村秋雄。

2月29日 中生振愛知団体の養鶏孵化器について―発表者 吉田重男／佐々木トメさんの記念碑―発表者 石橋孝夫／平成一〇年から数えて石狩市の一四〇年―一〇年前の主な出来事―発表者 田中實。

3月19日 石狩改革について―発表者 君 尹彦。

## 2 研修会

5月31日・6月1日 留萌市に於いて開催された北海道文化財保護協会総会と研究会へ会員7名が出席した。その後、国指定史跡旧佐賀家漁場などを視察した。

## 3 調査と研究活動

①仮称『石狩市歴史写真集』の編集と写真収集編集打ち合わせ会を十四回開いた。写真一〇〇枚ほどを収集済みで、この写真の分類や解説などの作業に努め

た。刊行を平成十年度とした。

②石狩市女性史年表の調査

駒井秀子・三島照子・星川富美子・安井澄子会員が参加し、資料の収集と調査をした。

③佐々木トメ記念碑由来調査

北生振町内会より依頼され、小川茂・石橋孝夫両会員が調査した。

4 研究会通信「いしかり暦」の発行

平成10年

1月3日 「いしかり暦」No5を発行した。

2月15日 「いしかり暦」No6を発行した。

5 第10回公民館まつりへの初参加

平成10年

3月7・8日 石狩市教育委員会主催の「公民館まつり」に初めて参加し、郷土研究会コーナーにおいて研究成果を展示した。

平成10年度 (平成10年4月23日)～平成11年4月21日)

1 例会

- 4月23日 石狩花畔土地改良区・生振地区について―発表者 吉田隆義。
- 5月21日 花畔の昔―発表者 阿部哲雄・歴史最近の話題―発表者 山口福司。
- 6月18日 脱獄魔五寸くぎ寅吉と石狩浜―発表者 吉岡玉吉／旧岩出山藩士の札幌(農)学校開校式見聞記／ジョン・パチエラーの日露戦争直前の音楽会―発表者 田中實。
- 7月16日 花畔の養蜂―発表者 金子仲久／生振治水市街地にあった石狩座―発表者 吉田重男。
- 8月20日 紅葉山49号遺跡について―発表者 石橋孝夫／北海道の養蜂について―発表者 田中實。
- 9月17日 井上伝蔵と尚古社―発表者 中島勝久／秩父事件／南線地域、南線小学校の沿革―発表者 田中實。
- 11月18日 紅葉山遺跡群を語る・短歌が明かす消え去った石狩風物―発表者 高木憲了／変動する石狩川河口と石狩灯台の関係図・安政6年の石狩絵図・明治29年等の公図の解説―発表者 田中實。

平成11年

2月18日 サケの漁労の推移とその暮らし―発表者 吉岡玉吉。

3月18日 叙勲制度について―発表者 山口福司／第二次世界大戦後の新食品と新台所用品史―発表者 田中實。

2 研修会

10月13日 市外研修―余市町水産博物館・旧余市福原漁場・旧下ヨイチ運上屋・余市宇宙記念館・フゴツペ洞窟・西崎山ストーンサークルを見学した。

12月17日 市内研修―了恵寺の「宝物館」を見学した。

3 調査と研究活動

- ① 仮称『石狩市歴史写真集』の編集  
昨年度に引き続き編集を続けた。
- ② 『石狩市女性史年表』に関わる資料と調査  
昨年度に引き続き作業を続けた。



4 研究会通信「いしかり暦」の発行

9月19日 「いしかり暦」No7を発行した。

12月10日 「いしかり暦」No8を発行した。

平成11年

4月5日 「いしかり暦」No9を発行した。

5 刊行物

3月31日 会員の研究発表誌『いしかり暦』第12号を発行した。

6 第11回公民館まつりへの参加

3月6・7日 公民館まつりが石狩公民館で開催され、「江戸時代の本町―石狩場所と村山家」と題して資料や写真をパネルにして展示した。

平成11年度 (平成11年4月22日)と平成12年4月19日)

1 例会

4月22日 石狩絵図披露(安政4年村垣奉行巡見)―発表者 石橋孝夫。

5月20日 座談会「花川小学校の昔を語る」(「開校百年」記念誌より)―発表者 田中實/建国二千六百年奉祝記念式典のテープによせて―発表者 山口福司。

6月17日 『波灯―かもめの便り』執筆によせて―発表者 鈴木トミエ/「かもめの便り」読後感とその意義―発表者 田中實。

7月15日 伝兵衛のふるさと安部屋村―発表者 村山耀一/石狩と村山家―発表者 田中實。

8月19日 石狩おどろおどろしい話―発表者 吉岡玉吉/大東亜戦争開戦の詔書・終戦の詔書―発表者 山口福司。

10月21日 積丹半島巡りの感想―発表者 田中實・金子仲久・石川秀子。

11月18日 尚古社と伊藤房次郎―発表者 中島勝久/石狩消費者協会の経緯―発表者 仲野孝。

平成12年  
1月23日 新年会・石狩市民芸術文化賞受賞祝賀会を開催した。

2月17日 石狩浜米軍訓練場史について(昭和27年/28年)/石狩海浜の軍事的地位について―発表者 田中實。

3月16日 蝦夷錦―発表者 村山耀一。

## 2 研修会

9月25日 市外研修―古平町・神恵内村 積丹半島めぐり  
禅源寺（古平町）／日本郷土玩具館・神恵内村資料室（神恵内村）を見学した。  
12月16日 市内研修―了恵寺に於いて宝蔵館収蔵展示品を拝観した。

## 3 調査と研究活動

### ① 仮称『石狩歴史写真集』の編集

平成12年  
1月20日 写真集編集実行委員が開催された。  
石狩市公民館において開催され、今後の取り組みについて話し合いをした。写真集編集実行委員は十名で、写真は一〇〇枚以上が収集された。写真集発刊へ向けての取り組みを話し合った結果、編集委員会をおき、編集代表は山口福司会員とし写真は編集代表が保管する。写真借出者へは経過説明のハガキを出す。写真の複写を早急にする。また、写真集刊行に向けて出版費用を捻出する―などが決まった。

② 石狩市女性史年表の調査  
昨年に引き続き調査と編集をする。

## 4 研究会通信「いしかり暦」の発行

6月23日 「いしかり暦」No10を発行した。  
8月28日 「いしかり暦」No11を発行した。  
12月5日 「いしかり暦」No12を発行した。  
平成12年  
2月20日 「いしかり暦」No13を発行した。

## 5 刊行物

3月31日 会員の研究発表誌『いしかり暦』第13号を発行した。

## 6 江戸時代の本町パネル展

4月1日～10日 石狩番屋の宿に於いて、江戸末期の石狩本町地区の様子をパネルにして展示した。

7 石狩市郷土研究会40周年記念・市民芸術文化賞受賞記念「石狩の诗情・石狩川河口地区と防風保安林の画と詩歌」を開催した

郷土研究会創立40周年にあたり、石狩川河口地区と花川地域内防風保安林をテーマとした風景画と、短詩型文

学作品を集めて展示した。大森亮三・小木栄憲両氏から版画・油絵など百四十点を借用した。

「石狩の詩歌展・石狩川河口地区と防風保安林の画と詩歌」の最終日には、「石狩川河口と防風保安林に魅せられて」と題するシンポジウムを開催し、市民に自然保護と保全意識の向上をうながした。

共賛は花川北森林愛護組合・杜の花石狩支部。後援は石狩市文化協会であった。  
12年

3月9日～11日 花川南コミュニティセンターに於いて「石狩の詩情展・石狩川河口地区と防風保安林の画と詩歌」を開催した。

3月11日 「石狩川河口と防風保安林に魅せられて」と題してシンポジウムを開催した。

8 北海道・東北史研究会石狩シンポジウム大会への協力

八月二・三日、「北海道・東北研究会石狩シンポジウム」(北海道東北史研究会・石狩市教育委員会主催)が花川北コミュニティセンターに於いて開催され、会として会場受け付けと史料・写真展示及び史料案内などの協力をした。

9 「江戸時代の石狩」写真パネル展の開催

8月2・3日 「江戸時代の石狩」写真パネル展を開催した

北海道・東北研究会石狩シンポジウムが開催され、その期間中、花川北コミュニティセンター一階ロビーに於いて「江戸時代の石狩」写真パネル展と石狩関係史料を展示した。

10 第12回公民館まつりへの参加

平成12年

3月4・5日 石狩公民館に於いて公民館まつりが開催され、高木憲了会員所蔵の浮世絵「入浴図」各種を展示した。

平成12年度 (平成12年4月20日～平成13年4月18日)

1 例会

5月18日 秩父事件の首謀者井上伝蔵、逃亡の父とも  
にを読んで―発表者 中島勝久・田中實。

6月16日 石狩浜の越後衆―発表者 吉岡玉吉。

8月17日 早春を食べるギンナンソウ―発表者 吉岡玉

吉ノ「蝦夷地一周ひとり旅」(ランドー著)

―発表者 田中實。

9月21日 紅葉山49号遺跡発掘調査報告―発表者 石橋

孝夫。

11月16日 姉妹都市彭州市訪問に参加して―発表者 山

口福司・吉本愛子・田中豈恵。

12月21日 ガイドボランティアの会の活動―発表者 高

瀬たみノ村山家に伝わる宝物・へいさらばさ

ら―発表者 田中實ノ彭州市訪問のスライド

―発表者 山口福司。

平成13年

2月15日 村山家に伝わった防火札―発表者 石橋孝夫

ノ産業組合物語―発表者 中村秋雄ノ石狩川

に遡上したチョウザメ―発表者 田中實。

3月15日 石狩女性史年表を通して見えたこと―発表者

駒井秀子・安井澄子ノ亜麻とトーマン団地

―発表者 小川茂・榎本新一。

## 2 研修会

7月22日 市外研修―小樽市公会堂・能楽堂・旧日本郵

船(株)小樽支店・小樽博物館を見学した後、村

山家ゆかりの蝦夷錦がある浄應寺の「七條の

袈裟」を拝見した。

8月31日 市内研修―紅葉山49号遺跡現地見学会

10月19日 市内研修―了恵寺百年記念宝蔵館が開催した

「巻物などにみる歴史展」を見学した。

## 3 調査と研究活動

①仮称「石狩市歴史写真集」について

写真の収集をしたが、取り組み時間の制約や印刷費の不足から郷土研究会単独で編集、発行することが困難になった。そのため、編集と発行を石狩市に要請した結果、石狩市教育委員会の事業として実施することが決まり、七名の会員が教育委員会内に発足した「21世紀に伝える写真集編集委員会」で編集の協力をする事になり、発行は石狩市教育委員会となった。

②仮称「石狩市女性史年表」の調査と執筆

昨年に引き続き編集作業が続けられた。

## 4 「井上伝蔵資料展」を開催

三月三十一日に開催された石狩市民図書館講座「自由民権運動・秩父事件指導者―井上伝蔵、石狩の23年」に合わせて、中島勝久会員と田中實会員の資料による「井上伝蔵資料展」を開催した。

3月31日 市民図書館1階ロビーに於いて、「井上伝蔵資料展」を開催した。

5 研究会通信「いしかり暦」の発行

6月22日 「いしかり暦」No.14を発行した。

10月10日 「いしかり暦」No.15を発行した。

12月7日 「いしかり暦」No.16を発行した。

平成13年

3月15日 「いしかり暦」No.17を発行した。

6 刊行物

平成13年

3月13日 会員の研究発表誌『いしかり暦』第14号を発行した。

7 第13回公民館まつりへの参加

平成13年

3月3・4日 石狩市公民館に於いて開催された「公民館まつり」に、高木憲了会員所蔵の明治・大正期の双六及び遊戯盤、明治期の童話絵本、明治・大正期の立体絵本など40点を展示した。

8 図書館講座 「自由民権運動・秩父事件指導者―井上伝蔵、石狩の23年」への協力

平成十三年三月三十一日、「自由民権運動・秩父事件指導者―井上伝蔵、石狩の23年」（石狩市民図書館主催）と題する図書館講座が開催され、田中實会員が「井上伝蔵と石狩市の周辺の人たち」と題して研究発表した。

なお、この講座では東京都在住の中嶋幸三氏（『井上伝蔵―秩父事件と俳句』の著者）が同題の講演を行い、その後、中嶋氏と郷土研究会会員たちとの懇親会がもたれた。

平成13年度（平成13年4月19日～平成14年4月17日）

1 例会

4月19日 新聞記事にみる同一人物記事の異同について―発表者 田中實。

5月17日 石狩浜に生息するカニを考察して―発表者 吉岡玉吉／石狩のなめこ―発表者 吉本愛子。

6月21日 市まちづくり出前講座「都市計画マスタープランと市民参加」―発表者 都市計画課／ハマネスの香水―発表者 田中實。

7月19日 駄知三平皿について・北海道西部における鬼

8月23日  
面鬼瓦について—発表者 田中實／ビデオ鑑賞—映像にみる石狩の今昔（1957～1999）。明治43年の石狩・石狩川流燈会を主として—発表者 鈴木トミエ。

11月15日  
「井上伝蔵を語る—中嶋幸三」（NHKラジオ放送—心の時代）の録音テープを聞く／

『尚古集』の道外選者五人について—発表者 中島勝久。

12月20日  
生振に残る草葺屋根の家について—発表者 吉田隆義／どんざについて—発表者 田中實。

平成14年

2月21日  
石狩市の農業概要—発表者 石狩市経済部・石狩市農協職員／石狩湾新港の港名決定までの経緯とエピソード—発表者 田中實。

3月21日  
石狩に和人の女性、子供が住みだしたのはいつごろか—発表者 田中實／昭和初期の新聞に見る石狩浜習俗の一端—発表者 吉岡玉吉／北前船で石狩に運ばれた笏谷石（しゃくたにいし）について—発表者 田中實。

## 2 研修会

9月16日  
市外研修—苫小牧博物館・白老民族博物館・仙台藩白老元陣屋資料館を視察した。

10月9日  
市内研修—紅葉山49号遺跡を見学した。

10月18日  
市内研修—了恵寺に於いて「古写真と鳥瞰図展」が開催されたので見学した。

## 3 調査と研究活動

仮称『石狩市女性史年表』の執筆、編集作業を昨年から継続し、平成十四年三月三十一日付で『町内資料に読む—石狩町女性史年表』が発行された。詳細については第三章参照。

## 4 研究会通信「いしかり暦」の発行

6月21日  
「いしかり暦」Na18を発行した。

9月4日  
「いしかり暦」Na19を発行した。

12月20日  
「いしかり暦」Na20を発行した。

平成14年

3月21日  
「いしかり暦」Na21を発行した。

## 5 刊行物

平成14年

3月30日  
会員の研究発表誌『いしかり暦』第15号を発行した。

3月31日 『町内資料に読む―石狩町女性史年表』を發行した。

6 平成13年度石狩市民文化祭への参加

10月5～7日 石狩市文化協会主催の「平成13年度石狩市民文化祭」が花川南コミュニティセンターに於いて開催され、高木憲了会員所蔵の「北海道各地の鳥瞰図と古写真展」を展示した。

7 第14回公民館まつりへの参加

3月2・3日 石狩市公民館に於いて開催された公民館まつりに、山口福司会員が収集及び撮影したシルクロード関係の資料を、「シルクロード展」と題して展示した。

平成14年度 (平成14年4月18日～平成15年4月16日)

## 1 例会

5月16日 石狩の漁労史「たんねん」について―発表者 吉岡玉吉／古文書研究「明治初期の石狩サ

ケ漁場」―発表者 田中實。

6月20日 発刊報告『ぐるっと案内』―発表者 吉永繁起・高瀬たみ／『石狩町女性史年表』―発表者 駒井秀子・安井澄子／『石狩市21世紀に伝える写真集』（石狩市教育委員会発行）―発表者 工藤義衛・石橋孝夫。

8月22日 石狩に来た明治の画家―発表者 中島勝久／古文書解読「出稼ぎ女性の飯料座料差引額」―「漁場借用証」―発表者 田中實。

9月19日 明治20年函館新聞掲載の石狩―発表者 中島勝久／アキアジとはどんな魚か―発表者 吉岡玉吉／古文書解読「村山家資料から」―発表者 田中實。

11月21日 百印百詩―発表者 山口福司。

12月28日 明治期の石狩における遊興処―発表者 鈴木トミエ／井上伝蔵の故郷群馬県吉田町を訪ねて―発表者 工藤義衛。

2月20日 百印百詩―発表者 山口福司。

3月20日 家系図の話・海浜ホテル―発表者 田中實。

## 2 研修会

7月27日 市外研修―伊達市開拓記念館・有珠善光寺・郷土館・有珠山噴火あとの視察をした。

10月21日 市内研修―了恵寺宝蔵館「新聞錦絵と新聞資料」―「日露戦争時の絵はがき」―「琉球時代の切手」展の見学をした。

### 3 研究会通信「いしかり暦」の発行

5月1日 「いしかり暦」No.22を発行した。  
5月16日 「いしかり暦」No.23を発行した。  
8月22日 「いしかり暦」No.24を発行した。  
9月19日 「いしかり暦」No.25を発行した。  
11月21日 「いしかり暦」No.26を発行した。

### 4 刊行物

平成15年  
3月28日 会員の研究発表誌『いしかり暦』第16号を発行した。

### 5 平成14年度石狩市民文化祭への参加

10月12日～14日 石狩市文化協会主催の「平成14年度石狩市民文化祭」が、花川南コミュニティセンターで開催された。高木憲了会員所蔵の「新聞錦絵と新聞資料」20点を展示した。

### 6 第15回公民館まつりへの参加

平成15年

3月1・2日 石狩市公民館に於いて開催された「公民館まつり」に、「軍事郵便絵葉書・北の記念切符・百印百詩」と題し、高木憲了・中島勝久・山口福司各会員の所蔵する資料を展示した。

### 平成15年度（平成15年4月17日）～平成16年4月15日

### 1 例会

5月15日 石狩市・厚田村・浜益村あれこれ―発表者 田中實。  
6月19日 石狩浜鮭地引き網漁、観光記を巡って（「石狩観鮭漁の記」関場梅屋）―発表者 吉岡玉吉。  
8月21日 郷土研究会記念誌（仮称『あゆみ』）の概要について―発表者 鈴木トミエ／新渡戸稲造と生振―発表者 田中實。  
9月18日 芸術院会員／日展顧問長谷川昇画伯の「石狩河口」絵画にみる石狩―発表者 田中實・青



木隆。

11月20日

郷土研究会記念誌の状況説明と誌名について  
―発表者 鈴木トミエ。(協議の結果誌名を  
「柏林」と決定する)／資料「豊川エカシに  
聞く」―発表者 田中實。

12月18日

(仮称)石狩市地域誌資料センターの件―発  
表者 石橋孝夫／記念誌「柏林」の編集状況  
―発表者 鈴木トミエ／石狩の柏林(釣本峰  
雄会員のタウン紙纏めに寄せて)―発表者  
田中實。

平成16年

2月12日

石狩来札の樺太アイヌ墓標等について―講師  
宮下瞬一氏。

3月18日

紅葉山49号遺跡の発掘から―発表者 石橋孝  
夫。

## 2 研修会

7月19日

市外研修―町村牧場(江別市篠津)・江別市  
旧町村牧場(江別市)・北海道立埋蔵文化財  
センター(江別市)・北海道開拓記念館(札  
幌市)を見学した。

## 3 調査と研究活動

①古文書研究チーム(十六名)／チーフ 村山耀二)

5月7日

第1回古文書解読―「古文書解読の手引き」  
により学習をした。

6月11日

第2回古文書解読―百人一首・「播磨屋源藏  
店の引札」・小野小町と能・定家歌傳。

7月17日

第3回古文書解読―「いろは覚え」の解読・  
百人一首二十一人の女性歌人の和歌を通して  
変体がなの学習をした。

8月27日

第4回古文書解読―「海外留学生文部省管理  
の件」解読を通して、異体字を学習した。

9月26日

第5回古文書解読―「手習子供前附」―「出  
火見物告輪」を通して、異体字や返り点の学  
習をした。

11月7日

第6回古文書解読―「小学読本卷三」―「江戸  
方角」を通して、変体かななどを学習した。

1月30日

第7回古文書解読―「村山家文書 村山伝兵  
衛沿革」①の解読をした。

3月5日

第8回古文書解読―「村山家文書 村山伝兵  
衛沿革」②の解読をした。

②創立45周年記念誌編集チーム（十一名／チーフ 鈴木トミエ）

4月28日 第1回編集会議を開催し、45周年記念誌の内容を検討した。

6月2日 第2回編集会議を開催し、内容と執筆の分担を話し合った。

7月7日 第3回編集会議を開催し、本の体裁や発行予定日、目次などを検討した。

8月4日 第4回編集会議を開催し、目次の再検討と執筆分担、作業のスケジュールを話し合った。

10月31日 第5回編集会議を開催し、作業の進み状況を話しあった（原稿の集まり件数とワープロ打ち状況）。

11月30日 第3章の発刊図書と第4章の回想「私と郷土研究会」の執筆者各自の原稿校正を終えた。

第4章は22名の会員の原稿が集まった。

12月1～18日 ワープロ打ちの村山耀一・吉本愛子・三島照子各会員と鈴木が個別に打ち合わせをした。

1月5～30日 原稿の校正と写真の複写、レイアウト作業を終えた。

2月1～27日 原稿の最終校正を終えた。

3月1～31日 印刷所に原稿を渡した。

③「石狩の碑」再調査チーム（九名／チーフ 高瀬たみ）

7月3日 第1回調査会議を開催し、対象となる石碑40余りの名称と所在地が提示された。

8月21日 第2回調査会議を開催した。調査場所（石碑）の確認とその作業分担。

11月27日 第3回調査会議を開催し、調査報告と取りまとめなどについて話し合った。

4 研究会通信「いしかり暦」の発行

4月17日 「いしかり暦」No 27を発行した。

6月19日 「いしかり暦」No 28を発行した。

8月21日 「いしかり暦」No 29を発行した。

9月18日 「いしかり暦」No 30を発行した。

12月18日 「いしかり暦」No 31を発行した。

5 刊行物

平成16年

3月31日 「いしかり暦」17号特別記念号・石狩市郷土

研究会創立45周年記念誌「柏林」を発行した。

6 平成15年度石狩市民文化祭への参加

10月11日～13日 石狩市文化協会主催の「平成15年度石狩市民文化祭」が花川南コミュニティにおいて開催された。高木憲了会員所蔵の資料を「画家と表紙絵の女」と題して明治・大正・昭和30年代までの週刊誌や女性雑誌の表紙絵をパネルで展示した。

7 第16回「公民館まつり」への参加

平成16年  
3月6・7日 高木憲了会員所蔵の資料をパネルで展示した。

8 公開講座「初公開の資料による石狩来札の樺太アイヌについて」を開催

10月26日 花川北コミュニティセンターにおいて公開講座「初公開の資料による石狩来札の樺太アイヌについて」を開催した。定員70名。

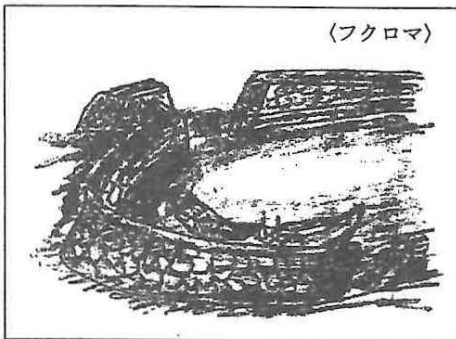
郷土研究会主催の初めての公開講座で、一般市民の参加も多かった。後に参考になるように資料も作成し、石狩における樺太アイヌの歴史の一端にふれた。講演・

講演・研究発表は次の通り。

講演 「人類学者ベルツ博士の石狩来訪（一八九七年）と『石狩紀行』（関場不二彦著）・来札墓地の樺太アイヌ墓標と棺について」——宮下舜一氏（医学博士・郷土歴史研究家・札幌市在住）。

講演 「来札の樺太アイヌ強制移住の歴史掘り起こしと『対雁の碑』発行など」——豊川重雄氏（元札幌アイヌ文化協会会長・樺太アイヌ史研究会会長・札幌市在住）。  
研究発表 「来札の樺太アイヌ周辺の人たち」上野源兵衛・豊川富作・高村忠太郎など——田中實会員（石狩市郷土研究会顧問・北海道史研究協議会常任理事・石狩市在住）。

（文責 田中實・鈴木トミエ）



### 第三章 発刊図書

郷土研究会は発足以来、数冊の図書を発行してきた。それぞれの会員がコツコツと研究したものを発表する場としての『いしかり暦』。『いしかり暦』が初めて刊行されたのは昭和五十五年八月のこと。

以来、毎年一冊、平成十六年三月の郷土研究会創立四十五周年記念特集号で第17号を発行するに至った。特集号は第9号の『いしかり渡船場物語』と、第11号の『清雅帖』がある。

後に紹介するが、いしかり郷土シリーズの『石狩の空襲を語りつぐ』、『石狩の碑第一輯』、『石狩の碑第二輯』、『鎌田池菱と尚古社』の四冊と、『町内資料に読む―石狩町女性史年表』、『石狩町本町地区市街図―明治三五年』は、会員が共同で調査したものや、独自に調査し研究したものなど、その内容はバラエティにとんでい

る。ここでは、郷土研究会が独自で発行したものの他に会員が編集員に加わった『石狩市21世紀に伝える写真集』を取り上げた。

共同で発行した『石狩弁天社史』（石狩町教育委員会／昭和四二年発行）と、『石狩俳句小史』（生振村史編集委員会／昭和四九年発行）『石狩町沿革史』（石狩町役場／昭和六三年発行）があるが、紙面が限られており

ここでは割愛した。

#### 『いしかり暦』創刊号

昭和五五年八月三〇日発行／B五判／三二頁  
発刊にあたって―会長・花田知也／ポプラの話、密漁の話―小西茂／生振古老物語―前川道寛／花川南、北地区の開発と郷土資料館の建設―福田佐市／第1回国勢調査から―金子仲久／石狩町花川南地区（「通称」新札幌団地）の防風保安林に生息する野生鳥類について―田中實／石狩町山菜摘記―沖本義久／若林清作翁聞書―田中實（通称）新札幌団地開発史年表稿―田中實／郷土資料紹介―鮭皮のケリについて―石橋孝夫／入会案内

#### 『いしかり暦』第2号

昭和五六年三月三一日発行／B五判／三二頁  
出産費用のことなど―駒井秀子／鯨場出稼ぎの頃のこと―沖本義尚／思い出すままに―吉本愛子／子供に聞かせる石狩町の昔話Ⅱ南線地区Ⅱ―鈴木トミエ／子供の頃の思い出―金子仲久／酪農今昔―福田佐市／生振古老物語―2―消えた街―生振治水工事市街地考―前川道寛／鯨神の誕生―石狩川の主伝説と妙鮫法亀大明神についての覚書き―石橋孝夫

『いしかり暦』第3号

昭和五七年一月三〇日発行／B五判／二八頁

開拓時代の馬産について―金子仲久／理髪業一代―駒井秀子／北大中央図書館内北方資料室所蔵村山家文書中に包蔵せる井尻静藏家文書目録―長谷川嗣／子供にきかせる石狩町の昔話Ⅱ花川南地区―鈴木トミエ／子供にきかせる石狩町の昔話Ⅲ「サケとわかもの」

『いしかり暦』第4号

昭和五九年二月二五日発行／B五判／三二頁

花畔古老昔語り―尾田アサヨさんの巻―吉本愛子／花畔団地の野鳥について―畑宮清一郎／昔の物の値段―金子仲久／果樹栽培の奨励―金子仲久／鮭と鯿の昔話―福田佐市／石狩平野の雁をめぐって―黒田晶子／生振古老物語―前川道寛／南線地区（現花川北）の昔と今―阿部重利さんに聞く―駒井秀子／石狩町の町村名（大字・字）について―田中實

『いしかり暦』第5号

昭和六〇年三月三一日発行・B五判／三九頁

郷土博物館の早期実現を―山口福司／花畔神社の由来―

金子仲久／古記録に見る石狩のサケ料理―畑宮清一郎／古老談話より―村山コト氏談―田中實／幕末時代の鮭―介抱米を主とする―田中實／当別太美で聞いた話―本庄陸男のこと―前川道寛／昭和五九年度事業から―事務局／花畔古老昔語り―織田テルさんの巻―吉本愛子／Ⅱ復刻Ⅱ「石狩文学」

『いしかり暦』第6号

昭和六一年三月三一日発行／B五判／三〇頁

石狩町の石碑調査について―会長・山口福司／石狩町空襲について―調査メモ―青木隆／石狩町の石碑―調査メモ―金子仲久／子供の頃に―阿部徹雄／ふるさと探求―村井喜久司／昔を偲んで―福田佐市／著述にたいしての私的メモ―長谷川嗣／花畔古老昔語り―藤井リエさんの巻―吉本愛子／開拓と漢方草木―沖本義久／特別寄稿―前川道寛著「石狩俳壇誌」誇るべき文化遺産の発掘―大森亮三／昭和六〇年度事業から―事務局／昭和六〇年度会員名簿

『いしかり暦』第7号

昭和六三年九月三〇日発行／B五判二九頁

石狩座について―青木隆／イシカリと風―田中實／除虫

菊について—金子仲久／早坂文雄をしのぶ—前川道寛／特別寄稿—一九四五年七月一五日石狩空襲の思い出—中村秋雄

『いしかり暦』第8号

平成元年三月三十一日発行／B五判／二九頁

長谷川嗣氏追悼号

追悼号発刊に寄せて—会長・山口福司／長谷川嗣氏—年譜(稿)・受賞略記(稿)・著述譜(抄)・解説・筆写史料目録(抄)／(仮題)長谷川嗣氏の胸懷録(抄)／文学作品—短歌・詩—そのとき(詩らしく二)・ある古調(詩らしく二)／解説文書から—長谷川嗣編石狩罐詰来歴—開拓使文書ヨリ(抜)所載にあたって—田中實／長谷川嗣編—石狩罐詰来歴—開拓使文書ヨリ(抜)／松浦武四郎研究会のあゆみ—吉田千萬

『いしかり暦』第9号 創立三五周年特集号 『いしかり渡船場物語』

平成二年三月三十一日発行／B五判／五五頁  
頒布価格五〇〇円

第一章—石狩町内の渡船場について—石橋孝夫

第二章—花畔、生振、美登位地区の渡船場

—花畔市街地渡船場—金子仲久／二—聞き書き女船頭だった頃—松本ハナ談—吉本愛子・高瀬たみ／三—花畔北三線渡船場について—金子仲久／四—生振村三線—『北の渡し』—林山キエ談—前川道寛／五—茨戸渡船場—横山敏美／六—八線渡船場—横山敏美／七—生振基線渡船場—長谷川心平・田中實

第三章—石狩川渡船場

—渡船場のあゆみ—青木隆／二—国営渡船場時代のようす—青木隆／三—渡船料金の移りかわり—青木隆／四—事業経営にたずさわった人々—石橋孝夫／五—石狩川渡船場略年表—青木隆・石橋孝夫／六—石狩の吹雪と氷橋—青木隆／七—聞き書き—渡船のお客さん—赤川孝子・後藤良子・三島照子談—駒井秀子／八—磯舟から馬舟、そしてさつき丸のころ—吉岡タカ談・吉岡ヒデ談—大島晶子／九—渡船に乗組んでいた頃—伊藤逸策／十—渡船場勤務時代—永井英昭

『いしかり暦』第10号

平成三年七月六日発行／B判／五〇頁

石狩の冬—昭和初期から同三〇年代前半まで—田中實／

冬の年中行事―駒井秀子／むかしの冬の憶い出―青木隆  
／石狩川治水工事と生振治水市街地―吉野惣栄

いしかり暦 第11号 澄月園池菱 『清雅帖』 石狩尚  
古杜連句集』

解説 前川道寛／校注 窪田蕉・田中實／平成  
八年三月三〇日発行／B五判／八〇頁／限定三  
〇〇部

発刊にあたって―石狩町郷土研究会会長・田中實／一―  
尚古社と鎌田池菱―田中實／二―俳人略歴―田中實／三―  
連歌・俳諧・連句―窪田蕉／四―清雅帳解説―清水の  
巻―明治三五年八月―二月池菱、大道／初秋の巻―明  
治三五年八月―二月大道、池菱／「鶴の脛」の巻―明  
治三五年二月―大道、池菱／時鳥の巻―明治三五年一  
二月―池菱、大道／花の山の巻―明治三六年一月―痴  
楽、池菱、露焦／「露の臺」の巻―明治三六年一月―痴  
楽、池菱、露焦／「焚捨て」の巻―明治三六年一月―五日―  
痴楽、池菱／「瀧冷に」の巻―池菱、痴楽／「山に山」  
の巻―明治三六年三月―一日―痴楽、池菱／「数積めば」  
の巻―明治三六年四月―池菱、痴楽、桃雫／俳諧新派の  
巻―明治三六年四月―五月―一日―池菱、痴楽、桃雫／  
「夕立や」の巻―明治三六年五月―一日―六月―四日―  
露蕉、痴楽、池菱／「足跡」の巻―明治三九年夏―雷庵、

池菱／「引返せ」の巻―明治三九年夏―雷庵、池菱／  
「山は晴れ」の巻―明治四〇年九月―一日―六日―娛  
水、池菱／鶯の巻―明治四〇年九月―一日―六日―池  
菱、娛水／「夕さりや」の巻―明治四二年―閑窓、池菱  
／「里近き」の巻―明治四一年八月―一日―池菱、かつ  
ミ／「活けられて」の巻―明治四一年八月―明治四二年  
五月―秋香、池菱、かつミ／「蓮咲や」の巻―明治四〇  
年―一月―池菱、娛水／雪の巻―明治四〇年―一月―六日  
―明治四一年五月―娛水、池菱／「魚の住む」の巻―明  
治四一年―一月―池菱、閑窓／若竹の巻―明治四二年四  
月―五月―旭風、池菱／時鳥の巻―明治四二年四月―五  
月―池菱、旭風／「千日の苦」の巻―大正一五年―二月  
―錦風、池菱／「窓の日」の巻―大正一五年五月―藤六、  
池菱／雑煮の巻―昭和五年―一月―秋香、池菱／五―清雅  
帳外解説／歌仙「剃刀を」の巻―明治三二年夏―採花、  
對凡、池菱／大學之連歌／「扇」の巻―池菱、採花／  
「牡丹」の巻―採花、池菱／鯉鱗行「大根之花」の巻―  
池菱、採花／脇起鯉鱗行「梅が香に」の巻―尚古社員／  
あとがき―前川道寛

『いしかり暦』第12号

平成一一年三月三二日発行／B五判／四六頁

いしかり子ども風土記―郷愁の砂浜遊び―吉岡玉吉／小

樽内集落―高瀬たみ／石狩の近代化はどのように進められたか―君尹彦／石狩花畔土地改良区生振地区について―吉田隆義／石狩市八幡町高岡の通称名調べ―小川茂／石狩地方史ノート―樽川の運河・生振の養鶏・八幡の馬市―鈴木トミエ／遊び心で推論した生振地名考―吉野惣栄／養蜂―金子仲久

### 『いしかり暦』第13号

平成一二年三月三十一日発行／B五判／八七頁

石狩尚古社資料館の資料から―中島勝久／石狩右岸地区内治山砂防ダムについて―小川茂／幻となった石狩浜の鰯（鱈）漁業―吉岡玉吉／地神サン―吉野惣栄／子育て観音・地域の母子を見守る―高瀬たみ／積丹岬―石川秀子／神威岬についての憶い出―金子仲久／石狩の近代化はどのように進められたか（続）―君尹彦／年表で見る村山家の沿革―村山耀一

### 『いしかり暦』第14号

平成一三年三月三十一日発行／A四判／四九頁

「亜麻」とトーマン団地―小川茂・榎本新一／石狩市八幡地区に現存する石倉―小川茂／いしかり点描・蝦夷錦―石川秀子／りょうし（漁師）懐古―漁人、浦百姓（本

浦、端浦）漁師―吉岡玉吉／帝国石油八ノ沢工業所に働いて―中村秋雄／石狩市産業組合物語（保証責任石狩町信用購買利用組合）―中村秋雄／特別例会「巻物などに見る歴史展」に参加して―高瀬たみ／不毛の大地に黄金の花咲くまで―小川茂

### 『いしかり暦』第15号

平成一四年三月三〇日発行／A四判／一九頁

石狩市と巖谷小波―高瀬たみ／生振に残る茅葺き（かやぶき）屋根の家―吉田隆義／石狩市右岸地域の農村電化設備の経緯―小川茂／石狩町右岸地域の国、道の貸付牛導入の経緯―小川茂／北海道昔々（一）―吉野惣栄／石狩浜漁師天気予報あれこれ―吉岡玉吉

### 『いしかり暦』第16号

平成一五年三月二八日発行／A四判／三五頁

自由民権運動・秩父事件指導者―井上伝蔵、石狩の二三年―中嶋幸三／石狩浜のコダマカイ―吉岡玉吉／石狩浜の蛸貝とその模様―吉岡玉吉／石狩浜の漁業―小手繰網漁業―吉岡玉吉 補訂―田中實



## いしかり郷土シリーズ「石狩の空襲を語りつぐ」

昭和六十二年二月二十八日発行／A五判／一七七頁  
／外に地図／実費頒価八〇〇円／編集・空襲調査班・チーフ青木隆

太平洋戦争が終る丁度一ヶ月前に、石狩のまちが米軍艦載機による激しい空襲を受けた。主に本町地区・八幡町の両市街地などに対して爆弾・焼夷弾さらには超低空で機銃による攻撃が約三十五分位にも亘って行われ、三カ所から発火した。石狩川をはさんで両市街地が火災となり、民家が三十六戸焼失した。大破・中破・小破を加えると二百二十四戸となって、その罹災者は九百人に達した。

そのほか役場庁舎・巡査部長派出所・第二健民修練所（海浜ホテル）などが全焼、石狩郵便局や寺院など多くの施設も大被害をうけ、被害者は死亡者が十三名・重傷者六名・軽傷者七名であった。

また、花畔地区の農家の牛馬各二頭も、機銃射撃により犠牲となった。

これらのことは、さいわい石狩町役場に残されてあった『戦災記録簿』と『罹災者名簿』（抄本）から転記した。当時は報道管制が強く、戦争に関することは軍の機密で口は閉ざされた。戦後は、直ちに戦争中の資料が命令により焼却されたので、石狩の大被害は町外には殆ど

知らされていなかった。

その後も敗戦のショックがあまりにも大きく、さらに、つぎつぎと驚くばかりの生活の大変化、経済的にも苦しかったのが日常におわれて、時間とともに空襲の話は風化されつつあった。

石狩は昭和四十年以降、住宅団地の開発等により人口が急増し、平成八年九月に市制が施行された。その間、他市町村から移住した新市民や若い人たちには、空襲の事実がほとんど知られてなかった。石狩市の歴史に特筆されるべき事件として埋もれぬよう掘起し調査を開始した。昭和六十年七月の例会に提言された山口福司会長の意向をもとに「空襲調査班」が編成され、まず町内に在住する体験者を調べた。その後、それぞれの自宅を訪ねて、四十年前の貴重な空襲体験をお聞かせ願うことができ、感動させられつつ調査を進めた。また会員の知人で、札幌に住む石狩空襲の体験者からも、貴重な原稿をいただけた。

最も被害のはげしかった、石狩町本町地区と八幡町市街地の罹災状況図も、会員が協力して作製し添付した。

編集は石橋会員に努めてもらい、昭和六十二年に発刊することができた。あれから十六年、体験を語られたかた三十名のうち十名がこれまでに死亡した。空襲調査班員の仲間も四名が亡くなられており、歳月が過ぎることの早さに改めて驚いている。発行にあたり皆様のご協力、

お力尽くしにより、空襲時の一部分が伝えられたことを嬉しく思う。

あわせて、十三名の戦争犠牲者のかたがたの、御冥福を心からお祈りし、より住み良い石狩市が発展を続け、世界平和が実現されることを祈る次第です。

目次は、一―石狩空襲の概要・石橋孝夫／二―石狩空襲の体験を語る（二八名）／三―戦災記録簿／四―罹災名簿／付―石狩町左岸・右岸市街の空襲罹災状況見取り図（青木隆作図）で、空襲調査班員は石橋孝夫・福田佐市・沖本義久・吉本愛子・前川道寛・高瀬たみ・池田孝夫・川村正三・黒田晶子・吉野惣栄・青木隆である。

（文責 青木隆）

### いしかり郷土シリーズ2 『石狩の碑第一輯―石碑等にみる石狩町の歩み』

昭和六十二年二月二十八日発行／七月三十一日第二刷

発行／A五判／一〇七頁／外に地図／価格八〇

〇円／編集・石碑調査班・チーフ・金子仲久

本書は、いしかり郷土シリーズの二冊目で『石狩の碑（いしかりのいしづみ）第一輯―石碑等にみる石狩町の歩み』として発行された。

昭和六十年より郷土研究会に調査班が設けられ、二年にわたって資料収集・聞き取り・現地調査を進め、その

結果、約百五十基の対象件数があった。第一輯に収録したのはそのうちの五十七基で、明治以前の碑と開拓と産業関係の碑とした。

石碑は、一番（石狩弁天社説明版）から五七番（高富貯水池）までが、巻末の「石碑等分布図」に位置が示されている。内容は、発刊によせて／「一」本町地区の碑／「二」花畔地区の碑／「三」樽川地区の碑／「四」花川南・北地区の碑／「五」生振地区の碑／「六」八幡町・北生振・高岡・五の沢地区の碑／と地域別に分けて碑の建立月日や碑文／所在地、高さなどが碑の写真とともに記されている。

とくに、碑が建立された経緯などが詳しく説明されており、碑を通して石狩町の歩みがかいま見られるよう編集されている。

碑の説明文は金子仲久氏、田中實氏、略年表は田中實氏、碑の実測と写真撮影は山口福司があたった。また、長谷川嗣・前川道寛両氏からの協力も大きかった。調査班員は、金子仲久・高木憲了・村井喜久司・鈴木トミエ・吉田重雄・阿部徹雄・畑宮清一郎・大島龍・岡崎源治郎・田中實・山口福司である。

（文責 山口福司）

いしかり郷土シリーズ3 『石狩の碑第二輯―石碑等に  
みる石狩の歩み』

昭和六三年三月二〇日発行/A五判/一五〇頁  
外に地図/頒布価格一、〇〇〇円/編集・石碑  
調査班・チーフ・金子仲久

本書はいしかり郷土シリーズの三冊目で『石狩の碑第  
二輯―石碑等にみる石狩町の歩み』として発刊された。  
本書には五八番(石狩小学校の二宮金次郎像)から二三  
八番(美登位の三界萬靈観音像)の石碑等が収録された。  
発刊の言葉は第一輯と同じく山口福司会長、内容は第  
一輯を踏襲して「一」本町地区の碑、「二」花畔地区の  
碑、「三」樽川地区の碑、「四」花川南・北地区の碑/  
「五」生振地区の碑/「六」八幡町・高岡・北生振・美  
登位の碑/と地区分けにし、各々の地区の石碑等を調査  
収録した。また巻末には第一輯、第二輯に収録された石  
碑等の全位置を示す「石碑等分布図」を付した。第二輯  
の調査も、金子仲久会員をチーフとする石碑調査班が行っ  
た。班員は山口福司・高木憲了・鈴木トミエ・吉田重雄  
・阿部徹雄・畑宮清一郎・大島龍・岡崎源次郎・田中實  
・石橋孝夫である。

町内の石碑調査事業は、昭和六十年から手がけられた  
大きな事業で記念碑のみならず地域の歴史を物語る記念  
樹、個人碑、寺社なども対象に調査を行った。この調査

では、班員だけでなく石碑の所在情報などを各地域住民  
や各寺院の積極的協力があり、大きな力となった。また、  
顧問の花田知也氏、長谷川嗣氏の協力も見逃せない。

調査の結果、通算で二百三十八件の石碑等を確認収録  
することができた。しかし、馬頭観音など畑の隅などに  
ひっそりある碑については、十分調査が行き届いていな  
い。なお第二輯の写真も主に会長の山口福司氏が担当し、  
編集は石橋孝夫が行った。(文責 石橋孝夫)

いしかり郷土シリーズ4 『鎌田池菱と尚古社―中島家  
資料にみる石狩俳壇と各地の俳人たち』

著者 中島勝久/平成七年三月二〇日発行/A  
五判/カラー写真一二頁・本文一三四頁/限定  
三〇〇部

『鎌田池菱と尚古社』は、サブタイトル「中島家資料  
にみる石狩俳壇と各地の俳人たち」とあるように、明治  
十三年に石狩町で荒物業を開業し、富を築いた中島家か  
ら発見された資料をもとに編纂されたものである。

小樽から転籍して商売をはじめた中島伍作、伍作亡き  
あと、妻のキヨとその息子、中島房蔵(俳号中島戸方)  
を助けて中島家を守った番頭の鎌田幹六(俳号鎌田池菱)、  
鎌田幹六とキヨの間の息子、中島亀蔵(俳号中島湖菱)  
という、中島家の三人の俳人たちが遺した資料からは、

当時の俳句結社「石狩尚古社」にどう俳人たちの華麗な人間模様が伝わってくる。

石狩における俳句結社は安政年間の創設といわれ、その活動は明治中期にもっとも盛んとなった。結社に集う俳人たちは、北海道内はもとより全国にまで広がり、俳句指導者（宗匠）との交流も活発で、その活動は昭和初期まで続けられていた。

本の内容は、一、中島家と尚古社資料館／二、道史俳壇の拠点石狩／三、鎌田池菱（幹六）の経歴と作句活動／四、尚古社の明治初期の選者たち／五、尚古集と選者／六、尚古社の明治後期・大正期・昭和前期の道外選者たち／七、尚古社の明治後期・大正期・昭和前期の道内選者たち／八、大正期・昭和前期の尚古社主要俳人／九、尚古社主鎌田池菱の風光した主な俳人たち／十、鎌田池菱が関係した俳諧誌等／十一、参考―俳諧系圖―からなっている。校訂等は田中實会員の協力を得た。

北海道俳壇史の一時期を綿密に掘り起こした『鎌田池菱と尚古社』は、貴重な本である。なお、本書は北海道石狩支庁から援助を頂いた。

（文責 中島勝久）

### 『町内資料に読む―石狩町女性史年表』

著者 駒井秀子／編集協力 安井澄子

平成一四年三月三十一日発行／B五判／二五四頁  
／一五〇〇円

女性史は学問として認知されてからまだ日が浅い。原点は民衆史にあるけれどその一分野に収めることはできず研究範囲はあらゆることに及び、いま新しい局面を迎えている。今年新潟で開かれた女性史研究全国のつどいでも、地域女性史の課題がいくつか提案されて活発な意見交流が行われた。各地の報告では、地域女性史づくりに行政が支援し、自治体史の編集に女性史研究者の参画も珍しいことではなくなった。石狩でも「年表」ができたことで、一応、次の段階に進むための基礎づくりという意味はあったと思う。これだけの町内資料を引用した、読める町単位の女性史年表は前例が無いらしいのと、山川菊栄賞の候補に挙がったこともあってか興味を持って貰って、持ち込んだ分は完売した。ところで女性史は何を書くか。これまでの歴史に再構築を迫る、歴史の「偽造」を許さない、ということであるが、私の場合は、ささやかな願いだが「希望」を書きたいと思ってきた。

この年表は一八六八年から一九八八年までの一二〇年の女性史年表で、B五判二五四ページ、四百字詰め原稿用紙一七〇〇枚余。本文は一ページ三段に区切り、上段

は石狩町、中段は北海道・日本の関連事項、下段は参考資料の原文引用で項目数四九七、収録人名八四一名となっている。

この年表の不備は全て私の責任だが、安井澄子さんの助力なしにはできなかったし、資料読みの時期に数人の会員の協力があつたことを記しておきたい。

(文責 駒井秀子)

## 「石狩町本町地区市街図—明治三五年～四〇年（一九〇二～一九〇七）」

調査・作図 田中實／イラスト 鈴木トミエ／協力者 石橋孝夫・吉本愛子・竹永季雄／平成八年製作（八八×一六三センチメートル）

平成四年度調査活動の一つとして、「明治期石狩市街調査班」が編成されて取り組みが始まった。当時の数重なった市街大火災による住宅・寺院等の移転。秩父事件の主唱者・井上傳蔵（在町時は伊藤房次郎を名乗る）の三度の移転先など古記録を丹念に調べ、史跡・産業遺産、寺社等一六枚のイラストを付した大図面。当時の市街の主要建物と居住者住所二百余戸を網羅している。

この市街図は、石狩市制施行記念事業の「弁天町歴史通り」計画立案時に使用された。

(文責 田中實)

## 石狩市と石狩市郷土研究会の合作による記録写真集 「石狩市21世紀に伝える写真集」

編集 21世紀に伝える写真編集委員会／平成一四年五月三十一日石狩市教育委員会発行／A四判／二六五頁

縦横二一×三〇センチメートル、二三七頁に七一三枚の明治期から平成十三年までの写真を所収し、併せて略年表・市地図を付した。まさに、目で見ると見る石狩近現代史である。

この企画は、平成八年度の郷土研究会事業計画による「（仮称）石狩町歴史写真集」刊行事業に始まった。当初は、二ヶ年計画で写真等の収集調査と所蔵者リストの作成を目標だが、とくに、青木・高木・高瀬・船場・金子・吉本会員などの精力的な収集活動で予想を上廻る写真のあることが判り、事業は継続された。その結果、収集借入写真は一、〇〇〇枚を超え、印刷費を含めて検討しなければならなくなった。また、一部の提供者からは発行が延びたために返却を求められたこともあり、十二年一月、石狩歴史写真集編集実行委員会（代表・山口福司ほか九名）を組織して具体的な問題点を検討した。翌十一年、郷土研究会単独事業としての編集作業、印刷費の捻出は困難との結論に達した。「五年有余にわたって収集した写真をいま活かさなければ、永久にその機会は

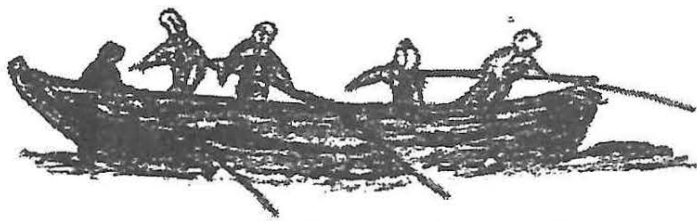
ない」との危機に立って、山口委員長は収集写真を示し市当局に協力を要請した。幸い市長はじめ担当部局のご理解が得られ、市教育委員会の事業と決定して、前記の編集委員会が発足した。委員八名中に、山口・高瀬・仲野・星川・三島・村山・吉本の郷土研究会員が入り、田中が特別協力者となった。

そして、石橋室長・工藤主査など担当者の熱意ある取り組みによって一ケ年で発行することができた。

(文責 田中實)

〈フクロテンマセン〉

5人～8人で操船



## 第四章 回想録―郷土研究と私

### 郷土研究会と私

#### 郷土研究会発足の当時を回想して

昭和三十五年入会 青木 隆

当会の発足が昭和三十五年で、ふり返ると四十五ヶ年を経過したことに驚く思いです。この間に私は二度の転居をし、古い資料や日記類などを止むなく処分したので記憶のみを頼って書いてみました。

あの頃、私は三十五才で町教委の係長でした。二人の若い職員と共に三名で、町教委としての全般の仕事に当たりました。

その頃の石狩町は、戦争中からの荒廃した各小学校校舎の改築に毎年追われて（小規模校の統合も併せ行ないながら）いたので、財政的にとても困難でした。

そうした中で社会教育面の強化充実も求められていましたので、関係者の協力をいただきながら社教団体（婦人・青年・体育協会・写真クラブ等）が発足されました。文化面から新しいものと考え、その当時道の農業普及所石狩所長の田中實さんに相談いたしました。

田中さんは全町的な状況把握にすぐれ勉強家、努力家として各方面から信望されており、さいわいなことに私の家とは幼少時から隣合せで家族ぐるみの親交も深かったことからご協力を願い、ずいぶん力を借りることができました。

初めての文化祭は石狩中学校を会場に行なったのですが、田中さんも先に立って展示物を集めて運び込み、どうにか成功を見ることができました。

そしてさらに、田中さんは農家の訪問指導のさいに耕作中に田・畠から出土した土器や石器を農家から譲り受け、大切に保存し研究されていきました。あの当時、考古学的知識の無かった私たちは、おかげで大きく眼をさまされました。非公式な発掘調査を田中さんに教わりながら行なうため、右岸の或る場所に教委職員三人と自転車に空箱を積んで行きました。

また、私は役場職員の若手の友人たちと話し合い、町内のいろいろなことを自分たちで考えて研究するグループの集いを作ってはどうかろうと、思うようになりました。田中さんにも大賛成を得たので、町民に参加を呼びかけることにして、町弘報に大きく載せましたところ三十数名の申し込みがありました。役場と郵便局の職員や中学校教員が主で、ほかに町民各層がいましたが、中に農家の主婦が一名入会申込があったのに驚き感激しました。郷土研究会総会が昭和三十五年三月三十日に石狩中

学校を会場に開かれ、殆ど全会員の出席のもと会長に石狩八幡神社の花田知也氏が選出されました。

当日は、記念講演として北海道大学大場利夫博士が道内の主な古代遺跡に関して話され私どもに感銘を与えてくれました。講話を前に田中實さん宅に大場先生を案内して町内各地から出土した石器・土器類を見てもらったのですが、先生はあまりの多さに驚き、「今まで全道各地を多く歩いたけれど、個人でこんなにたくさん集めて立派に保存された人は初めてである」と云われました。これらは質的にも面白いものがあり、これからの本格的調査を大いに期待されました。なおこの出土品の一部は、後日、田中さんが市教委に寄贈されたと聞いております。

それから、事業計画は全会員から調査研究の分野をどのように当りたいかとアンケートをしたところ、古代遺跡をはじめ石狩の歴史、町民の衣服史や食事、方言、気象、海浜植物の植生その他、でその多岐さに役員会で大検討をし当会の今後の運営方向を決めなければならぬことを感じさせられました。いづれにせよ広い分野に取り組むことではなく、やれることを選んで一歩ずつ進めてゆくしかないという割り切った考えに立ったのでした。

そのあと、役場の人事異動によって私が教委発足以来七年余りの仕事から総務課に転ずることになり、自分ではとても残念な気持ちでしたが、後任者に引継ぎました。新しい職場は財政担当で、これが大変いそがしい仕事で

したので、気掛かりでしたが当会について陰から手伝いもできませんでした。

また紙面の都合上書くことができず残念ですが、四代目会長になられた高木憲了さんや生振の前川道寛さんも当会発足前後に、たいへん多くの特段のお力ぞえを頂いたことも忘れられません。

長文になりましたが、郷土研究会の発足当時のことがとてもなつかしく、想い出すままに書きました。これからも益々新しい力を結集されて、発展されることを心から祈りながら終わりとします。

### 「石狩海濱ホテル」

平成四年入会 石川 秀子

私は郷土研究会に平成四年に入会させて戴き、多くの石狩の歴史や他町村への研修旅行で研鑽を深めた事を喜びとしてゐる。扱て本年五月の例会に於いて、田中顧問が昭和十二年前後の代表的な建築家である田上義也氏が百六十件を数えるホテルを各地に建築された、その中に石狩海濱ホテルがあったと話された。創立趣意書並びに設立の意図や工事の概要を知る貴重な設計図などが昭和十一年七月北海タイムスに掲載されており、その資料の



写しを一同に配られ、誠にびつくりしました。

内容は、石狩砂丘に大遊覧ホテルの建築、工費は五十万円との報道は、当時としては一大センセーションであっただろう。しかし、戦争も末期状態にありせっかく建築されたホテルは、一度の機能もあたわず石狩空襲に遇い焼失した。

砂上の楼閣として、視界より消された激震的なまぼろしのホテルであったという。そのお話に私は心中おだやかならず、六十年前の青春時代へタイムスリップして長い深い睡りよりそのホテルが甦ったのである。

思い起すと昭和十八年は女学校生であり、例年行われていた関西旅行が東京、大阪方面の大空襲により中止され、学生最後の楽しみが消えた。しかし、戦時であり彼の地の惨状を聞き泣いてあきらめたのである。

勉強ととも四時間授業であり、軍需工場や援農の日々を送る致し方ない時代であった。せめて道内の小旅行でもと、師に迫ったところやつと気持ち通じて道南方面と海水浴場へと決定した。先づは石狩浜へ一泊二日の旅に決まり歓喜した事を思いだす。石狩までの交通機関は、江別町より大橋のもとに川下りの蒸気船が発着する棧橋があり、そこに停泊していたかなり大きな汽船に安心して、師を中心に乗船した。始めての船旅に大喜び。蒼天を川面に写す石狩川は美しく、絶好日より。左方には江別製紙の三本煙突、右方は篠津の田園風景、白い航跡を

曳きポンポンと快速音にあわせて校歌の合唱。二時間位も乗ると川巾が広くなり町並も見え、大きな棧橋に着いた。潮の匂いがし、下船し石狩の町へ入った。古い家ばかりだが静かな風格ある町並であった。

今日の宿は砂丘に近い曹源寺と云うお寺であった。格式のある様子が伺える。挨拶をそこそこに、リュックサックを授けた。中味は各自が米、味噌、醤油や着替えなどであり、水着などを持っていた人は少ないので、一律に決められた白い半袖シャツに黒のブルーマ、(昔はシュミーズでしたが今はスリッパですね。実は水着が殆ど持っていないかったのでシュミーズ姿)でありました。

渚に広がる白い砂浜に、岩もなく白い波頭が寄せてはかえしていた。なんて美しい砂丘に白い灯台、ブランコがあり赫いハマナスが群落し、野草の楽園に日頃の不満が消え去ったのである。

水平線までは程遠く、すぐ気づかなかつたが、右方に白い美しい大きな建物が目に入った。なぜこのような所にあるのだろうか。軍艦のような姿をして、夕焼けのあかね色に染められて、別世界へ入ったような感激を受けた。在郷軍人らしき人が出入りしていたので、見学させてほしいと願ったが断られ、後ろ髪を引かれる思いで宿に戻った。

石狩の浜に灼きついた思い出を今、田中顧問より戴いた資料により、やはりまぼろしではなかったと云う満足

感に浸っている。しかし、懐かしいホテルである。

### 亡き金子仲久さんに誘われて

平成八年入会 今井 光 男

なんと云っても出逢いは金子仲久先輩でしょう。金子さんは先々代から家の地主さんであり、「仲さん」「仲さん」と呼ばれ慕われており、学生時代から知っておりました。「あかだも会」と云う会があります。旧志美小学校卒業生が中心となり、青年団の人達と交えて色々な活動をする会であります。

年に一度、一堂に会して元氣な姿をたしかめあいます。そんな中で、忘れかけている志美小学校のことや、昔の石狩、育った我が大地を語ってきたのですが、その中で金子さんが色々昔のことを語ってくれたものです。

私も若き青年団員としてその青春時代を志美で過ごし、旧道の今井と云われていたことに興味をもっていったことがあります。又、曾祖母から「獣道」は人の道を作ったなどと聞かされ、家のルーツや石狩の旧道を調べて、将来、このことを石狩を語りつく人がいてもいいのでは、と思うようになりました。

金子さんにすすめられて、郷土研究会へ仲間入りが出

きたのです。よき先輩に先立たれた話が途中切れになりましたが、今後も先輩の指導を守り、少しでも近づいて行けたらと努力しています。

### 亡き小川茂さんに誘われて

平成十年入会 榎 本 新一

回想録と言っても、郷土研究会に入会させていたまだ日も浅い私には、何を書いてよいのかわからぬ状態です。私が郷土研究会へ入会したきっかけは、高木前会長と、市内の或る委員会と一緒に関係で研究会のことを知りました。私も石狩で生まれ育ちましたが、この土地の古いことには全く無知ですので、入会をして皆さんのお話を聞くことを楽しみに来るくらいに軽く考えに入らせていただきました。入会をして驚いたことは、会員の皆さんが、自分の手で調査研究をし、その結果を会誌に発表していることです。

今は亡き小川茂さんが近所にいましたので、いろいろ教えていただきました。小川さんは、幾度となく『いしかり暦』に投稿されていました。たまたま十四号に八幡町の事を載せたので手伝ってほしいと相談を受けました。始めて、地域のことを調査し活字にすることに楽

しさを感じたのですが、その半面、調査の確実さと文章についての責任の重さも痛感しました。

今また、沖本義尚さんより、ある研究の手伝いを依頼され、これから協力し作業にかかりたいと思っっているところです。

私は、自分の仕事のほうもまだ現役ですので、郷土研究会も疎遠がちではありますが、もう少し体に余裕ができましたら自分なりのテーマで調査研究をしたいと思っています。

これからも先輩会員皆様のご指導ご協力を頂き、勉強してまいります。

## 砂浜の玫瑰

平成七年入会 君 尹彦

もう、ずい分前のことになった。若生側に渡って石狩河口を、田中さんに案内していただいた時、お話を聞く自分の足で砂浜の玫瑰を踏みつけていることに気がき慌てたのを思い出す。そのことを後日新聞に書いたら、同行の某さんは笑って言った。「玫瑰といえは高さが1mもあるだろう。背の低いお前がどうして踏みつけられるだろうか」と。私はあえて反論も説明もしなかったのは、

町場で見かける玫瑰は子どもの背丈ほどもあり、枝葉を繁らせ、花を咲かせたり赤い実を結んだりしている街路樹であり庭木であるから。

石狩川の波と日本海の涛をあび、強風に耐えて河口の砂浜に根をはいつくばらせ、地に枝葉をこすりつけて生きる玫瑰を、庭木になれた人が目に止めなかつたからと言って文句をつけなくてよからう。それを、小さいから肥料だ防虫剤だと金をかけて大きく見せるのも人間の知恵ならば、小さいものは小さいなりに、その場その場で大切に見守り育てることも人間の務めでなければならぬ。

郷土研究会はこれからもこの両方の調査と研究を続けてほしいと願うのです。

## 「なもなきひとむれ」の歴史

昭和五十五年入会 駒井秀子

いくつだったろう、社会に関心を持ったのは、と考えていて思い出した。いつも特別扱いだった年子の弟のこと。訳ありの長女と欠けがえのない長男に挟まれた私は、弟が生まれると他所へ預けられ実母をおばちゃんと呼んでいた。その母親の顔。短腹を起してデレキで殴ったり、

煮え湯の入った薬缶を投げつけた父親に、口を返したことも無い母だった。二人の間に立ちつくして大声で泣き叫んでいる自分が蘇る。それから、近所の洋服仕立て屋のおじさん。戦争に反対したために特高の拷問で片脚を喪ったおじさんは、学校前の少女に、なぜ自分の体験を語ったのだろうか。

誰にでもあるようなこうしたでき事が、日常のくらしから国家・世界に続く、差別と暴力に対する強い怒りと悲しみを私に教えた。歴史は細部なのだと思う。民衆の眼から見える歴史こそが私たちの歴史なのだと思う。まず人間に目が行って、それから社会が見えて、民衆史を知り、自然な成り行きで女性史に辿り着いた。ひと握りの偉い男たちの歴史ではなく、名も無い人群れから光を当て直してみる事に私の関心はある。それにしても、石狩の住人になったのが二十八年前、すぐにライサツのアイヌ部落のことを調べたくて役場を訪れ、それから間もなく郷土研究会に入れて貰ったのだと思うけれど、あの頃、他に女性会員が居なかったような気がする。ほんとうに、隔世の感がある。

いまがあるということ

昭和五十五年入会 鈴木 トミエ

児童館に勤務していたころ、子供たちが「転校生よ」といつて友達を連れて遊びに来た。「また、転校生？新しい友達が増えていいねえ」と私。

ちやうど花川北地区の団地分譲がはじまり、札幌市から移住する人たちが多くなつた昭和五十年代半ばのことである。小学校の教室から児童があふれ、校舎を増築しても追いつかないほどであったと聞く。この子供たちにとって石狩が故郷になるんだなあ、とある種の感慨をもつたのを今でも覚えていてる。

新しい住民に対し、石狩ってどんな町？と聞かれたとき、どのように答えられるだろうと自問した。その解決策として石狩町郷土研究会に入会したのが昭和五十五年で、当時、会では女性会員の出席がなかったように思う。五十六年春に発行された『いしかり暦』第二号には私のつたない文章の「子供に聞かせる石狩町の昔話」が掲載されている。

その後、石狩町内のお年寄りから昔の話をお聞きし、児童館で編集した児童版画集『いしかりむかしは』（第十回北海道青少年科学文化振興賞を受賞）が昭和六十二年秋に刊行された。子供に伝える石狩の昔話から大人向

けのものをと、企画され執筆したのが『石狩百話』であり、この本は石狩市制施行記念品として市内に全戸配布された。その後、『石狩市年表』の編集に加わり、現在、石狩の古文書解読の仕事にたずさわっている。

私が長い間、石狩の歴史にかかわる仕事を続けられたのは、郷土研究会の仲間たちの励ましや助言があったからである。

「石狩って、どんな町？」に答えられるよう、初心を忘れないでいたいと思う。

## 郷土研究会と私

昭和三十五年入会 高 木 憲 了

昭和三十年に石狩の住人となって五年目に待ちに待った郷土研究会が発足した。郷土を愛しその歴史をより一層知りたいと思う人々の熱意と努力によって、石狩に眠っていた歴史を掘り起こし、徐々に明らかにされてきた。

近年は古文学等の研究により、松前藩時代から明治にかけての事跡が解明されつつある。黙って見つめてきたように思う四十四年の中で、知らず知らず考古学的なものを書いてみたりしてきた。また、平成五年、了恵寺

開基百年を機縁に建てられた宝蔵館が、会員の皆様に利用して頂けるようになったことを嬉しく思っている。

四十四年の歴史のなかで、昭和三十五年設立時は花田知也会長で、田中氏と共に理事を四十二年まで努めた。四十九年から五十七年、六十三年から平成七年まで副会長、同八年から十五年三月まで会長を努めさせてもらった。

各新聞社で郷土研究会と私の関わりを取り上げた記事は、北海タイムス―三十六年十月二十六日付／北海タイムス―四十二年四月七日付／北海道新聞―五十八年二月二十四日付がある。

ほかに郷土研究会会員として、四十二年九月の紅葉山遺跡調査のさいに北海学園大学の藤本英夫氏に協力、『石狩町誌』上巻の石狩の先史時代の項では資料提供をした。『花畔の百年』『南線小学校開校70周年』『屯田90年史』『北海道の文化』『石狩の文化』の各誌にも執筆した。

平成十二年三月の第十二回公民館祭り以来、毎年、市民文化祭と公民館祭りには、郷土研究会に協力して宝蔵館所蔵品を展示している。

郷土研究会が創立四十五年目を迎えるにあたり、ますます発展することを願っている。

## 感謝をこめて

昭和六十年入会 高瀬 たみ

石狩の歴史に触れるきっかけは、娘が小学校三年生のとき、学校からいただいた社会科副読本の『いしかり』を手にしたことからでした。花川に移り住んで八年目の昭和六十年、この町がどんなところなのか私の方が知りたいときでしたから、磁力に引かれるように夢中になって『いしかり』を読みました。そこで何よりも嬉しかったのは、子供のころ教科書で習った遠い江戸時代がこの町の歴史にあったことです。

早速、子供の夏休み自由研究を「石狩の歴史」と題し、親の私が率先してカメラを片手に本町地区に出かけました。さらに、もっと石狩のことを知りたくて郷土研究会に同年入れていただきました。

同会の会員という縁でしょうか、入会して十年目の平成七年、『石狩百話』の編集補助員として鈴木トミエさんの下で働かせていただきました。また同じ年から、公民館事業シニアプラザ「郷土研究クラブ」のお世話を六年間させていただき、さらに学習を重ねることができました。他に同八年から郷土研究会事業として取り組んだ『写真集』ですが、写真収集から市の事業となるまで大変なときがありました。しかし、それも同会の皆さんが

一致団結し支えて下さったお陰で、同十四年に教育委員会から『21世紀に伝える写真集』として発行されました。ご協力に深く感謝致しております。

現在は、同八年に公民館事業「マイタウン講座」からスタートした「石狩市ガイドボランティアの会」で、石狩を案内するためのブックレットやマップの作成、観光客のガイドなどしております。

いつも楽しみにしております例会、とくに田中實先生の熱心な講義と毎回いただく貴重な資料は、後で読んでも独特の語り口とともに、歴史上の人物や出来事が思い出される大切なものです。本場に田中先生、そして奥様には、何をするにもご指導いただきました。紙面をかりてお礼申し上げます。このように、田中先生をはじめ多くの先達会員の方々が調べまとめて下さった資料のお陰で、それらを基に後の人に残すものを作ったり、訪れて下さる人に自信をもって石狩を語るができます。

歴史を知るといことは、時を越えてその時代・人々の難難辛苦（かんなんしんく）も伝わり、歴史に向き合う姿勢が問われます。それは何度もガイドをしているうちに、日々反省とともに新たな発見・疑問に出会い、そのたびに繰り返す学びのなかで、当事者の出来事が語りかけてくるものが自分の意識に感じるときです。

最初は夢中でやってきた学習やガイドでしたが、最近歴史を動かしているのは何なのか、外見だけでなく内

面も理解する必要を感じています。

最初の感動から十八年、今も新しい発見があるたびに嬉しくなります。これからも市発行・郷土研究会発行の書物や諸先輩に御教示いただきましたことをもとに、石狩の良さを伝えてまいりたいと思います。

同会から沢山のことを学ばせていただき、感謝の気持ちでいっぱいですが、言葉が足らずこのような文章となりました。記念誌発行にあたり、感謝とお祝いの言葉といたします。

### 郷土研究会は深く広い

平成四年入会 田 中 豈恵子

昭和五十二年、花川北に住宅を建て札幌市西区山の手より引越し、石狩町の住民になりました。しかし、生活行動は以前と同じ様に、美術館や図書館、デパート等札幌へ向いていました。ようやく子供達が小学校に入学、次々に開校される学校のPTA活動で、校庭の植樹に参加するうちに石狩の土地に愛着を持ち、石狩が「私達家族のふるさと」と思う様になりました。そして、もっと石狩を知りたいと思う様になっていた時、油絵サークルの仲間と石狩の野に咲く花々や絵の題材になりそうな所

を知っている石狩生まれの吉本さんが、郷土研究会を紹介して下さい、さっそく入会させていただきました。

郷土研究会の方々は歴代の会長さんをはじめ、皆さんたちは本当に石狩の事にくわしく、毎回すばらしい資料を用意してあたたかく迎えて下さいました。

以前、「喜びも悲しみも幾歳月」という映画の場面を観た石狩の、あの赤白の灯台の歴史や、子供の頃、父親の会社の親睦旅行で来た時の鮭の地曳網漁や数々の鮭料理、石狩の漁業関係、除虫菊も栽培されていた農業関係者の話など楽しい例会で興味はつきません。さらに井上伝蔵やアイヌの人々の歴史、また、石狩市誕生時の野外劇に参加させてもらえた事、紅葉山遺跡の発掘現場の見学、ほかに毎年の研修旅行も楽しみです。

古文書の研修では只ながめていただけの古文書が、一歩近づいて来ました。石狩市郷土研究会は深く広く楽しい会です。

### 石狩生まれの私

平成九年入会 釣 本 峰 雄

石狩に生まれ育って愛郷心も持っているつもりですが、古里のことは何も知らないことに気付いたのが入会の動

## 石狩の歴史にふれた俳句資料

平成四年入会 中 島 勝 久

機です。仕事の都合で例会にもなかなか出席できず心苦しく思っておりますが、遅刻しても皆さんが暖かく迎えて下さり、茶菓だけは人一倍頂いております。会のためにお役に立てることを自分なりに捜しておりますが、今のところ拙誌に会のことをご紹介する位しか思いつかず、歯がゆい思いをしております。

石狩は道内でも歴史の古い街で貴重な資料が残っていますが、それらを調査研究する人は決して多くはありません。もつとも、多くの人が石狩の歴史に関心を持つようになれば良いのですが、若い人はどうしても仕事や家事に追われてその余裕がないのかも知れませんが、やはり、ある程度年輩の方のほうが昔のこともご存知でしょうし、時間のゆとりもあるのではないのでしょうか。

石狩の変遷を、体験しているお年寄りからお話を聞いて、その内容をまとめるようなことで、会のお役に立てればとも思っております。

そのためには、まだまだ訓練が必要なようです。今はまだ、皆さんのお荷物になるような会員ですが、これからよろしく願います。

石狩市郷土研究会が、昭和三十五年に発足し今年で四十五周年を迎える事になりました。その間、石狩郷土の歴史・文化・生活等、埋もれている資料から事実を掘り起こし、地道な作業を重ねて探究し、研鑽して後世に残そうとしてきた先輩会員のご尽力に感謝申し上げます。

石狩は明治期に入り本町市街地に数度の大火があり、多くの資料が焼失していること、さらに鮭漁の衰退等により石狩を去る者が多く、資料が散乱しているのが現状であります。

私が郷土研究会の会員になったきっかけは、郷土研究会会員の先達、前川道寛氏が石狩の俳句について二十数年の歳月をかけ、『石狩俳壇誌』を昭和六十年十二月に発行したことによります。前川氏は、わが家に遺された石狩の俳句資料を調査するために、何度も我が家を訪れました。当時、私は石狩の俳句について関心はなく、遺された資料の価値も判りませんでした。しかし、前川氏の著述書『石狩俳壇誌』を拝読し、この貴重な資料を整理し保存しなければと、強く思うようになりました。

さらに、中島家に大きな功績を果たした鎌田幹六（私の曾祖父、俳号は鎌田池菱）と、幕末のころからあった



石狩の俳句結社「石狩尚古社」の関わりを知りたいと思  
うようになりました。家にある資料をもとにして調査し、  
研究を重ね十数年が経過した頃、石狩の歴史も知る必要  
に迫られ、郷土研究会には平成四年に入会致しました。

私がこつこつ進めてきた調査をようやく纏めて本にし  
て残そうと、当時、郷土研究会の会長であった田中實氏  
に相談しましたところ、田中会長は郷土研究会から冊子  
にして発刊することを勧めてくれました。こうして、  
『いしかり郷土シリーズ4 鎌田池菱と尚古社』が平成  
七年三月に発行されました。

これもひとえに、会長をはじめ会員の皆さんの協力の  
賜物と深く感謝しています。石狩尚古社から発行された  
俳句集『尚古集』が、幕末から昭和初期まで続いた唯一  
の句集であることのほかに、尚古社という結社が北海道  
中央では最古の俳句結社でもあるということが判明し、  
日の目をみることができました。

今後とも、皆さんと共に石狩の歴史を掘り起こし、日  
々研鑽に励みたいと思います。

## 待ちどおしい古文書会

平成五年入会 仲野 孝

終の住み処として造成中の花川北を選び、昭和五十一年  
年師走に石狩の住民になりました。住んでみてこの町が  
古くから鮭漁で栄え、渡船が本町地区と八幡地区を往来  
していることを知りました。海のある町に初めて住むよ  
うになった故か、鮭の穫れる様子を見たり、石狩川の河  
口を行き来する渡船には、一度是非乗ってみたいと思っ  
ているうちに廃止となり、とても残念でした。新聞の地  
域欄によく目を通すようになったのは、石狩に来てから  
です。町の動きに関心が高くなったからでしょう。そん  
な中、月一回でしかも夜の例会と聞き、これなら休まず  
に出席できると考え平成五年四月に入会しました。

例会での発表は、古い歴史を持つ石狩の先人のご苦労  
の跡を、きちんとした記録の文書や資料・写真などに基  
づいてお話が聴けるので、興味が尽きません。次回が待  
ち遠くなるほどです。私が特に関心を持ったのは、古  
文書の解説と解説です。最初は何と書いてあるのか皆目  
わからないと弱音を吐きそうになるのですが、じつと見  
つめているとポツポツと読める場所が見付かり、前後の  
文字とつなげてみると判読できたりして、その醍醐味は  
格別です。又、文字の行間から浮かび上がってくる書き

手の息づかい、時代の背景などと自分を重ね合せ、若しその時代に生まれていたらどんな暮らし方、どんな人生観を持っていただろうなどと考えさせられ、生きることの大切さを学習を通して知る事ができたと思います。

今年五月から始まった古文書チームの仲間に入れていただき、分厚い辞典をめぐりながら難解な文字と格闘している、遠い昔の自分に戻ったような気持ちになれます。伝統のある郷土研究会に籍を置く一人として、研究成果を次世代につなげる義務があることを痛感しつつも、何一つ貢献できないことを反省しています。

## 石狩空襲と研究会

平成四年入会 中村 秋雄

郷土研究会創立四十五周年の記念誌発刊に当り、心からお祝い申し上げます。

私と研究会の結び付きは、右半身麻痺の障害者の私が字を書く事もできず、左手一本でも出来るワープロを始めた事にあります。誰も教えてくれない中で、退職後の暇に任せ、自分の過ごしてきた足跡を子供達に書き残す事ができればと一字一字記憶の糸を手繰り寄せ、自分史なるものを書き始めました。そんな時に、参考資料捜し

で目に付いたのが、石狩町郷土研究会発行の『石狩の空襲を語りつぐ』という記録の冊子です。

私は思わず目も離さずに読み耽り、心が震えました。三十数年前のあの日の事がまざまざと甦り、頭のなかは走馬灯の様にあの日、昭和二十年七月十五日の石狩空襲を思い出しました。

私は、あの日一日の出来事を、妻と共に肉眼で見つめて来た生き証人であります。唯、見れなかったのは頭の上に敵のグラマン機が居た二、三十分だけで、敵機退避後は、真っ先に消火に走ったのも私達でありました。そこで、私は出来るだけ真実をと思い、私の見た空襲を記録しました。

投稿した原稿は、『いしかり暦』第七号（一九八八年九月発行）の二十九ページから三十五ページ迄に掲載され、以来、郷土研究会との御付き合いが始まりました。会員に参画させて戴いたのは平成六年頃からで、田中實氏元会長のお誘いがあり入会し現在に至っています。

## 郷土研究会と私

平成五年入会 原澤 文子

月に一度の例会・郷土研究会で会員の方々にお会い出

来る楽しみ。田中實先生の（石狩の開発に貢献された人物やその歴史に関する足跡等）蘊蓄に富んだお話に興味を深くし、又、石狩を愛する昔の人々の営み、動植物、山河、海そして鮭漁の方法等面白く楽しい二時間でございます。時折、課外授業のようにバスにて、近隣市町村の由緒ある場所へ研修に出かけ勉強をさせて頂き、有意義な一日を過ごし心の満足を感じます。

鳥も魚も皆群れて生きる、人間も又一人では決して生きられるものではない。金・物ではない、持つと往々にして悪が生れ、心が汚れる。立派な先人のお陰をもって、今日、我々の文化的生活がある事を感謝したい。石狩市郷土研究会の有識と穏健なるメンバーにかこまれ、多くのよき人々に暖かく支えられて人生の最後を暑さ寒さに堪えた木々の紅葉の如くに、輝きながら老いの身に合った努力をしていきたいものと思っております。石狩の地に人々にありがとうございますとお礼を申し上げます。

### 郷土研究会は心のビタミン剤

平成七年入会 星 川 富美子

どの街にも、必ず先人の生きた歴史があります。それも表舞台に出た勝者だけではなく、歴史上語られる機会

の少ない、多くの敗者の存在もあつたに違いない歴史。その弱者だと思ひ込んでいた先人が、実は偉大な魂の持ち主で、豊かな知恵者だとか……………。

月に一度の郷土研究会は、そういう知らない研究講話が主で、先輩が奥深く研究し熱心に調べて、それを惜しげもなく話してくれる。慌ただしい生活の私にとって、何よりも楽しみです。それが心のビタミン剤で、明日へと繋がる活力となり、自分の生き方へとも繋がるのです。解りやすく真摯な内容、素敵なお話しをして下さる田中實先生には、いつも感動します。

幼い頃、父の胡座の中で何度も聞いた楠木正成、加藤清正、乃木大将等の話。歴史に興味を持ったのも、おそらく父のお陰と思っております。私にも先祖が居て、今の自分が居て、未来に繋がっていくのだと思っております。今の自分が、その続く一筋の連なる道のどこかに居るのだと思うと、先祖への感謝と、今を生かしてもらっている有難さを感じます。

平成七年に会員の高瀬たみさんに誘いをうけ、一人が入会するにはビツクすぎ、ボランテアで知り合った三島照子さんに声をかけ二人で郷土研究会に入会しました。この会が四十五年も途切れなく続いていたことに、驚きと誇りを感じます。そして四十五周年のこの時に、自分が逢えたことに感謝します。

これからも偉大な先輩たちに教わりながら、できる限

り自分の生きていく指針をみつけ感動して生きていきたいと思っています。

### 郷土研究会へ入会まで

昭和六十二年入会 村 山 耀 一

私が石狩町の住民になったのは、教員人事により松前郡福島町立福島中学校から石狩町立花川南中学校に転勤した昭和六十年の四月一日である。村山家は、曾祖母の村山コトや祖父村山栄蔵（村山本家八代目）、そして父は、明治四十一年春に石狩を去り、小樽に転居した。それから七十七年ぶりに私の代になって石狩に戻ってきた。

私の先祖は松前藩と関り、松前に本店を置いて活躍した場所請負人村山伝兵衛である。初代伝兵衛が石狩場所を最初に請負い鮭漁やアイヌとの交易をしたのが宝永三年（一七〇六）と記録されており、今から二百九十七年前のことである。

その後も石狩場所を請負っていたが、文化十二年（一八一五）には石狩十三場所を一括請負い、翌年、石狩弁天社を再興し村山家の守護神として厚く守ってきた。その後、文政四年（一八二二）に松前藩は石狩場所を分家である村山伝次郎に請わせ、村山家と石狩、そして鮭と

の関わりは大きくなった。

しかし、歴史の変遷のなかで幕末の「石狩改革」や場所請負制度の廃止など、村山家の情勢は厳しいものもあった。それでも明治時代の石狩における村山家の実力はまだ大きかったようである。

私は昭和十六年十二月二日に朝鮮の京城府で誕生した。父が海軍省事務官として勤務していたからだ。敗戦後、父は仕事を失い家族は引揚げ者として先祖ゆかりの北海道にたどり着いた時、私は四才であった。少年時代、父や祖父から村山家十代目として期待され、先祖の功績や石狩のことなど聞いてはいたが、直接的な資料もなく遠い昔の出来事としか受けとめられなかった。昭和四十三年（一九六八）に行なわれた北海道開拓百年記念式典では、三代目伝兵衛の関わりで招待があり、私は父に代わり妻と列席した。私の手元に村山家の古文書類や由緒ある生活資料の品々等を託されたのは、二十代の後半であった。

しかし、文書が読めなかった私はその価値が把握できず、又、将来的保存にも心配があったため昭和五十九年（一九八四）に北海道開拓記念館に千点以上の文書や品々を一括寄贈したのである。その後の反響は大きく札幌市の歴史資料に役立ったり、北海道の漁業史に影響を与えたようだ。後で知ったが郷土研究会の会員の君尹彦先生が『新札幌市史』の編集に関して村山文書を活用され

たという。又、石狩でも『石狩町誌』や『ふるさと／＼しかり』にも、寄贈した文書や彦久丸の図（掛軸）が使われていて嬉しいかぎりである。

翌昭和六十年に、石狩管内勤務を希望してはいたものの、先祖所縁の地、石狩町に転勤できたことは思いがけないことであり、先祖が呼び寄せてくれたような気持ちでした。校下の花川南に借家をしましたが、なんと偶然にも、現在郷土研究会の仲間である鈴木トミエさんの持ち物でした。入居してからご挨拶に行ったとき、私の先祖は石狩に關りのあることを話したような気がします。

鈴木さんも村山家のことをよくご存じで、田中實さんのことや郷土研究会のことを紹介していただいたことを思い出します。

その後、私は当時石狩町の助役をされていた田中實さん宅を訪問したり、助役室に訪れたりして色々お話を聞きしたり資料を頂いたりしましたが、田中さんが私以上に村山家のことを詳しくご存じだったことに驚きを感じました。

花川南中学校の生徒も村山伝兵衛のことをよく知っていて、私を「伝兵衛さん」と呼んでくれたこともあり、故郷意識が高まりました。石狩にはお墓もあったため私はこの地に永住を決めました。

それから二年後の昭和六十二年四月十八日（土）午後三時に、当時あった青少年センターで開かれた例会から

郷土研究会に入会しました。

「先祖のことをもっと知りたい、石狩のことをもっと知りたい」が入会の理由でした。

### 「石狩を知る」歓び

平成九年入会 安井澄子

先輩会員の皆さんのように、会に対する思い出も思い入れも持たない程に、日の浅い私にとっての郷土研究会とは……………。

石狩川の上流の町、旭川から流れ着いたように茨戸川の畔に住んだのが一九七六年、もう二十八年になりました。入会のきっかけは女性史年表づくりの仲間に入れてもらってからです。

それまでは歴史とは無縁の生活でしたので、毎月の例会で諸先輩から教わることは、総て新鮮で石狩に關することは本当に楽しく興味深いことばかりです。

特にその都度補足される田中實先生の博識「生き字引」には、小さな「一語」から途方もなく奥深く拡がっていくお話に毎回畏敬の念を禁じ得ません。「学問をする」ということの真意を遠くからそっと垣間見る心境です。

私個人としては、「石狩」とは全く縁のないものと思っ

ておりました。石狩の歴史に興味を持ち、書物を読んでいくうちに、ごく近い身内の中の幾人もが、それぞれ石狩にルーツを持っていることが解ってきました。

流石「北海道の玄関口の一つであった石狩」と、石狩に愛着が出て来たところでした。

第一、第二の故郷よりも一番長く住むことになった「第三の故郷―石狩」です。これからは、他の街で活躍する石狩出身者のお話も聞けたらと考えています。

これからがスタートです。宜しくご指導下さい。

## 二代目会長を引きうけて

昭和五十五年入会 山口 福 司

顧みますと昭和五十四年十二月、ご縁あって「終の住処」として石狩の住民になりました。歴史と豊かな自然、そして発展途上のマチ、ことに札幌圏と言うことで満足しました。

前任地「紋別」で地元郷土史研究会でお世話になった関係もあって、こちらに来てからも直ぐ「石狩町郷土研究会」に入会させて頂きました。

昭和三十五年の創立で初代花田会長のもと、会員七十四名の錚々たるメンバーでスタートし、大変な活躍をさ

れていたとお聞きしました。ところが四十五年の歴史にも栄枯盛衰がありまして、会員も昭和五十年には十五名、五十四年には十名と減少して、私の入会当時が最も低調な時代だったと思います。

私は昭和五十八年八月と言う半端な月に二代目会長をお引き受けする羽目になってしまいました。

その当時、長谷川嗣さん、前川道寛さん、田中實さん等著名な方々がおられるのに、浅学の私が身の程も弁えずお引受けしてしまつて、いま考えても汗顔の至りです。そして七年七カ月も大事な席を汚してしまいました。

幸いに勝れた先達・役員・会員に恵まれて会の活動も盛り返し、会独自の著書『石狩の空襲を語りつぐ』・『石狩の碑一輯』・『石狩の碑二輯』・『いしかり渡船場物語』等を世に送り出すことが出来ました。なお機関誌『いしかり暦』は継続され今日に至っております。

今や当会は会員数も三十余名と大幅に増え、卓越した指導者に生まれ、多才な役員・会員で揺るがない組織に成長して、磐石の四十五年を迎えることになりました。

この度、四十五周年事業として「記念誌」の発行、並びに「石狩の碑第三輯」の調査に取り組まれたことは、まことに意義深く委員の皆さんのご苦勞に、敬意を表します。

四十五年と言う歴史に思いを馳せ、その重みを噛み締めると熱いものが胸に込み上げてきます。

私の八十余年の人生の形成にどんなに大きな影響を受けたか計り知れませんが、感激ひとしおです。有難うございました。

### 石狩の漁労史を記したい

平成九年入会 吉岡玉吉

石狩市郷土研究会は昭和三十五年（一九六〇）三月、呱呱の声を挙げてから四十五年となります。この間の活動は、石狩市の歴史記録に残る数々の誌史を研鑽され、諸先輩諸氏の努力に深い敬意を表するところです。

このような偉大な組織に組みさせて戴き、心身の素養に努めることの出来ることを幸甚とするものであります。

私は本会に入会させて戴いたのは、平成九年（一九九七）五月で、同郷の田中實顧問と隅々懐旧を温めた折り、石狩本町地区は石狩河口橋が出来、名残りの渡船場も廃止になり、蛙で栄えた街も人口が減り、小学校に上がる児童も例年一人か二人、完く隔世の感があると話されてきました。漁業の歴史は曲がりなりにも記述されてはいるが、実際に携わった人々の歴史は口承の域を出ず活字になっていないとも聞きました。底辺で苦勞し漁勞した漁業者の働き振りを活字にして、これからの石狩の街に

暮す人々に先人の生きざまを会員皆様の力を借りて記録したいと願って、平成九年（一九九七）に入会させてもらった次第です。

石狩本町地区の横町（自称、裏町）弁天町付近は、新潟県などを中心に東北地方出身の漁師が中心で、石狩湾に生息する魚介類を生産する零細漁業者であり、春（三月）六月は厚田村への鯉漁、秋（九月）十二月は石狩湾から石狩川に遡上する鮭の漁獲を生活の糧として生計を維持して来ました。

私は明治二十一年（一八八九）、新潟県北蒲原郡南浜村字島見浜（現新潟市島見町）から入植して来た新潟漁師の三代目（一一六年）であります。そのようなことから忘れられようとする鮭漁（漁労法四種Ⅱ定置網漁、地曳網漁、流し網漁、刺し網漁）また大正期から昭和二十年（一九四五）代まで廻り舟として厚田村で行われた鯉漁の模様、ほかに漁労に因んだ風俗習慣、浜言葉（方言）等々、これらのことを後世に伝えようと志した次第です。

今日まで、会員の皆様の深い御理解と御支援により、例会時にはそれぞれの研究の一端を発表させて戴き、心苦しく感じているところです。私は常々、自分の生まれた街の歴史を知ることが出発点で、自らの社会の一員として生活して行く上での心の糧となると、心に誓って努力しているつもりです。つまり温故知新ということを信

条としております。会員の皆様、今後共御指導、御鞭撻の程をよろしくお願い致します。

終わりに創立四十五周年を記念し、本会が発展することを皆様と共に祈念致します。

### 私の郷土研究会

平成七年入会 吉 永 繁 起

私が郷土研究会に入会したのは、平成七年の四月のことでした。動機は、今にしてみると自分本位のものでした。入会するふた月前に、私は公民館の「ガイドボランティア養成講座」に勇を鼓して参加していました。退職後は、自分が興味を持てることを通じて地元に拘わりあいながら生きてみたいとの思いでした。講座では、講師の方々から、石狩について様々なことを教えて頂きました。

お伺いしているうちに、自分が今までに三十年以上も石狩（花畔）に暮しながら、石狩のことを何も知らずに過してきたことに驚かされました。

ガイドをするに当たっては当然のことながら、小さく思える事柄でも、その背景を理解していなければ、単なる受売りに墮してしまふ恐れがあります。私の入会は、

ガイドをするに当たって必要なもの、大切なものを必ずや満たしてくれるとの、期待があったからです。実際に、その通りでした。

そして、郷土を見る目、歴史を見る目が深まり広がり、今では、時代の流れや人々との繋りに、興味の尽きるこゝとがありません。感謝の気持ちで一杯です。これからも、よろしく願致します。

### 心豊かになれる会

昭和五十五年入会 吉 本 愛 子

現在私は、植物画や合唱団など、五サークルに所属し、老齡期の青春を楽しんでいるが、この中で最初に入会し、現在も続いているのが郷土研究会である。

二十数年前、当時若葉小学校に入学した次男が、駒井秀子さんの息子さんと同じクラスだったことから知り合いになり、その後も文庫活動などで一緒にいるときに誘われたのが、入会のきっかけと記憶している。

生まれ故郷である花畔の一部が住宅団地になった時、この花川北に家を建て再び石狩に住むことになった。若いころはあまり興味の無かった石狩のことなどを、勉強してみるのも良いかなと、気軽に入会してしまった。



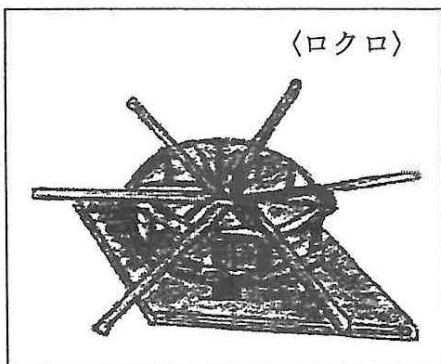
正直いって最初はあまり面白い会ではなかった。会員は小父さんばかりで、数少ない女性会員は、難しい立派な意見の言える人たち。

教養も学歴も無いただのオバサンの私には、気の重い会でもあった。それでも、途中半端というのが嫌いな私は、毎月の例会を殆ど休むことなく続けているうちに、学校では学ぶことの無かった様々な角度からの知識を得ることが出来、何だか得した気持ちになって帰宅したものである。

この会を通して色々な講演会や講座に参加し、貴重な文書や文化財に触れ合う体験ができ、心豊かな生活が出来ることは、私にとって何よりもの財産である。

(五十音順)

〈ロクロ〉



資料編

- 1 歴代役員と会員名簿
- 2 石狩市郷土研究会会則
- 3 予算の移り変わり
- 4 新聞・広報紙などで紹介された研究会

付

- 1 明治三十九年九月十八日 石狩案内 石狩新聞社
- 2 石狩町要覧 石狩町役場 大正十一年七月

資料編 1 歴代役員と会員名簿

【歴代役員】

年 度	顧問	会 長	副 会 長	理 事		監 事	事 務 局	会 計
昭和35年	鈴木与三郎 鈴木 信三 佐藤 茂 尾崎 鹿雄	花田 知也 (石狩)	若林 清作 (石狩)	田中 實 (石狩) 鯉目幸次郎 (石狩) 石黒善次郎 (石狩)	青木 隆 (石狩) 高木 憲了 (南線)	石黒幸三郎 (石狩) 石村 次郎 (石狩東)		藤井 隆 (石狩)
昭和36年		花田 知也	若林 清作	田中 實 鯉目幸次郎 石黒善次郎	青木 隆 高木 憲了	石黒幸三郎 石村 次郎	教育委員会	藤井 隆
昭和37年		花田 知也	若林 清作	田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		教育委員会	藤井 隆
昭和38年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		教育委員会	教育委員会
昭和39年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		教育委教育	教育委員会
昭和40年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		教育委教育	教育委員会
昭和41年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		教育委教育	教育委員会
昭和42年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和43年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和44年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和45年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛 前川 沖本	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和46年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛 前川 沖本	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和47年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛 前川 沖本	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		石川 厚信	教育委員会
昭和48年		花田 知也		田中 實 鯉目幸次郎 道寛 前川 沖本	青木 隆 高木 憲了 長谷川 嗣		高田 満	教育委員会
昭和49年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	六川 正輝 管野 義男 沖本 義久	福田 佐市 鯉目幸次郎	小西 茂 長谷川 嗣	高田 満 (局員) 阿部 春雄	
昭和50年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	六川 正輝 管野 義男 沖本 義久	福田 佐市 鯉目幸次郎	小西 茂 長谷川 嗣	高田 満 (局員) 阿部 春雄	
昭和51年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	六川 正輝 管野 義男 沖本 義久	福田 佐市 鯉目幸次郎	小西 茂 長谷川 嗣	高田 満	

年 度	顧 問	会 長	副 会 長	理 事	監 事	事 務 局	会 計
昭和52年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久	菅野 義男 鱈目幸次郎	小西 茂嗣 長谷川 茂嗣	高田 満
昭和53年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久		小西 茂嗣 長谷川 茂嗣	高田 満
昭和54年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久		小西 茂嗣 長谷川 茂嗣	高田 満
昭和55年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久		小西 茂嗣 長谷川 茂嗣	石橋 孝夫
昭和56年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久		長谷川 茂嗣	石橋 孝夫
昭和57年		花田 知也	前川 道寛 高木 憲了	福田 佐市 沖本 義久		長谷川 茂嗣	石橋 孝夫
昭和58年		山口 福司	福田 佐市 駒井 秀子	前川 道寛 吉本 愛子	長谷川 茂嗣	金子 伸久 鈴木トミエ	石橋 孝夫
昭和59年		山口 福司	福田 佐市 駒井 秀子	前川 道寛 吉本 愛子	長谷川 茂嗣	金子 伸久 鈴木トミエ	石橋 孝夫
昭和60年	花田 知也 長谷川 茂嗣	山口 福司	福田 佐市 吉本 愛子	前川 道寛 沖本 義久	高木 憲了	金子 伸久 鈴木トミエ	(庶務会計) (代行) 村井喜久司 石橋 孝夫
昭和62年	花田 知也 長谷川 茂嗣	山口 福司	福田 佐市 吉本 愛子	前川 道寛 沖本 青木	高木 憲了 田中 實	金子 伸久 鈴木トミエ	(庶務会計) (代行) 村井喜久司 石橋 孝夫
昭和62年	花田 知也 長谷川 茂嗣	山口 福司	福田 佐市 吉本 愛子	前川 道寛 沖本 青木	高木 憲了 田中 實	金子 伸久 鈴木トミエ	(代行) 石橋 孝夫
昭和63年	花田 知也	山口 福司	高木 憲了 吉本 愛子	前川 道寛 田中 駒井	沖本 義久 青木 隆	金子 伸久 鈴木トミエ	(庶務) 池田 孝夫 石橋 孝夫
平成元年	花田 知也	山口 福司	高木 憲了 吉本 愛子	前川 道寛 田中 駒井	沖本 義久 青木 隆	金子 伸久 鈴木トミエ	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成2年	花田 知也	山口 福司	高木 憲了 吉本 愛子	前川 道寛 田中 駒井	沖本 義久 青木 村山	金子 伸久 阿部 哲雄	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成3年	花田 知也 横山 敏美	山口 福司	高木 憲了 吉本 愛子	前川 道寛 田中 駒井 畑宮清一郎	沖本 義久 青木 村山	金子 伸久 阿部 哲雄	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成4年	花田 知也 横山 敏美	田中 實	高木 憲了 吉本 愛子	前川 道寛 青木 村山	沖本 義久 駒井 清一郎	金子 伸久 阿部 哲雄	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成5年	花田 知也 横山 敏美 前川 道寛	田中 實	高木 憲了 吉本 愛子	沖本 義久 駒井 清一郎	青木 隆 村山 耀一 長谷川 心平	金子 伸久 中村 秋雄	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成6年	横山 敏美 前川 道寛 山口 福司	田中 實	高木 憲了 吉本 愛子	沖本 義久 駒井 清一郎	青木 隆 村山 耀一 金子 伸久	中村 秋雄 池田 孝夫	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成7年	横山 敏美 前川 道寛 山口 福司 金子 伸久	田中 實	高木 憲了 吉本 愛子	沖本 義久 駒井 清一郎	青木 隆 村山 耀一 高瀬 たみ	中島 勝久 仲野 孝	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成8年	横山 敏美 前川 道寛 山口 福司 金子 伸久 田中 實	高木 憲了	吉本 愛子	沖本 義久 駒井 高瀬 鈴木トミエ	青木 隆 長谷川 心平 船場 庄一	中島 勝久 仲野 孝	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成9年	横山 敏美 山口 福司 金子 伸久 田中 實	高木 憲了	吉本 愛子 高瀬 たみ	沖本 義久 駒井 船場	青木 隆 長谷川 心平 鈴木トミエ	中島 勝久 仲野 孝	石橋 孝夫 池田 孝夫

年 度	顧 問	会 長	副 会 長	理 事	監 事	事 務 局	会 計
平成10年	横山 敏美 山口 福司 金子 仲久 田中 實	高木 憲了	高瀬 たみ 仲野 孝	青木 隆 船場 庄一 吉田 隆義	駒井 秀子 鈴木 トミエ 小川 茂	中島 勝久 安井 澄子	石橋 孝夫 池田 孝夫
平成11年	横山 敏美 山口 福司 金子 仲久 田中 實	高木 憲了	高瀬 たみ 仲野 孝	青木 隆 船場 庄一 吉田 隆義	駒井 秀子 鈴木 トミエ 小川 茂	中島 勝久 安井 澄子	石橋 孝夫 三島 照子 星川富美子
平成12年	横山 敏美 山口 福司 田中 實	高木 憲了	高瀬 たみ 仲野 村山 村山 耀一	駒井 秀子 鈴木 トミエ 小川 茂	船場 庄一 吉田 隆義 三島 照子	中島 勝久 安井 澄子	石橋 孝夫 星川富美子 川島 勇一
平成13年	横山 敏美 山口 福司 田中 實	高木 憲了	高瀬 たみ 仲野 村山 村山 耀一	駒井 秀子 鈴木 トミエ 小川 茂 吉岡 玉吉	船場 庄一 吉田 隆義 三島 照子	中島 勝久 安井 澄子	石橋 孝夫 星川富美子 川島 勇一
平成14年	山口 福司 田中 實	高木 憲了	仲野 孝 村山 耀一 安井 澄子	船場 庄一 吉田 隆義 吉岡 玉吉 榎本 新一	鈴木 トミエ 三島 照子 吉永 繁起	中島 勝久 高瀬 たみ	石橋 孝夫 星川富美子 川島 勇一
平成15年	山口 福司 田中 實 高木 憲了	村山 耀一	仲野 孝 安井 澄子	船場 庄一 吉田 隆義 吉岡 玉吉 榎本 新一	鈴木 トミエ 三島 照子 吉永 繁起	中島 勝久 高瀬 たみ	石橋 孝夫 星川富美子 川島 勇一

- (注) 1. 郷土研究会発足当初は8支部制(石狩・志美・花川・南線・樽川・石狩東・生振・高岡)をとっていたようだが、その後の記録がないため、8支部制がいつまで存在したかは確かでない。
2. 昭和35年度の役員名の後にある括弧内の地名は支部名を示している。

【会員名簿】

年 度	会 員 名														
昭和35年	(石狩支部) 藤井 隆一 松本 武一 堀江 隆一 金田 隆一 (志美支部) (花川支部) (南線支部) (樽川支部) (石狩東支部) 山崎ミサオ (生振支部) (高岡支部)	花田 知也 川野 栄一 加藤 義見 安田 元子 堀江政次郎 小西 茂好 山内 憲了 高木 憲了 佐々木清助 石村次郎 山崎ミサオ 出塚 勉 田尾 邦治 田本 義久	若林 清作 吉田 資也 戎谷 義勝 桂川 高俊 有田 実夫 西岡 俊夫 二枚田幹子 高田 二誠 佐々木 誠 菅地 敏弘 横山 敏美 越田 正晴	田中 實 奥山 勲 勝又 庸 高澤 庸 桃井 運治 中村 行雄 土井 清信 福田 佐市 岡崎伊 造 石田 周玄 長谷川 嗣 伊藤 祐啓	青木 隆 石橋 明雄 中井 常吉 平井 新次 葛西 清 山岸 喜助 内海 竹千代 遠藤 茂 林 実次郎 土橋 健吉 中島 公平 山田 千代雄	鎌山 幸次郎 篠山 孝義 栗谷 武郎 加賀 鉄郎 森本 忠 村岡 幸正 小沼 吉三郎 加藤 正男 佐原 洋一 平井 良子	石黒善次郎 川端 眞一 塚谷 昌藏 石川 厚信 国井未太郎 金子 円司 山石 俊一 神 良一	石黒幸三郎 吉岡 誠 川口 弘子 飯尾 円仁 長野 徳治 長野 忠吉							
昭和36年	会員名簿不明														
昭和37年	(石狩支部) 篠山 孝義	花田 知也 葛西 清 飯尾 円仁	石川 厚信 塚谷 昌藏 藤井 隆 川口 弘子 田中 實												
昭和38年 昭和48年	会員名簿不明														
昭和49年	花田 知也 小西 茂 川端 眞一 青木 隆 有田 実 萩原 茂樹	前川 道寛 長谷川 嗣 石黒善次郎 堀江政次郎 横山 敏美	高木 憲了 阿部 春雄 吉岡 高誠 田中 高俊 金子 仲久 中島 公平	六川 正輝 高田 満 戎谷 義勝 鎌田 正重 吉田 重男	福田 佐市 吉田 資也 勝又 繁 加賀 鉄郎 工藤 興文	管野 義男 奥山 常吉 中島 円仁 飯尾 石田 周玄	鎌山 幸次郎 篠山 孝義 栗谷 武郎 石川 厚信 石山 俊一	沖本 義久 藤井 隆 塚谷 金田 出塚 勉							
昭和50年	花田 知也 小西 茂 出塚 勉	前川 道寛 長谷川 嗣 石山 俊一	高木 憲了 阿部 春雄 中島 公平	六川 正輝 高田 満 横山 敏美	福田 佐市 金子 仲久 関戸 肇	管野 義男 田中 吉田 吉田 重男	鎌山 幸次郎 藤 興文 篠内 始	沖本 義久 鎌田 正							
昭和51年	花田 知也 小西 茂	前川 道寛 長谷川 嗣	高木 憲了 高田 満	六川 正輝 福田 佐市	管野 義男 福田 佐市	鎌山 幸次郎 沖本 義久	沖本 義久 小西 茂								
昭和52年	花田 知也 長谷川 嗣	前川 道寛 高田 満	高木 憲了 福田 佐市	管野 義男 福田 佐市	鎌山 幸次郎 沖本 義久	沖本 義久 小西 茂	小西 茂								
昭和53年	花田 知也 田中 實	前川 道寛 高木 憲了	高木 憲了 福田 佐市	管野 義男 沖本 義久	小西 茂 長谷川 嗣	高田 満									
昭和54年	花田 知也 金子 吉本 仲久 愛子	前川 道寛 田中 実 鈴木トミエ	高木 憲了 阿部 哲雄 岡崎源次郎	福田 佐市 吉田 飯尾 円仁	沖本 義久 駒井 山崎 山崎 秀子 カズ	小西 茂 藤井 吉野 道彦 惣栄	長谷川 嗣 山口 福司 石橋 孝夫 根本 弘美								
昭和55年	花田 知也 金子 吉本 仲久 愛子	前川 道寛 田中 実 鈴木トミエ	高木 憲了 阿部 哲雄 岡崎源次郎	福田 佐市 吉田 飯尾 円仁	沖本 義久 駒井 山崎 山崎 秀子 カズ	小西 茂 藤井 吉野 道彦 惣栄	長谷川 嗣 山口 福司 石橋 孝夫 根本 弘美								
昭和56年	花田 知也 金子 吉本 仲久 愛子	前川 道寛 田中 実 鈴木トミエ	高木 憲了 阿部 哲雄 岡崎源次郎	福田 佐市 吉田 飯尾 円仁	沖本 義久 駒井 山崎 山崎 秀子 カズ	小西 茂 藤井 吉野 道彦 惣栄	長谷川 嗣 山口 福司 石橋 孝夫 根本 弘美								
昭和57年	花田 知也 金子 吉本 仲久 愛子	前川 道寛 田中 実 鈴木トミエ	高木 憲了 阿部 哲雄 岡崎源次郎	福田 佐市 吉田 飯尾 円仁	沖本 義久 駒井 山崎 山崎 秀子 カズ	小西 茂 藤井 吉野 道彦 惣栄	長谷川 嗣 山口 福司 石橋 孝夫 根本 弘美								
昭和58年	花田 知也 田中 吉野 實 惣栄	前川 道寛 阿部 哲雄 青木 隆	高木 憲了 吉田 重男 大島 龍	福田 佐市 駒井 黒田 黒田 晶子	沖本 義久 山口 福司 畑宮清一郎	長谷川 嗣 吉本 愛子 石橋 孝夫 鈴木トミエ	金子 仲久 岡崎源次郎								
昭和59年	花田 知也 田中 吉野 實 惣栄	前川 道寛 阿部 哲雄 青木 隆	高木 憲了 吉田 重男 大島 龍	福田 佐市 駒井 黒田 黒田 晶子	沖本 義久 山口 福司 畑宮清一郎	長谷川 嗣 吉本 愛子 石橋 孝夫 鈴木トミエ	金子 仲久 岡崎源次郎								
昭和60年	花田 知也 田中 吉野 實 惣栄	前川 道寛 阿部 哲雄 青木 隆	高木 憲了 吉田 重男 大島 龍	福田 佐市 駒井 黒田 黒田 晶子	沖本 義久 山口 福司 畑宮清一郎	長谷川 嗣 吉本 愛子 石橋 孝夫 鈴木トミエ	金子 仲久 岡崎源次郎								
昭和61年	花田 知也 田中 吉野 實 惣栄	前川 道寛 阿部 哲雄 青木 隆	高木 憲了 吉田 重男 大島 龍	福田 佐市 駒井 黒田 黒田 晶子	沖本 義久 山口 福司 畑宮清一郎	長谷川 嗣 吉本 愛子 石橋 孝夫 鈴木トミエ	金子 仲久 岡崎源次郎								

年 度	会 員 名																		
昭和62年	花田知也 阿部哲雄 青木隆一 村山耀一	前川吉田 重男龍 大久保	道寛重男 秀子龍 妙子	高木駒井 山口黒田	憲了秀子 福司晶子	福田福司 山口畑清	佐市清一郎	沖本吉本 高瀬	義久愛子 たみ	石橋本高瀬 鈴木川村	孝夫ミエ 正三	金子岡崎 源池田	仲久源次郎 孝夫	金子岡崎 源池田	田中吉野 横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美
昭和63年	花田知也 吉田重男 大島龍心 長谷川平	前川駒井 秀子龍 小松平	道寛秀子 晶子サワ	高木山口 畑宮清	憲了福司 清一郎	沖本吉本 高瀬	義久愛子 たみ	石橋本高瀬 鈴木川村	孝夫ミエ 正三	金子岡崎 源池田	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美
平成元年	花田知也 吉田重男 大島龍心 長谷川平	前川駒井 秀子龍 小松平	道寛秀子 晶子サワ	高木山口 畑宮清	憲了福司 清一郎	沖本吉本 高瀬	義久愛子 たみ	石橋本高瀬 鈴木川村	孝夫ミエ 正三	金子岡崎 源池田	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美
平成2年	花田知也 吉田重男 大島龍心 長谷川平	前川駒井 秀子龍 小松平	道寛秀子 晶子サワ	高木山口 畑宮清	憲了福司 清一郎	沖本吉本 高瀬	義久愛子 たみ	石橋本高瀬 鈴木川村	孝夫ミエ 正三	金子岡崎 源池田	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美
平成3年	花田知也 吉田重男 黒田晶子 小松平	前川駒井 畑宮清 小松平	道寛秀子 清一郎	高木山口 高瀬	憲了福司 たみ	沖本吉本 川村	義久愛子 正三	石橋本高瀬 鈴木池田	孝夫ミエ 孝夫	金子岡崎 源池田	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美	阿部吉野 村山	中野横山	實榮孝夫 敏美
平成4年	花田知也 吉田重男 黒田晶子 小松平 石川秀子	前川駒井 畑宮清 小川	道寛秀子 清一郎 茂	高木山口 高瀬	憲了福司 たみ 順治	沖本吉本 川村 船場	義久愛子 正三 庄一	石橋本高瀬 鈴木池田 中島	孝夫ミエ 孝夫 勝久	金子岡崎 源池田 中村	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 石黒	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄
平成5年	花田知也 吉田重男 黒田晶子 小川仲野	前川駒井 畑宮清 濱岡吉田	道寛秀子 清一郎 順治義	高木山口 高瀬	憲了福司 たみ 文子	沖本吉本 池田中島	義久愛子 孝夫勝久	石橋本高瀬 鈴木横山中村	孝夫ミエ 敏美 秋雄	金子岡崎 源池田 石黒	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 石黒	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄
平成6年	前川駒井 横山中村	道寛秀子 敏秋 秋雄	高木山口 村山石黒 三島	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	
平成7年	前川駒井 横山中村 君	道寛秀子 敏秋 秋雄	高木山口 村山石黒 三島	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	
平成8年	前川駒井 横山中村 君	道寛秀子 敏秋 秋雄	高木山口 村山石黒 三島	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	
平成9年	高木山口 村山石黒 三島	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄
平成10年	高木山口 村山石黒 三島 榎本新一	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄
平成11年	高木山口 村山石黒 三島 榎本新一	憲了福司 龍一 嗣康	沖本吉本 長谷川 田中豊	義久愛子 川心平 恵子	石橋本高瀬 鈴木小松 平サワ 石川	孝夫ミエ ワ子 秀子	金子岡崎 源池田 仲野	仲久源次郎 孝夫	田中吉野 横山 吉田	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄	阿部吉野 村山 石黒	中野横山	實榮孝夫 敏美 秋雄

年 度	会 員 名															
平成12年	高木吉本 小松平 石川今井 大竹	憲了 愛子 秀子 光男 京代	沖本 鈴木 仲野 金田	義久 トミ 茂孝 隆一	石橋 吉野 濱岡 吉安井	孝夫 惣栄 順治 隆義 澄子	田中 青木 船場 原沢 釣本	實隆 庄一 文子 峰雄	阿部 高瀬 中島 吉永 吉岡	哲雄 たみ 勝久 繁起 玉吉	吉田 横山 中村 君川島	重男 敏秋 雄彦 尹勇	駒井 山石 黒三 島榎本	秀子 一嗣 康照 子新一	山口 長谷 川中 田星 川富 朝美 田子 垂沙	福司 心平 恵子 富美 子沙
平成13年	高木吉本 小松平 石川今井 大竹	憲了 愛子 サワ 秀子 光男 京代	沖本 鈴木 小川 仲野 金田 小寺	義久 トミ 茂孝 隆一 幸一	石橋 吉野 濱岡 吉安井 岩宮	孝夫 惣栄 順治 隆義 澄子	田中 青木 船場 原沢 釣本	實隆 庄一 文子 峰雄	阿部 高瀬 中島 吉永 吉岡	哲雄 たみ 勝久 繁起 玉吉	吉田 横山 中村 君川島	重男 敏秋 雄彦 尹勇	駒井 山石 黒三 島榎本	秀子 一嗣 康照 子新一	山口 長谷 川中 田星 川富 朝美 田子 垂沙	福司 心平 恵子 富美 子沙
平成14年	高木吉本 小松平 石川今井 小寺	憲了 愛子 サワ 秀子 光男 幸一	沖本 鈴木 小川 仲野 安井 伊藤	義久 トミ 茂孝 隆一 圭怡	石橋 吉野 濱岡 吉安井 釣本	孝夫 惣栄 順治 隆義 峰雄	田中 青木 船場 原沢 吉岡	實隆 庄一 文子 玉吉	阿部 高瀬 中島 吉永 川島	哲雄 たみ 勝久 繁起 勇一	吉田 山横 中村 君榎本	重男 敏秋 雄彦 尹新一	駒井 山石 黒三 島朝田	秀子 一嗣 康照 子新一	山口 長谷 川中 田星 川富 大竹 京代	福司 心平 恵子 富美 子沙
平成15年	高木吉野 田中 星川富美子	憲了 惣栄 恵子 富美子	沖本 青木 石川 今井	義久 隆秀 子光男	石橋 高瀬 仲野 安井	孝夫 たみ 孝澄子	田中 村山 吉田 釣本	實隆 一義 降義 峰雄	駒井 船場 原沢 吉岡	秀子 庄一 文子 玉吉	山口 中島 吉永 川島	福司 勝久 繁起 勇一	吉本 中村 君榎本	愛子 秋雄 彦新一	鈴木 石黒 三島 小寺	トミ 一嗣 康照 子新一

- (注) 1. 郷土研究会発足当初は8支部制(石狩・志美・花川・南線・樽川・石狩東・生振・高岡)をとっていたようだが、その後の記録がないため、8支部制がいつまで存在したかは確かでない。
2. 昭和35年度～昭和48年度の分の記録資料がないため空欄で示す。
3. 昭和38年の会員名は石狩支部のみ集会出席者の記録が残っていた。
4. 会員名は、田中實資料に拠った。



## 資料編 2 石狩市郷土研究会会則

### 石狩市郷土研究会会則

#### (名称)

第一条 この会は「石狩市郷土研究会」と称し事務所を会長宅に置きます

#### (目的)

第二条 この会は郷土の自然、歴史、文化等の調査や研究を通じ市民としての郷土愛を高め市発展に寄与することを目的とします

#### (事業)

第三条 この会の目的を達成するために次の事業を行います

1. 自然、歴史、文化等の調査研究
2. 会紙、連絡紙ならびに調査に基づく資料等の発行
3. 研究会、展示会の開催
4. 関係機関との連絡調整
5. その他この会の目的達成に必要な事業

#### (会員の構成)

第四条 この会は会の目的に賛同する石狩市内居住者等によって組織します

#### (役員)

第五条 一、この会に次の役員を置きます

1. 会長一名、副会長三名、理事若干名、監事二名、庶務一名、会計二名
2. 副会長は会長を補佐し会務を総括します
3. 理事は会長、副会長を補佐し具体的な事業の立案及び指導運営にあたります

4. 監事は会計を監査します

5. 庶務は会の事務処理にあたります

6. 会計は会の経理を処理します

二、役員は二年とし再選を防止しません。補欠により就任した場合は前任者の残任期間とします

(会議)

第六条 この会の会議は次の通りとします

一、総会、定期総会は毎年四月、臨時総会は必要に応じ会長が招集し、規約の改正、役員選任、事業計画及び結果、収支予算及び決算の審議をして議決は出席者の過半数によって決定します

二、役員会等は必要に応じて開催します

(顧問)

第七条 この会に顧問を置くことができます。役員会の推薦により会長が委嘱します

(会計)

第八条 一、この会の会計は、会員一人年額三千五百円の会費およびその他をもって充てます

二、この会の会計年度は、四月一日に始まり翌年三月三十一日をもって終わります

#### 附 則

1. この規約は昭和三十五年三月三十日より施行します

2. その他、この会に必要な事項は別に定めることができます

改正

(昭和五十年五月二十七日一部改正)

(平成五年四月二十五日一部改正)

(昭和六十年六月二十四日一部改正)

(平成七年四月二十四日一部改正)

(昭和六十一年四月二十六日一部改正)

(平成十二年四月二十日一部改正)

(平成四年八月三十一日一部改正)

(平成十四年四月十八日一部改正)

資料編 3 予算の移り変わり

年 度		昭和35年度		年 度		昭和50年度	
収 入	項 目	予算額		収 入	項 目	予算額	
	会員会費	7,500	会員75人分		会員会費	21,000	1000円×21人
町補助金	40,000		町補助金	50,000			
繰越金	0		繰越金	86,502			
寄付金	500		その他	2,000			
収入合計		48,000		収入合計		159,502	
支 出	事業費	13,000	1000円×8支部	会議費	4,000	郷土館建設調査費他	
	通信費	2,000		事務費	0		
消耗品	5,000	研究調査費	50,000	消耗品	10,000	古文書講座派遣他	
印刷費	150,000	印刷費	51,000	研修派遣費	20,000	開拓記念物目録印刷	
支部助成金	8,000	予備費	5,000	報償費	20,000	開拓記念物整理講師謝金	
予備費	5,000	繰越金	0	予備費	4,502		
支出合計		48,000		支出合計		159,502	

年 度		昭和55年度		年 度		昭和60年度	
収 入	項 目	決算額		収 入	項 目	決算額	
	会員会費	27,000	53・54年末納含む		会員会費	52,000	2000円 含過年度
文化協会補助金	50,000		文化協会補助金	45,000			
繰越金	233,123		会誌販売代金	27,500	55部×500		
その他	4,648		繰越金	83,544	石狩俳壇誌手数料他		
雑収入			雑収入	32,726			
収入合計		314,771		収入合計		240,770	
支 出	会議費	1,210	いしかり曆作成消耗品 いしかり曆1号・2号 文化協会負担金 香典	印刷費	0	文化協会負担金 いしかり曆5号 会館使用料 他	
	研究調査費	0		消耗品	12,175		
消耗品	3,280	印刷費	220,000	負担金	2,000		
印刷費	220,000	予備費	4,000	雑支出	44,920		
予備費	4,000	繰越金	85,281	予備費	0		
繰越金	85,281		繰越金	181,675			
支出合計		314,771		支出合計		240,770	

年 度		平成 4年度	
収 入	項 目	決算額	
	会員会費	98,000	2000円 含過年度
	町補助金	150,000	
	会誌販売金	20,109	いしかり曆 シリーズ
	繰越金	151,665	
	基金	300,000	シリーズ4
雑収入	2,146		
収入合計		721,920	
支 出	会議費	16,646	総会会議費他
	事務費	33,851	切手 葉書 旅費
	調査研究費	60,000	20000円×3G
	研修費	73,510	研修バス代金他
	消耗品費	4,036	
	展示費	24,514	文化祭写真パネル
	負担金	9,000	文化協会 保護協会
	基金	300,000	シリーズ4刊行基金
	予備費	0	
	繰越金	200,363	
支出合計		721,920	

年 度		平成 7年度	会員31名
収 入	項 目	予算額	
	会員会費	99,000	3000円 含過年度
	町補助金	150,000	
	繰越金	20,839	
	基金	100,000	
雑収入	11,162		
収入合計		381,001	
支 出	会議費	9,437	
	事務費	13,165	事務消耗品 切手
	研究調査費	8,360	
	消耗品	28,468	写真焼付
	研修費	74,650	旭川 バス タクシー
	印刷費	0	
	負担金	11,560	道文保護協会 文化協
	予備費	32,880	
	繰越金	202,481	
支出合計		381,001	

年 度		平成10年度	
収 入	項 目	決算額	
	会員会費	117,000	3000円 含過年度
	市補助金	150,000	
	繰越金	77,593	
	雑収入	65,892	研修参加費 新年会費
収入合計		410,485	
支 出	会議費	6,043	総会費用等
	事務費	19,102	消耗品
	印刷費	130,000	いしかり曆12号
	調査研究費	15,000	研究調査 講師お礼
	研修費	112,940	余市町研修
	負担金	12,070	保護協 文化協 道史
	予備費	101,634	研修負担金 新年会
繰越金	13,696		
支出合計		410,485	

年 度		平成14年度	
収 入	項 目	決算額	
	会員会費	158,000	3500円 含過年度
	市補助金	150,000	
	繰越金	111,619	
	道補助金	700,000	地域振興補助
	市教委補助	200,000	芸術文化振興補助
雑収入	5,003	曆売上 利息等	
収入合計		1,124,622	
支 出	会議費	7,532	総会 例会茶等
	事務費	15,607	事務消耗品など
	印刷費	122,400	いしかり曆16号
	調査研究費	1,050,600	女性史年表刊行
	負担金	14,570	各種団体負担金
	予備費	17,025	研修視察補助他
繰越金	91,888		
支出合計		1,124,622	

## 資料編 4 新聞・広報紙などで紹介された

### 研究会

郷土研究会の活動は、当時の新聞や広報紙に数々紹介された。ここに紹介するものはその一部である。

北海道タイムス 昭和34年9月23日付

日の目みる石狩町の遺跡―高岡地区で発掘された円筒式土器を調査するため、北大の大場博士が石狩を訪れた。

北海道タイムス 昭和34年11月4日付

考古展に郷土忍ぶ―石狩町文化祭に土器などを展示。発掘参加メンバーはその後、郷土研究会を設立した。

石狩町広報 昭和35年2月1日号

石狩町郷土研究会をつくります―郷土研究会設立を広報を通じて石狩町民に呼びかけた。

北海道新聞 昭和35年4月10日付

「古老談話集」など編集―今後の活動が紹介された。

北海道新聞 昭和35年4月15日付

石狩研究会支部役員決まる―新役員が紹介された。

北海道新聞 昭和36年10月24日付

石狩河口の遺跡調べる―高木憲了会員が河口周辺で採集した土器を調査していることが紹介された。

北海道新聞 昭和48年6月22日付

井上伝蔵ナゾの足取りわかる―井上伝蔵の石狩開拓地

貸し付け新資料を長谷川嗣会員が発見した。

朝日新聞 昭和59年12月12日付

村山家の資料子孫が開拓記念館に寄贈―村山家の(十代目は村山耀一会員)資料千三百三十点を寄贈した。

北海道タイムス 昭和60年12月24日付

石狩の俳句掘り起こす―前川道寛会員が刊行した『石狩俳壇誌』が紹介された。

北海道タイムス 平成8年5月22日付

「石狩百話」執筆終える―吉本愛子・高瀬たみ・鈴木トミエ会員が調査・執筆した『石狩百話』が紹介された。

朝日新聞 平成8年6月12日付

懐かしい郷里の町並み―歴史写真展が紹介された。

北海道新聞 平成8年6月19日付

明治期の本町地図で再現―研究会が取り組んできた「石狩本町地区市街図」が紹介された。

北海道新聞 平成8年7月5日付

耳で感じて町の歴史―三島照子・星川富美子会員が「ふるさといしかり」を朗読しテープを町社協へ寄贈。

朝日新聞 平成9年6月11日付

榎本武揚の書簡入手―高木憲了会員が入手、田中實会員が解読した書簡が紹介された。

広報いしかり 平成14年8月1日号

シリーズ温故知新(最終回)―郷土研究会発足時から現在の活動までが紹介された。(文責 鈴木トミエ)

# 珍しい円筒式土器も 七千数百年 ほとんど層をなす 間の 遺物

## 日の目みる石狩町の遺跡 北大の大場博士らが初の調査



石狩町内の日本橋町一帯は、北の樺太海峡に面した村、手稲町を隔てた時代の跡を遺り、またこの中、大正三年度、民間家宅を建てた際に、この跡を掘り出し、土器の遺跡を発見した。この遺跡は、大正三年度、民間家宅を建てた際に、この跡を掘り出し、土器の遺跡を発見した。この遺跡は、大正三年度、民間家宅を建てた際に、この跡を掘り出し、土器の遺跡を発見した。

北海タイムス 昭和34年9月23日付

「遺跡の調査は、石狩町内の日本橋町一帯に、北の樺太海峡に面した村、手稲町を隔てた時代の跡を遺り、またこの中、大正三年度、民間家宅を建てた際に、この跡を掘り出し、土器の遺跡を発見した。この遺跡は、大正三年度、民間家宅を建てた際に、この跡を掘り出し、土器の遺跡を発見した。」

### 石狩研究会文「(終) 部役員さま」

石狩研究会文「(終) 部役員さま」  
部役員さま、ご苦労様です。石狩研究会の活動は、皆様のおかげで、ますます盛んになってまいりました。この一年間、皆様のご協力のおかげで、多くの調査や研究がすすんでまいりました。今後とも、皆様のご協力をお願いいたします。

北海道新聞 昭和35年4月15日付

### 古老談話集、な

石狩町郷土研究会生

住みながら、郷土の歴史を知る。古老談話集、な。石狩町郷土研究会生。この本は、石狩町の歴史を知るための貴重な資料です。郷土の歴史を知る。古老談話集、な。石狩町郷土研究会生。この本は、石狩町の歴史を知るための貴重な資料です。郷土の歴史を知る。古老談話集、な。石狩町郷土研究会生。この本は、石狩町の歴史を知るための貴重な資料です。

北海道新聞 昭和35年4月10日付

### 考古展に郷土忍ぶ

よい子の音楽交換会も



北海タイムス 昭和34年11月4日付

考古展に郷土忍ぶ。よい子の音楽交換会も。この展覧会は、郷土の歴史と文化を紹介する貴重な機会です。また、よい子の音楽交換会も、子どもたちの交流を促進する素晴らしいイベントです。

江戸期回船問屋の栄華の跡

子孫が開拓記念館に参



一部を見ながらの参観—12日午前10時30分、道庁で  
 開館式が行われ、約200人が参加した。この日は、  
 江戸期回船問屋の栄華の跡を、子孫が開拓記念館に参  
 観した。この日は、江戸期回船問屋の栄華の跡を、子孫が  
 開拓記念館に参観した。この日は、江戸期回船問屋の栄華の跡を、子孫が  
 開拓記念館に参観した。この日は、江戸期回船問屋の栄華の跡を、子孫が



おいて巡視

王が誓いの判

長谷川さんが新資料発見  
 長谷川さんが新資料発見  
 長谷川さんが新資料発見  
 長谷川さんが新資料発見

北海道新聞 昭和48年6月22日付

石狩河口の遺跡調べる

了惠寺の高木憲了さん



※ひたひたしい資料を前に訪さん考古学者の高木さん

石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊  
 石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊

北海道新聞 昭和36年10月24日付

石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊  
 石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊

石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊  
 石狩の俳句掘り起こす  
 前川さん「俳壇誌」発刊

花川の歴史研究グループ

清仏戦争中・友・福島大尉にあて...  
榎本武揚の書簡入手

11日付 市内の歴史研究家...  
榎本武揚の書簡が、市内の歴史研究家...  
榎本武揚の書簡が、市内の歴史研究家...  
榎本武揚の書簡が、市内の歴史研究家...



戦況に2カ月 解説



明治期の本町地図で再現

「ふるさと いしかり」2カ月かけ完成  
町社協に寄贈  
町社協に寄贈

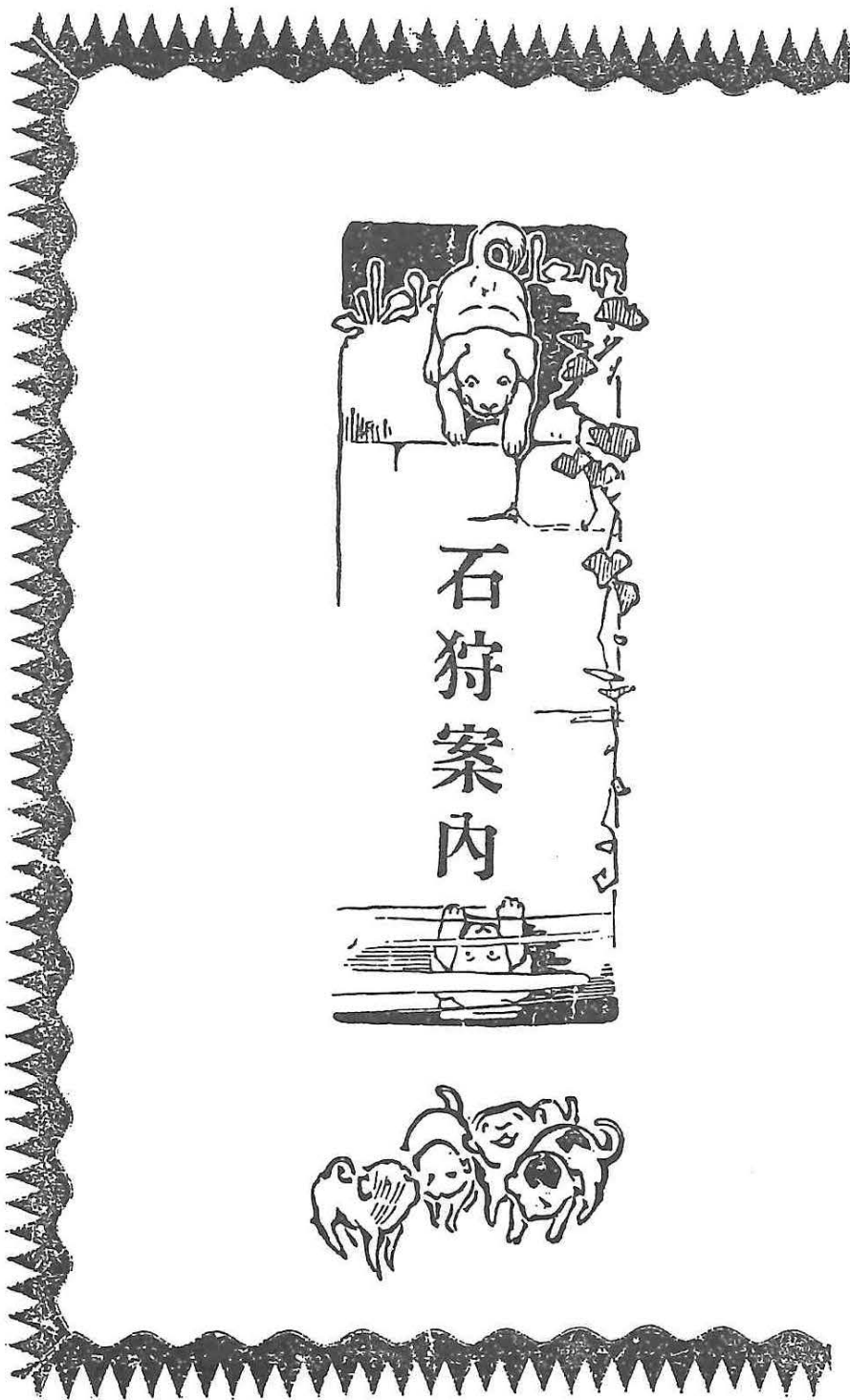
懐かしい郷里の街並  
朝日新聞 平成8年6月12日付

北海道新聞 平成8年7月5日付

平成8年6月19日付  
「ふるさと いしかり」2カ月かけ完成  
町社協に寄贈









付1 明治三十九年九月十八日 石狩案内 石  
狩新聞社

石狩案内 全

第一 地 勢

石狩町 石狩國石狩郡の西部に位し、東西五里二十四丁、南北一里二十三丁、周廻十四里三十三丁、面積二万三千三百二十八丁を有する長方形の市街地にして、南は花川村拓殖地に接し、東は生振當別の原野に連り、北は望來厚田と界し、西は日本海を擁して、右に厚田濱益の遠景を望み、左に錢函小樽の山水を眺め、遙に積丹半島と相對す、

石狩川 市街の中央を縦貫し、遠く上川郡石狩岳に其源を發して、蜿蜒屈曲茲に到りて海に注ぐ迄、延長九十餘里、河幅三百乃至四百間、水深四十乃至五十尺、海潮數里に溯ると雖も、水勢潺湲船舶の來往には極めて便利なるのみならず、本道の一大富源たる木材の搬出には直に筏に組みて河口迄流下し、其れより船積と為して輸出する等、要するに自然的航運機關としては、北海第一の天恵物と稱すへき歟

石狩灣 市街地附近一帯を浸せる海灣の總稱にして沿岸は悉く陸地の土質を受けて砂濱の遠淺なれとも海面三千八百尺を出れば泥盤なりと云ふ、潮流加減尠なく平均一尺四五寸を出てず、去れと西風の暴る、に遭へば、激浪砂を嚙で怒り狂ふさま、いと物凄きを觀る

世の中に金持てる人は理窟尠なく、理窟多き人は金尠なし、金持つて理窟なくなるか、理窟覚え て金なくなるかと云ふ問題が起した時、傍から横槍を入れて、金は金を愛する人の處に集まり、理窟は理窟を愛する者の處に集ると判した人生哲學者があつた。

古史詳かならず、寛文中(即時今二百廿年前)能登の漁民松前に渡り、後石狩に移りて土人を使役し、漁業を為し、其敗獲せる物を松前に送りて販賣せるを初めとし、元禄元年徳川光圀其臣崎山某をして快風船に駕し、六月此地に至らしむ、土人争ひ集りて之を觀る男女一千餘人。互貿易し留ること四十餘日にして去る、同七年松前藩家臣山下半左衛門此地に來りて辯天社を勸請せり今の村山家辯天社即是れなりと云ふ、寛永三年幕府石狩場所を設け能登の民村山傳兵衛をして之を請負はしめ土人を役して漁業を爲さしむ文政四年幕府東西蝦夷地を擧げて松前藩に返し、安政二年再び幕府の直支配となる、此間村山の請負は依然として變ることなし、同四年幕府勤番所を設け、調役以下諸士來りて在勤し、此地を以て直捌場所と爲し、村山の請負を免し、出稼人と爲し、運上屋を本陣と改稱し、通行人取扱其他用途を命す、此頃より出稼人漸く多く、山田文右衛門等最も手廣く漁業を營みたりと云へり、明治初年幕府政權を奉還するや、同二年更めて兵部省の支配と爲し、三年正月開拓使に移し、四月開拓使出帳所を置かれたり、先是佐渡奥 等より移住する者漸く多く、今の本町は早く既に市街の体裁を爲し、開拓使廳の貨物運搬官吏の往復等皆道を此地に取りたるを以て、戸口は日を追て蕃殖し、茲に石狩町たるの資格を形成するに至れり

六年七月漁場拂下あり各人民の所有に歸す、八年二月開拓使出張所を廢して民事局派出所を置かる、同年五月火災あり全市鳥有に歸す、九年二月新に市街を區劃して道幅八間の町割を作る、今の街劃は即之に則るもの也

九年四月民事局を廢し、石狩分署と稱す、十年九月米人ユエス、トリート外一名を雇ひて鮭罐詰製造を傳習す、十一年一月分署を廢して札幌本廳の直轄と爲す、同年七月幌内煤炭の運搬は直に採掘地より石狩川を下すに決し、河口開鑿の議起りて測量に着手す、十二年五月開拓使廳御雇和蘭人水利工師ヨハン、ゴダルト、ファンгент來りて石狩に留り主として河口其他の測量に従事す、同年七月石狩外七郡役所の新設あり、石狩河口改良係を置きて着々工事を進捗せしが、工事主任ファンгент病に罹りて同十二月死亡し、工事も亦中止するに至れり、

十七年石狩外七群役所を改めて石狩、厚田、濱 の三郡役所となす、十八年山口縣民廿餘戸八幡字高岡に移住す、廿二年郡役所を廢して札幌郡役所に合す、卅五年四月二級町村制を實施せられ生振村を併せて自治團體と爲す

案するに石狩町は石狩國中最も早く開けたる處にして、其原因は第一鮭の漁場たること第二石狩河口が船舶の碇泊場たりしこと等に由れるものにして既往に於ける人文の程度にては此渺々たる天啓の沃野。潺潺たる自然の宏河が、拓殖交

通の上に如何なる關係を有するかは、未だ會て發見せられざりし也

杜鵑血に啼く聲は有明の月より外に知る人もなき

第三 戸 口

既往數年間市街地は逆比例的に減少の傾ありしが拓殖地は反て繁殖しつ、あり現状を擧ぐれば左表の如し

種別	戸数	人		計
		男	女	
本籍	一,一三〇	二,九八〇	一,六七〇	四,六五〇
寄留	三七七	九五六	九一九	一,八七五

水産 鮭鱒を以て收穫の重なるものとす、現に用ゆる處の漁具は建網六統、曳網九十三統にして、既往三年間に於ける漁獲の統計を擧れば左表の如し

三 十 六 年 度	三 十 七 年 度	三 十 八 年 度
四,三三六 石 十五万千七百六十圓	一,六六二 石 五万八千百七十圓	一〇,七一五 石 三十七万五千〇二十五圓

農産 田畑共に地價作物の騰貴著しきものあるを以て着々開墾の歩を進め其開未開地の比例は左表の如し

地目別	反別	未墾地反別	本年作付反別
田	三九町	一〇、一三七	三九町
畑	一一、九四二	三九〇〇	一一、九四二
備考	未墾地ノ蘭ニハ官有林ヲモ含ミ居レリ		七七〇〇

工業 鹽藏鯨製造、鮭鱒罐詰並薰製々造、石油製造、燐寸軸製造、醤油醸造等を重なるものとし近年漸く發達の兆を現し來れり、會社及工場の現状は左表の如し

會社名	業務	資金	創立年月日	重役氏名	現狀
高橋合資會社	水陸物産製造	五千圓	明治三十六年十月	高橋 義兵衛	
イントル石油會社支店	石油掘削			石川 貞治	平均一日出油高 二〇石

名稱	業務	業主	工場所在地	現狀
富士製軸所	燐寸軸木製造	川口 藤吉	石狩町大字濱町	平均一日製出高五万束代金二千五百圓 (一東八經四寸ノモノ)
罐詰製造所	鮭鱒罐詰製造所	高橋 義兵衛	全町大字船場町	昨年來中止シタルモ本年鮭漁季ヲ待テ 始業の見込ミ
醤油醸造所	醤油醸造	佐藤 友吉	全町大字親船町	一ヶ月販賣高十石 三百圓
醬油醸造及 味噌製造所	醬油醸造 及 味噌製造	林 長五郎 林 長五郎 林 長五郎	全町字仲町 全町字仲町 全町字仲町	醬油一ヶ月販賣高二九石 八百七十圓 味噌一ヶ月販賣高 二百貫此金六百圓

商業 貨物は多く小樽方面より來り地方商人は雜貨荒物肥料雜穀呉服太物薪炭等に據りて彼と對抗し居れり然れとも木材の如きは將來大に發達の見込あるべきか既往三年間に於て石狩河を利用し搬出せるは左表の如し

名稱	年度
角材	三 十 六 年
丸太材	三 十 七 年
薪材	三 十 八 年

野は廣し啼く啼く飛べよほと、ぎす

二、四三〇 石  
二四、二〇円  
一、五三四  
二二、二七円  
二五、三〇〇  
二〇、五〇円

二、九四〇 石  
四一、一六円  
一、九二四  
一七、三三円  
二五、六三〇  
二五、六三円

二、七三六 石  
四〇、八九円  
一、六八三  
一六、八三円  
二三、五六〇  
二五、九二円



米 種 贈 和 洋 酒 雜 貨 類 卸 小 賣  
 各 種 砂 糖 各 種 荒 物 雜 貨 類 卸 小 賣  
 大 阪 ア ル カ リ 株 式 會 社 過 麟 酸 石 狩 一 手 捌  
 農 家 用 藥 工 品 外 色 々  
 海 陸 物 產 委 托 賣 買  
 一 山 商 會  
 本 柳 貞 一

吳 服 太 物 諸 罐 詰  
 荒 物 陶 器  
 小 物 雜 貨  
 和 洋 酒 雜 貨  
 五 石 狩 本 町  
 中 島 商 店

鹽 藏 燻 製  
 鮫 其 燻 他  
 鮫 燻 他  
 石 狩 船 場 町  
 高 橋 儀 兵 衛

(注) 広告ページのためか、原本には「第四」がない。

**金融** 年々七月上旬より活發となり、九月初旬より十月中旬に亘りて最も圓滿となり一月以降は沈靜に歸す、是れ生活の基礎を漁農の上に置きたるが故にして漁業の如きは本道第一と稱す、而ふして鮭の漁期は、九月十五日より十二月廿六日迄とし、之を三期に分つ、鱒は五月一日より六月廿日迄となす、漁夫の給料は食物雇主持にて、鮭一漁期間船頭百五十圓より二百圓迄、漁夫着手前月三圓内外、着手後月一圓五十錢内外なれども漁獲高に對し、海一割七八分、河二割五分の割合を給するを以て、彼等の處得は頗る多額に達する者あり、從て遊廓飲食店雜貨舖等の類に散する金錢夥しく、一面拓殖地より搬出する雜穀其他の農産物も、亦此期に於て賣買せらる、を以て、茲に金融の膨張を來たし其期の通過し了ると共に復た消沈するもの、如し

**金融機關** 銀行其他何等の機關なきは頗る不自由を感じ居るもの、如し

**生活狀態** 著しき富者なく、又甚しき貧者なく、概して新殖地的の狀態に在り、今住民の重なる職業別を擧ぐれば左表の如し

水産業八八、物品販賣業一〇五、製造業二、運送業二二、代辨業三、質屋業三、土木請負一、寫眞業一、旅人宿一五、料理店七、理髮業九、湯屋業四、仲立業一、仲買業一、農業六〇〇、官吏六、公吏一〇、教員一六、官一、僧侶二二、醫士三、産婆三、新聞記者五、大工一七、木挽五、蹄鐵工二、鍛冶六、左官二、漁七一〇、藝妓六、貸座敷四、娼妓三

**地價** 鐵道及築港問題の起りたると同時に他地方より土地買取に入込む者多く、爲めに俄に暴騰して市街地は坪三四圓より十四圓内外に上り、市外原野耕地等に至りても、反百圓以上二百圓に達するものあり

或婦人近隣に住む貧家の子供を憐みて髪を結びやらんとくしけず梳りけるにしらみ虱夥しく居るより一々捕りては火に投しけるにこども曰く「おばさんは焼ひてく喰ふの家のお母さんはなま生で喰ふヨ」

民刑訴訟事務取扱 廣木辯護士出張所

石狩仲町

流行理髮 勝又半四郎

石狩親船町

米農産雜  
貨類賣買

木

烏羽商店

石狩町生振

旅館 幸今泉 桑吉

石狩親船町

旅館

石狩親船町  
金澤又太郎

和洋料理

石狩辨天町  
徳嘉壽美

江別木工場挽割材一手販賣  
材木製卸小賣商

石狩船場町  
上野材木店

學校教育 普通教育の下に高等科に在りては實業教育を附加し經木編物等成績見るべきものあり學校及生徒の現在并に  
不就學者は左の如し

學校名	所在地名	男別		尋一	尋二	尋三	尋四	高一	高二	高三	高四	計	
		女	男										
石狩尋常高等小學校	石狩町大字横町北三十番地	一	九	一	四	三	一	四	一	二	二	一	
若生尋常小學校	石狩町大字若生町番外地	一	八	二	一	一	一	一	一	一	一	一	
高岡尋常小學校	石狩町大字八幡町字高岡	一	六	一	一	三	一	一	一	一	一	一	
生振尋常小學校	石狩町大字生振村七線北六番地	一	九	一	三	九	一	一	一	一	一	一	
參線尋常小學校	石狩町大字生振村三線南六番地	一	七	一	七	一	一	一	一	一	一	一	
美登位尋常小學校	石狩町大字生振村十一線北九番地	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
發泉尋常小學校	石狩町大字生振村第八線四十七番地	一	七	一	三	四	一	一	一	一	一	一	
〇〇〇〇〇〇〇													
來札尋常小學校	石狩町大字八幡町字來札番外	一	四	一	五	一	二	一	一	一	一	一	
合計		一	二	八	七	八	六	一	四	二	七	三	
本表中卷点アルハ官立土人學校ナリ 不就學兒童 男 四十二名 女 四十六名		女	八	九	七	八	六	一	四	一	二	七	三
		男	八	二	一	一	一	一	一	一	一	一	四
		女	三	四	五	六	七	八	一	二	三	四	一
		男	四	八	五	二	〇	五	三	一	一	一	一
		女	八	七	六	七	三	四	一	一	一	一	二
		男	七	四	三	六	六	五	八	一	一	一	一
		女	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
		男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
		女	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
		男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

家庭教育 記すべき者なし

社会教育 石狩學友會、石聲會の二團體あり、前者は渡邊永助氏後者は井尻靜藏氏之を率ひ、前者は石狩學校卒業者乃在學高等生を以て組織し、智德涵養を以て其目的とし、後者は廣く石狩町青年有志者を驅りて組織し、時代思潮の鼓吹を以て其標榜と爲せり

人生 回頭眞一夢 青山綠水睡長閑

第七 宗 教

佛教 日蓮、眞宗、浄土、曹洞、眞言等にして寺院の現状は左表の如し

寺 號	所 在 地 名	許 可 年 月 日	本 尊	檀 徒 數
金龍寺	石狩町大字新町四番地	三十七年八月二十六日	釋迦牟尼佛	百十一戸
能量寺	石狩町大字親船町北二十五、二十六番地	二十七年十一月十日	阿彌陀如來	百六十二戸
法性寺	石狩町大字横町北十番地	十三年九月日不詳	阿彌陀如來	百二十戸
曹源寺	石狩町大字辨天町北二十番地	文久三年四月日不詳	釋迦牟尼佛	百五十戸
信教寺	石狩町大字八幡町	三十四年五月四日	阿彌陀如來	百六十四戸
春光寺	石狩町大字生振村北三線	三十年月日不詳	觀世音菩薩	未詳
光明寺	石狩町大字八幡町字高岡十六番の二	三十五年四月二十四日	阿彌陀如來	百〇五戸

神道 天理教信徒稍や多し他は記すに足るべきものなし神社の現状は左表の如し

社名	資格	祭神	許可年月日	氏子
八幡神社	郷社	應神天皇合殿保食神	明治七年八月不詳日	八百五十戸
花畔神社	無各社	金比羅大神	三十四年九月九日	三百十五戸

右の外左の教會あり

天理教會出張所  
眞宗興正宗派説教所

石狩町大字横町六番地  
花川村大字花畔村字紅葉山

咲く迄は踏まれ勝なりすみれ草

### 第八 官公署

石狩花川組合役場、石狩警察分署、石狩郵便電信局、札幌區裁判所出張所等皆親船町に在り、石狩燈臺は石狩河口に在り

### 第九 公共機關

石狩新聞 親船町に在り石狩厚田濱益三郡有志の共同事業として専ら地方の指導開發に任しつ、あり  
 消防組 河東河西の二部に分れ器具其他稍完備せるものあり  
 渡船場 石狩河を隔て、西は船場町に東は若生町に其事務所を置き交通渡船の事に當れり

石狩築港鐵道速成同盟會 畠山清太郎氏を會長として石狩花川組合有志等之を組織し題號の如く石灣築港并に鐵道の速成を促すが爲め各種の運動に任じ居れり

石狩協議會 山崎龜藏氏を會頭として石狩町有志等之を組織し地方飛躍的發展に伴ふ外交機關に任しつ、在り

人は銅像に鑄せられんよりも文字に書かせられんことを望め銅像は融ることあるも史乘は減することなし

## 第十 築 港

**築港歴史** 石狩築港の實測は明治十二年開拓使雇蘭人フアンゲントに始まり四年より十八年に涉りて同雇米人メークをして之が計劃を建てしめたれども當時は主として河口を開鑿し河面を以て船舶の碇泊に充つるの設計にて其後三十年より三十二年に涉り道廳技師廣井工學博士の手に實測したる處に據れば運河開鑿外海より直に石狩河に出入するの案となり更に卅八年より卅九年に涉りて石狩石炭會社の築港計劃實測となり同年八月完了を告ぐるに至れり

**築港設計** 石狩石炭會社の設計は河口より約三十丁上石狩町の西南端を横斷して幅九十尺の運河を運鑿し之を水道として外海と石狩河との間に船舶往復の途を開き海面に該運河を中心として左右三千五百尺の距離を取り長さ千四百尺の突堤二個を海中に築出し 圖面の如く〔 〕形のもつと爲し外其突堤並に内石狩河一面は總て船舶の碇泊に充て別に石狩河岸に片棧橋を築きて貨物の積載を爲すの趣向にて此着手より竣効迄を（第一期）と爲し更に運河の兩側に各長サ五百尺幅七百尺の船入場を築き、其周圍に於て貨物積載を爲すの工事着手より竣成迄を（第二期）と爲す、而して運河開鑿の晝は石狩町より錢函乃札幌方面へ通ずる道路を横斷せらるゝに依り此運河上には倫敦市のゼームス河に架設し在るが如き開閉自在の鐵橋を架し船舶の通航に際しては橋を左右に開き平時に在りては閉鎖して人馬車櫓等の交通に充つる都合なるが工事は向三ヶ年にして竣効の豫定なりと云ふ

**築港意見** 工事の難易設計の適否に關しては種々の臆説を爲す者あれど右に關し會社囑托技師石黒工學博士の談及松村海軍少佐の談は左の如し

**石黒工學博士の談** 氏は海軍工務監にして石炭會社の依託に因り築港調査のため特に去廿九日出張し來れる者其要に



曰く日本海は太平洋と異り潮流の加減尠なく唯た常に西北の風荒み冬期に於て最も甚しきを以て其結果として海に注ぐべき河口に一種の變形を現し居れり例へば利根馬入大井天龍富士等太平洋に注ぐ河川は皆悉く海洋に向て直流するよふ其河口直線形に海に面して居れども日本海に面せる河川は擧げて其河口曲折し海面よりは毫も河身を展望する能はざるよふに出來居れるが如き皆潮流と風位との關係より來る者にして此點より云ふ時は河口を港灣に代用するの期望は絶對的に斷たざるべからず而して港灣修築の工事に至りては加工上最も良好なる地盤を有せるものなりとす彼の大阪の如きは灣内泥深くして突堤工事に就て見るも其地盤上に露はれ居る高さ土中に沈下せる深さとが殆ど同一に達し居る如き状態なるを以て其如何に多くの捨石を要するか將又如何に築堤に困難なるかを推測し得るに難からざるべし反之石狩灣は海中三千七百尺迄沙地にして地下四五尺位も捨石をする積なれば直に堅牢なる盤を築造し得べく而して突突口より沖は泥土なるを以て風波の爲め沙洲を成し屢々浚渫を要するの憂もなく言はば詭向に出來居れるを認む港灣の規模に至りては要するに算盤問題に属するを以て直に理想的の大工事を起す譯にも參らざれど石狩の地が天工的に大規模の形勢を占め居りて彼の小樽の如く人工的小規模のものに非ざることは何人の目にも其映ずる處同一なるべし云々

松村海軍少佐の談 氏は海軍大學教授の一人なるが夏期休暇を利用して視察の爲め去廿八日來石一泊したる者にして其本職たる海軍〇〇〇の根據地として夙に灣内河口等を実測しあること、て地圖を出して説明すること頗る明晰。曰。石狩灣沿岸は一帶沙地なれども海中三千八百尺を出れば小樽同様総て泥土にして而も底深からず築港には最も良好の土質なり沙地と土泥何れか工事に適せるかに就ては其底の深淺にも因ることなれど概して泥地は底深く沙地は底淺きを以て捨石を爲すにも突堤を築くにも前者よりは後者の方容易なりとす此點に於ては石狩灣は最も修築に適せるを認む次に捨石又は人造石用に要する石材の處在は工地上最大の關係を有するものなる處幸にして輕川より直に水便に依りて搬送するを得るを以て此點に於ても亦た便利なる土地たるを認む其他石狩河と同灣との關係北海道と石狩の地勢等より觀察する時は石狩が今日迄港灣の修築を加へられずして反て小樽が今日の如く發達したるは實に奇異の思なくんばあらざるなり云々

は た ご や の 蚤 は 京 ま で 上 り け り

第十一 鐵道

鐵道歷史 卅八年石狩石炭會社が始めて敷設願を出したる時は運炭専用として差出したるを通信省に於て普通鐵道に改めしめ卅九年鐵道國有案議決せらる、や更に復た専用鐵道に改めしめ八月三日許可せらる

鐵道設計 三線路に分れ其(第一線)は石狩國空知郡瀧川村を起点とし石狩郡當別村を経て石狩町に至るもの(第二線)は同國樺戸郡月形村を起点として空知郡沼貝村に至るもの(第三線)は石狩郡當別村を起点として夕張郡登川村に至るものにして何れも石狩に集りて水陸の連絡を取るの計畫にして事業竣効期は向三ヶ年なりと云へり

# 倉庫業

## 全井尻支店

南濱 倉庫 (電話五六一)

小樽區色内町四十一番地

北濱 倉庫 (電話一五四)

電話(一五三)

電路(井)

土地測量并買賣  
官廳向代書業

石狩親船町

成田筆耕所

銘酒

金龍、高砂  
松綠、釀造

安

小樽若松町  
安達

吉平

美術寫真  
新式攝影

石狩町大字本町

寫真師 田中春吉

吳服雜貨  
農産物

石狩若生町

全岩崎商店

和洋酒類  
雜貨商

石狩本町

谷川野商店

吳服太物雜貨  
荒物米穀

石狩町大字親船町

三長野商店

明治三十九年九月十八日印刷

明治三十九年九月廿一日發行

(定價拾五錢)

作者兼發行人

小倉道敏

石狩國石狩町大字親船町北廿三番地

印刷人

久末末吉

札幌區大通西三丁目八番地

發行人

石狩新聞社

石狩國石狩郡石狩町大字親船町

印刷所

博光活版所

札幌區大通西三丁目八番地

偉大なる理想の啓發者  
趣味ある文學の鼓吹者  
教育經濟實業の指導者  
腐敗せる政治の廓清者  
暗黒なる社會の大燈明

---

## 石狩新聞

十月五日より大改良

---

每號十二面  
一部金四錢  
廣告大割引

石狩新聞社

付2 石狩町勢要覧 石狩町役場 大正十一年

七月

解説

この『石狩町要覧』が発行された大正十一年（一九二二）七月に、摂政宮殿下（のちの昭和天皇）の北海道ご巡幸（八日～二十三日）があった。十三日には、石狩町に片山侍従が派遣され町状況を視察聴取している。要覧はご巡幸に対処するために編集されたことが判る。

編集執筆者は、著述家として知られ、石狩事情に明るい当時の坂牛町長であることが文質・文体などから十分知ることができるとがわかる。

この要覧は、その後の石狩町紹介の基本文献として数多く引用されてきたが、全文を知る機会が無いまま、八十一年を経た。

このたび、会員の編集によって広く紹介されることは市の歴史研究に資するところ大きいものがある。

なお、使用原本は（孔判刷三十三丁）当時の石狩町会議員、関戸金三郎氏（生振）旧蔵本（現・田中所蔵）である。

坂牛祐直（さこうし・すけなお）

文久三年（一八六三）七月五日～昭和一二年（一九三七）一〇月二六日。旧姓―島森、号―

天民、柳也坊、千生庵、東洋生、俳号―瓢斎。

第四代根室町長、新聞人、第五代石狩町長。

南部藩士島森春寿の次男として盛岡に生まれる。幼時、同藩士の叔父坂牛祐則の養子となる。

藩の儒学者について漢文を学ぶ。明治十四年小学校教員となるが二年で辞め、上京して成立学舎で英語を学ぶ。

内務省土木吏員となり余暇に専修学校で経済学を学んだ。父の願いで同一八年盛岡に戻り、「岩手日日新聞」の編集記者となる。自由党に加入、岩手の自由民権運動の中心となった「求我社」のメンバーの一人であった。社

主と意見があわず退職、平民雑誌を執筆。同二二年盛岡市制施行の時、市役所庶務課長となる。のちに実業界へ入り書店を経営、二五年盛岡市議会議員に当選し、八年間務めた。同三三年同郷人上田重良の経営する小樽新聞本社の記者、札幌支社主任となり、一〇余年務めた。この間、石狩町に度々来町して、「尚古社」の俳句活動に接した。同四五年第四代根室町長となり、大正一〇年まで務めた。同年一〇月石狩町長となり、鉄道誘致と石狩川鮭鱒流網刺網漁業許可運動などに奔走したが、一三年六月下旬病気のため退任した。在職中も退任後も石狩の尚古社員として出句した。また晩年、小樽市に住み同地の俳句指導もした。

編書―『根室千島名勝案内』、『根室郷土史』。

著書―『北海要覧』、『北海の利源』、『北海表忠録』、『岩手縣名譽録』等がある。

参考文献・『根室・千島歴史人名事典』、『田中資料』

(文責・田中實)

大正十一年七月

石狩町勢要覽

石狩町役場

町勢要覽目次

一、	開村由来	122
二、	町村名由来（石狩町市街地、花畔村、生振村、樽川村）	124
三、	旧土人來歴	126
四、	地理	128
五、	高等併置ノ小學校	129
六、	石狩病院	130
七、	殖民ノ歴史（開墾、採礦、漁業、商工業）	131
八、	運輸交通（道路、排水、運河、港津、郵便、電信、電話、渡船）	133
九、	諸會社及工場	135
一〇、	産業組合	136
一一、	神社	137
一二、	寺院	138
一三、	忠魂碑及紀念碑	138
一四、	名勝旧蹟	139
一五、	重要統計（戸口、主要農産物、同水産物、移出、移入、官公衛、町名譽職員、学校、社寺、諸団体、町財政、）	142



## 石狩町ノ沿革

### (一) 開村由來

石狩町ハ福山函館二次テ全道中最モ早ク開ケタル要港ニシテ、古來鮭ノ漁業盛ナルヲ以テ其名聲夙ニ海内ニ喧傳シ、昔時殷賑ノ地タリシカ、時勢ノ變遷ト共ニ頻年鮭魚ノ薄漁ニ伴ヒ漸次衰頽ニ傾キ現今ニイタリテハ僅ニ残喘ヲ維持スルニ過キス、今昔ノ感何ゾ耐ヘン左ニ其沿革ノ大要ヲ叙述スベシ。

今石狩ノ昔時ヲ攷究センニハ石狩ヲ開拓シタル祖先其人ノ事歴並ニ幕府ノ當時蝦夷開拓ニ對スル政策ノ一斑ヲ叙述セザルヲ得ズ。何トナレバ村山家事業ハ幕府ノ施政ト密接ノ關係ヲ有スレバナリ。

蓋シ石狩ノ祖先ヲ尋ヌルニ二百五十二年前能登國羽咋郡阿部屋村ニ生レ寛文中十八歳ニシテ松前福山ニ移住シタル村山傳太夫(當代村山コト十二代ノ祖先)ナルモノニシテ後石狩ニ渡リ土人ヲ使役シ鮭漁業ヲ為シ、ソノ收穫物ヲ松前ニ送リテ販賣シ商業ヲ營メルヲ以テ嚆矢ト為ス。

次テ東西蝦夷地ヲ探見シ東ハ國後、根室、厚岸、久摺(今、釧路)西ハ樺太、宗谷、斜里、留萌、増毛、浜増毛(即チ現今ノ増毛、浜益ノ總称ナリ)厚田、石狩ニ於テ數ヶ所ノ漁場ヲ開キ松前藩主ヨリ漁場各所ノ請負ヲ命セラル。

元禄元年六月徳川光圀ノ家臣崎山市内(天文ニ通ゼル人)快風丸ニ塔シテ此地ニ來リ土人ト貿易シ逗留四十日ニシテ去ル。同七年松前藩家臣山下半左エ門此地ニ來リ漁業豊獲ノ祈願ノ為メニ辦天社設立ヲ勧誘シ恰モ其年村山家大豊漁アリ。祝賀ノ為且ツハ永久漁運ヲ祈ル為メ辦天社ヲ(石狩町大字辦天町ニ)新築シ毎年盛ナル祭典ヲ執行セシガ後郷社八幡社ノ遷座ト共ニ現今ノ位地ニ移サレタリ。

寶永三年幕府石狩場所ヲ設ケ次代村山傳兵エヲシテ之ヲ請負ハシムルヤ石狩ヲ根拠地トナシ各漁場ヲ支配セリ。此時松前藩石狩領ヲ設ケ十三場所ヲ分チテ家臣ニ與ヘ以テ其采邑ニ充ツ皆運上屋ノ設ケアリタリ。當時石狩ハ無人ノ境ニシテ土人ヨリ外ニ使役スルモノナク漁期中ハ福山ヨリ少數ノ出稼人ヲ雇ヒ來リ土人ト共ニ漁業ニ従事セルモノ、如シ。

享和二年二月蝦夷奉行ヲ置キ後函館奉行ト改ム、同年七月幕府東蝦夷地ヲ永久收公ト為ス。

文化四年五月西蝦夷ヲ收公シ函館奉行ニ管理セシム。

文政四年十二月幕府東西蝦夷地ヲ擧ケテ松前藩ニ返附シ安政二年再ヒ幕府ノ直轄トナシ函館奉行ヲ廢シ官衛ヲ松前ニ移

シテ松前奉行ヲ置ク。此間村山ノ請負ハ依然トシテ變ルコトナシ。同四年幕府勤番所ヲ設ケ調役以下諸士來リ在勤シ石狩ノ地ヲ以テ直捌場所トナシ村山ノ請負ヲ免シ出稼人ト爲シ通行人取扱其他用達ヲ命ジ運上屋ヲ本陣ト稱シ石狩十三ヶ場所（旧記二十三ヶ場所ハ豊平、發寒、上札幌、下札幌、篠路、上對雁、上樺戸、下樺戸、上夕張、下對雁、下夕張、島松、苗穂トアル）ヲ統轄ス。

此頃ヨリ明治初年ニ至ル出稼人來住者漸ク多ク勇拂場所請負人山田文右エ門ナルモノ最モ手廣ク漁業ヲ爲セリト傳フ。明治初年幕府政權ノ返上ト同時ニ蝦夷全島ヲ北海道ト改稱シ二年八月兵部省ノ支配ニ屬シ、三年正月更ニ開拓使ニ移シ、超エテ、四月石狩ニ開拓使出張所ヲ置カレタリ。先是佐渡與羽等ヨリ移住スルモノ非常ニ多ク開拓使廳ノ貨物運搬官吏ノ往復等皆道ヲ此處ニ取リタルヲ以テ戸口ハ日ニ月ニ増加シ漸ク石狩町ノ態裁ヲ形成スルニ至レリ。

明治四年五月花畔村生振村ヲ開村ス。同年石狩各漁場ヲ舉ケテ石狩ノ共有トナシ六年七月更ニ一般人民ニ之ヲ拂下ゲテ各民有ニ屬セラル。七年一月開拓使厚田出張所ヲ石狩出張所ニ併セ十一月浜益出張所ヲ石狩出張所ノ派出所トナシ八年二月出張所ヲ廢シテ本廳民事局派出所ヲ置カル。同年五月火災アリ全市街島有ニ歸ス。

九年二月新ニ市街ヲ區画シテ十ヶ町ニ分チ道幅八間トス現今ノ道路ハ即チ之ニ則レルモノナリ、九年四月民事局ヲ廢シテ石狩分署ト稱シ同局派出所長心得ヲ以テ事務ヲ處理ス。

十年九月米人ユーエス、トリート外一名ヲ雇ヒ魚類罐詰製造ノ傳習ヲ受ク、十一年一月分署ヲ廢シテ札幌本廳ノ直轄トナス。同年七月幌内煤炭運搬ハ直ニ採掘地幌内太ヨリ石狩川ヲ下ス事ニ決シ河口開鑿ノ議起リ測量ニ着手ス。十二年五月開拓使雇水利工師蘭人ヨハン・ゴダルト・ファンゲント來リテ石狩川河口改良水利工師長ニ補シ主トシテ河口其ノ他ノ測量ニ從事ス。同年七月石狩郡役所ヲ親船町ニ置キ石狩、厚田、浜益、上川、雨龍、空知、樺戸、夕張ノ八郡ヲ管轄ス。

十三年二月郡役所内ニ石狩河口改良係ヲ置キテ着々測量設計等ヲ進捗セシガ工事主任ファンゲント病ニ罹リ同年十二月横濱ニ於テ死亡シ河口改良ノ計畫モ中止スルニ至レリ。

十五年二月開拓使ヲ廢シテ札幌縣ヲ置カル、ヤ樽川村ヲ新開ス。十七年七月石狩外七郡役所ヲ改メテ石狩、厚田、浜益ノ三郡役所トス。同十八年虎列拉流行シ患者六百二十人内死亡者八十二人ヲ出セリ。同年八月八幡町字高岡部落ノ開村アリ。

十九年二月札幌縣ヲ廢シ北海道廳ヲ置カル。十一月郡役所ヲ親船町（現在ノ町役場廳舎）ニ移轉ス。該廳舎ハ元船場町

字ヤウスバ上テ一ネ河岸ニ建設シアリ旧開拓使時代石狩河口改良事務所トシテ外國人ノ住宅ナリシヲ石狩、厚田、浜益三郡共同ニテ官ヨリ拂下ゲタルモノナリ。

二十二年石狩郡役所ヲ廢シテ札幌郡役所ニ合シ更ニ戸長役場ヲ置ク。二十五年市街地大火アリ大部分烏有二歸ス。二十六、七年ニ亘リ各村落殖民區画割ヲ為シ貸付地ヲ許可ス。此年ヨリ移住民頓ニ増加シ農業大ニ進ム。

三十一年九月石狩川氾濫シ生振村、花畔村大水害アリ。三十五年四月一日二級町村制ヲ實施セラレ親船町外九町及生振村ヲ合シテ石狩町トシ、花畔村、樽川村ヲ合シテ花川村トシ漸ク自治ノ基ヲ開キ四十年四月一日更ニ此兩町村ヲ合併シテ石狩町トシ同時ニ一級町村制ヲ實施セラレ獨立自治團體ヲ組織スルニ至レリ。顧フルニ石狩町ノ夙ニ拓ケ廣ク世ニ知ラレタル其原因ハ

(一) 先進地タル松前トノ交通聯絡ノ衝ニ當リタルコト

(二) 日本第一ノ大河タル石狩川鮭ノ漁場タリシコト

(三) 石狩河口ガ惟一ノ船舶碇繫場タリシコト

(四) 札幌ニ先タチ一時行政上ノ中心タリシ位置ヲ占メタルコト等ニ由ルモノ、如シ

然而シテ今年歳鮭魚ハ甚シキ薄漁ヲ繰返シ河口ノ改修未タ成ラズ。行政及ビ交通上ノ中心ハ過去ニ於テ札幌及ビ小樽ニ移轉シタルノ今日石狩町ニシテ疾クニ時勢ニ鑑ミ猛然回天ノ策ヲ講ゼザルベカラザルニ尚且ツ依然旧套ヲ守リ消極ニ安ンジテ自然ノ推移ニ任センニハ石狩ノ前途ヤ徒ラニ死児ノ齡ヲ數フルニ等シカランノミ此時此際吾人ハ切ニ町民ノ覺醒ヲ促スト同時ニ札幌先進有力者ノ同情ニ訴ヘテ復活ニ向ツテ一臂ノ勞ヲ吝ム勿ランコトヲ希望シテ止マサルモノナリ。

## (二) 町村名由來

石狩町市街地、花畔村、生振村、樽川村

## 石狩町市街地

明治五年時ノ戸長岩田甚兵衛ナルモノ市街地ヲ分チテ十ヶ町トシ左ノ名称ヲ付ス

親船町、本町、横町、弁天町、仲町、浜町、新町、若生町、船場町、八幡町

右名称ハアイヌ語ニ因テ土地ノ狀況ニ鑑ミ命名シタルモノナルガ、當時草木鬱蒼シテ狐狸熊鹿ノ巢窟ナリシ故ニソノ區

画判明セザリシモ六年石狩漁場拂下トナリ民有二属シテ以來漁業者競フテ其業ヲ營ミ商佑モ殖ヘ戸口増加シ來リタリ、九年道幅ヲ改測シテ八間トナシ忽チニシテ純然タル市街地ヲ形成セリ。

當時開拓使出張所ハ若生町ニ置カレ十五年廢使置縣トナルヤ戸長役場ヲ親船町ニ移ス（今ノ町役場付属舎宅）明治十七年石狩外二郡役所ヲ設置シタルトキハ漁業盛ンニシテ市中殷賑ヲ極メタリシモ、明治二十二年郡役所ノ廢止ト共ニ漁業モ遂年不振ノ趨勢ヲ示シタリ。

農業ハ當時多クハ保護移民ノ手ニ依リテ開墾サレ一獲千金ノ巨利ヲ博セント欲スルノ徒ハ動モスレバ先ヅ漁業ヲ試ムルノ傾向ナリキ。

明治十八年山口縣ノ保護移民ヲ大字八幡町字高岡ニ移セシガ丘陵○澤參差トシテ土地平坦ナラサルヲ以テ、初メ二、三年ノ間非常ニ困難ヲ嘗メタリルモ、遂ニ自然ニ打勝チ漸次順調ニ向ヒ水田ノ開發シタルモノ現今八十餘町歩ニ及ビ將來益々擴張ノ計画中ニアリ。

### 花畔村

明治四年五月村名ヲ附ス。此年岩手、宮城地方ノ保護移民三十九戸ヲ移シ毎戸ニ土地二町歩ヲ附與シ一反歩二円ノ開墾料ヲ補助シ家屋（間口三間、奥行六間半）ヲ與ヘ三ヶ年米噌（男六合女三合）ヲ給シ農具種子一切ヲ貸付シ以テ農業ヲ奨励シタリ。

然レドモ地味砂地ニシテ收穫少ク加フルニ多クハ本道ノ農耕ニ經驗ナキヲ以テ一時頗ル苦痛ヲ感ジタルガ寒苦ヲ忍ビ以テ能ク開墾ニ従事セリ。

二十六、七年ニ至リ北海道廳ニテ殖民區画割ヲ實施セラレ次デ（一戸一万五千坪）土地ノ無償貸付ヲ許可セルヨリ移民頓ニ増加シ、二十八年石川縣ヨリ三十二戸ノ團體移民ヲ初メトシ逐年農家戸口増加シ、三十五年四月二級町村制ヲ實施セラレ、石狩町、花川村組合制度ヲ改メテ四十年四月石狩町トナシ、花畔、樽川、生振ノ三村ヲ大字トシ一級町村制ヲ布カル、ニ至リ現今二百六十三戸、千七百餘ノ住民ヲ算スルニ至レリ。

### 生振村

明治四年五月宮城縣高城、松島、磯崎（以上今ノ宮城縣松島村）及ビ山形縣米澤地方ヨリ三十一戸移住セリ今ノ旧生振

村ト称フルモノ之レナリ。石狩河右岸ニ住居シ開拓使保護ノ下ニ農耕ニ從ヒ辛酸ヲ忍ビタルコト花畔村ト同様ナリキ。爾後十五年ニ茨戸ヨリ美登位ニ至ル沿岸ハ僅二十戸ノ増加ヲ見タルガ、十八年山口縣ヨリ移民アリ内点々六戸ヲ殘シテ更ニ高岡ニ移ル今ノ通称六戸ト唱フル所是ナリ。

二十七年殖民區画一戸ヲ一萬五千坪トナシ九月ヨリ翌二十八年四月ノ間ニ於テ全村ノ大部分ノ土地ハ概ネ貸付ヲ了シ、先ヅ愛知縣團體五十六戸ヲ第一ニ逐年移住者陸續トシテ來リ、深林曠野忽チニシテ良耕地ト化シ戸數四百ニ上リタルモ三十一年九月及三十七年七月兩度全道未曾有ノ大水害ニ遭遇シ他ニ轉住シタルモノアリ戸口稍減少セリ。

三十五年四月石狩町ト合シテ二級町村トナリ次デ四十年四月一日一級町村制ヲ實施セラレ現今石狩町ノ大字トシテ選舉權者ノ多數ヲ包有スル有力ナル自治區ナルガ石狩川治水工事ノ開始以降同事務所ノ附近ニ於テ官民ノ居住ヲ構フ者現在約二百戸ヲ算シ宛然一市街地ヲ成スニ至レリ。

### 樽川村

管内村落ニ於テ最モ早ク開ケタルハ樽川村ニシテ往昔(ヲタルナイト称ス)文化年間石狩村山家ニ於テ漁場ヲ經營セシヨリ海浜二三ヶ所ノ漁場ヲ開發セシモ陸地ハ一ノ開拓ヲ見ルニ至ラサリキ。明治十五年本村名ヲ附シ十八年山口縣移民九戸移住シ貧窮者ニハ格別保護ノ下ニ專ラ農業ヲ奨励セラルタルモ地味卑濕瘠簿ニシテ收穫少ク農事專業ヲ以テ生計ヲ樹ツルニ足ラズ故ニ傍ラ副業トシテ夏季ハ菅草ヲ刈リ鯁魚ニ於テ乾燥ノ具トシテ藁ノ代用ニ供シ、冬ハ薪材ヲ伐リテ小樽ニ搬出シ漸ク生計ノ法ヲ得セシメ一戸僅ニ五千坪ノ割渡シモ數年ヲ経ルニアラザレバ成墾スル能ハザルノ状態ナリキ。二十六年殖民區画割ヲ為シ一般人民ニ貸下ヲナシタル以來農民大ニ増殖シ、三十五年四月花畔村ト合シ花川村トシテ二級町村制ヲ施行セラレ、四十年四月一日一級町村制實施ノ結果石狩町ノ大字部落トシテ現二百三十五戸八百八十名ノ棲息ヲ見ルニ至レリ。

### (三) 旧土人來歴

明治十七年對雁村ニ移住シタル樺太旧土人部落ノ一部ヲ分チテ現在ノ大字八幡町字來札ニ移住セルヲ以テ當地土人部落ノ主ナルモノトス。此地古來ヨリ秋季ニ至レバ鮭漁夫トナリテ上川近文ノコタン(土人常住地)ヨリ入稼スルモノ多シ。

一説二元録年間水戸藩家臣快風船二乗ジ石狩ニ來ル。

土人爭ヒ集リテ之ヲ觀ル男女一千餘人互ニ貿易シ留ル事四十餘日ニシテ去ルトノ記録ニ據リ考フルトキハ往昔石狩漁場ニハ村山家ノ時代ヨリ既ニ多数土人ノ入稼セルモノアルヲ知ルニ足ルベシ。而シテ土着ノ土人ハ維新前ハ生振村字ヤウスバニ十二戸シビシビウスニ四戸アリテ年中倭人ト混ジ漁獵ノ勞働ニ従事セリト云フ。

今八幡町字來札ノ旧土人ノ來歴ヲ索スルニ明治八年樺太ヲ露國ニ交換スルヤ同族約八百人樺太ヨリ宗谷ニ渡來シ鮭漁ニ従事シ、翌九年小樽ニ至リ同地ニ一ヶ月逗留此間一切ノ経費ハ開拓使ノ給與ニ係ル。同年七月札幌郡對雁村ニ全部ヲ移住セシメ約二百戸計リ一部落ヲ為シテ漁業ニ従事シ同時ニ石狩ニ三ヶ所ノ鮭鱒漁場、厚田ニ三ヶ所ノ鯨漁場ヲ付與セラシ。春季ハ厚田秋季ハ石狩ニ向ケ壯者ハ悉ク出稼ギテ漁業ヲ營ミ居リ、且ツ對雁ニハ養蚕所ヲ設ケ婦女子ヲシテ紡織ノ事ヲ傳習セシム。

斯クスルコト八年延テ明治十五年ハ開拓使保護指導ノ下ニ經營シ來リシモ十六年ヨリハ其羈絆ヲ脱シ獨立自營ノ民タラシメントシ共救組合ナルモノヲ組織シ當時開拓使ノ官史タル上野正ヲ舉ゲテ組合總理ト為セリ。

十七年對雁部落ノ大半百二十戸現今ノ八幡町字來札ニ移住シ專ラ鮭鱒、鯨ノ漁業ニ従事シ自活ノ途稍樹立セントスルニ際シ悪疫流行シ、十八年ヨリ二十年ニ至ル間虎列ニ及ビ赤痢等蔓延シ病死者約四百人ヲ算スルニ至レリ。夫ヨリ逐年漁業ノ不振ト共ニ漸ク生計ノ困難ヲ感スルニ至リ追々他地方ニ向ツテ流離シ或ハ故郷樺太ニ逃歸スルモノアリテ戸口大ニ減少セリ。

明治三十六年ニ至リ漁業ノ収支償ハズ連年不漁ノ結果負債嵩ミ到底維持ノ方法立タサルヲ以テ石狩漁場一ヶ所及厚田漁場ヲ賣却シ辛フジテ負債ヲ整理シ同時ニ組合ヲ解散セリ。

三十二年ニ至リ本道旧土人保護法ノ發布セラレタル結果旧土人財産ハ道廳長官ノ管理スル所トナリ、當時石狩ニハ二ヶ所ノ漁場を餘セシガ此場所モ漸次漁獲不況ノ為メ益々戸口減少シ、三十七年ニ至リ對雁村ニ三戸來札ニ三十五戸(人口百五十人)ヲ止ムルニ過ギズ。同年十月來札ニ旧土人學校ヲ設ケ土人兒童教育ノ道ヲ開キタルモ當時住民生活ノ狀態益々困難ニ陥リ少壯者ハ漁夫トナリ婦女ハ日雇ヲナシ僅ニ糊口ヲ凌ギ來リタル狀況ナルヲ以テ殆ンド就學者ヲ見ル能ハズ、然ルニ三十七、八年戰役ノ結果樺太島ノ我版圖ニ歸スルヤ漁業ノ多望ナルニ而モ懷郷ノ念ニ馳ラレ彼地ニ渡航スルモノ陸續相踵ギ、三十九年十月ニ來札部落ノ全部ヲ挙ゲテ樺太ニ移住シ去ルニ至レリ。(共救組合規約ノ大要アルモニ省略ス)

(四) 地理

位置

石狩國石狩郡ノ西端ニ位シ北ハ厚田郡聚富村ニ境シ東ハ當別村、南ハ札幌郡篠路村及琴似村大字篠路兵村ニ接シ西南ハ錢函村及手稲村ニ隣シ西ハ一帯日本海ニ面シテ右ニ厚田浜益ノ遠山ヲ眺メ左ニ錢函小樽ノ諸山ヲ望ミ遙カニ積丹半島ト相對ス。

地勢

東西ニ短ク南北ニ長ク字高岡部落ノ一部ヲ除キ地勢一帯平野ニシテ石狩川ハ町ノ中ヲ環流シテ海ニ注グ。川ノ左岸ニ石狩市街及花畔、樽川ノ殖民地ヲ擁シ右岸ニハ大字八幡町、同若生町及ヒ生振村高岡ノ殖民地ヲ以テ當別村ニ連ル。

河流

石狩川 其源ヲ遠ク石狩嶽ニ發シ蜿蜒屈曲石狩町ニ至リテ日本海ニ注グ實ニ日本第二ノ長流ニシテ延長百六十七里河幅二百間乃至四百間、水深四十乃至五十尺海潮數里ニ溯リ流域常ニ洋々トシテ小船ノ来往ニ便ナルモ河口淺ク干潮七尺滿潮十尺ニ過ギズ六十噸以上ノ船舶出入スルヲ得ズ。因ミニ石狩ハ原名ヲ「イシカリベツ」ト云フ回流川ノ義ナリ、石狩川ノ河口甚ダ屈曲回流スルニ出ヅト云ヘリ、又一説ニ流程九十二里二十八町河幅二百一十二間餘深七尋トアリ。

聚富川

厚田郡ト石狩郡トノ郡界ニシテ川幅十間延長五里日本海ニ注グ。

美登位川

生振村當別村々界ニシテ延長一里川幅五間生振村字ビトイニ至リ石狩川ニ注グ。

茨戸川

(一名天然川) 上流發寒川ト称ス、花畔村、樽川村ト篠路村、琴似村トノ村界ヲ流レ川幅八間花畔村字茨戸太ニ至リ石狩川ニ注グ。

小樽内川

樽川村ト錢函村トノ境ヲ流レ川幅十五間一流濁川トナリテ日本海ニ注グ。

港灣

石狩灣 樽川村ヨリ辨天町、八幡町シツプニ至ル沿海ヲ總称ス。海面遠淺ニシテ潮流ノ加減少ク平均一尺乃至四五寸ヲ示スニ過ギズ然レドモ一旦西風暴威ヲ逞フスルトキハ激浪怒濤ノ猛烈ナル頗ル凄壯ノ觀アリ。沿岸ハ一帯ノ砂地ニシテ一ノ岩石ナク夏季ニ於ケル海水浴ノ恰適地ナリ。

地質

海岸ヨリ約一里ニ亘ル陸地ハ多クハ砂地ニシテ其奥地ニ入レバ所々ニ泥炭アリ、沿海亦陸地同様砂濱ナルモ岸ヨリ約十町ヲ出ヅレバ泥盤ナリ。

氣候

乾燥ニシテ温度ハ盛夏ハ十五度以上ニ昇ルコトアルモ概シテ清涼ニテ極寒零下五度ヲ示スニ過ギズ、梅雨ノ

候ト雖モ陰暈ノ日少ク濃霧ノ襲フコト稀ナリ。只特殊トスルハ年中ノ三分ノ二ハ概ネ強風ノ一事ニシテ毎歲十一月ヨリ翌年三月迄ハ西北風強ク四月ヨリ六月迄ハ南風、七月ヨリ十月頃ハ東風稍強ク無風ノ日ハ殆んど稀ナリ。廣 袤 東西一里三十二町、南北七里八町、面積三千九百六十一万五千九百四十四坪ニシテ内三千万坪ハ民有地三百七十八万坪ハ河流、殘餘ハ未開地海浜地等ナリトス。

#### (五) 高等併置ノ小學校

石狩町ニ於ケル各小學校及分教場ノ統計ニ関スルコトハ別項ニ在ルモ茲ニハ其校ノ最モ古キ歴史ヲ有スル高等併置ノ學校ノミヲ掲グベシ。

**石狩尋常高等小學校** 横町ニ在リ抑々石狩町ニ於ケル教育ノ創始ハ明治四、五年頃ニシテ所謂寺小屋的ノモノタリ。當時皆篤志者ノ私立ニ係リ課程ハ習字、讀書ノ二科目ニテ之レガ教授ノ任ニ當レルハ眞宗能量寺住職曾我某、醫師高橋某其他一二ニテ算術ノ如キハ夜間篤志者ノ門ニ就キ僅ニ教ヲ請フニ過ギザリキ。

明治六年公立石狩教育所ヲ開設スルト同時ニ前記ノ生徒ヲ皆此所ニ收容シ明治八年二月石狩學校ト称ス。當時校舍ハ民家ヲ充當セシガ十一年三月宅地建物ヲ買入レ校ノ付屬トナス。

十九年若生町ニ民家ヲ充用シテ若生分校ヲ設ケ二十五年一月尋常科高等科ヲ併置ス。此月三十一坪半ノ運動場ヲ増築シ同年五月七日御眞影ヲ奉戴ス。爾來高等科修業年限ノ變更アリ、三十年十月新ニ二教室ヲ増築シ同年十一月石狩水産補習學校ヲ併置ス。

三十一年十二月ヨリ生徒ノ貯金ヲ實行ス。三十二年一月樽川村ニ簡易教育所設置ニ付本校ヨリ教員ヲ出張教授セシム。同年十一月八幡町字高岡ニ分教場ヲ新設ス。三十三年四月高等科修業年限ヲ四ヶ年ニ、全年七月更ニ二ヶ年ニ變更セラル。

三十六年九月工費三千八百円(内五百五十円国庫補助、三千二百五十円町有志ノ寄付)ヲ以テ八教室總建坪三百三十坪ノ教室ヲ改築シ十二月五日落成式ヲ舉グ、三十八年四月就學獎勵規程ニ依リ名譽旗ヲ下付セラレ、五月石狩商業補習學校ヲ併置ス。大正十年末児童尋常科二百八十五名高等科百十名アリ。

**生振尋常高等小學校** 生振村七線北六號ニ在リ明治二十九年十二月同村五線ニ新築ス。三十三年美登位、三十四年發泉、三十六年參泉ノ分校ヲ設ク。三十六年八月七線ニ移轉新築ヲ行ヒ四十一年十一月高等科ヲ併置セリ。大正十年末在



學兒童尋常科百六十一名高等科三十八名ニテ近年治水工事進捗ニ隨ヒ著シク入學兒童増加セルヲ以テ本年八月更ニ教室増築計画中ニ在リ。

#### 花川尋常高等小學校

花畔村北十一線ニ在リ明治六年四月ノ創立、始メハ教育所ト稱シ後花畔尋常小學校ト稱ス。同十五年校舍新築二十九年増築ノ上志美分教場ヲ新設シ三十四年二月御聖影ヲ奉戴ス。三十七年六月高等科ヲ併置セリ。同年八月現名ニ改稱シ三十八年四月名譽旗ヲ下付セラル。三十九年十二月教室増築同四十一年運動場ヲ増築。大正末在學兒童尋常科二百三十一名高等科四十七名ナルガ校舍建物最モ古ク不完全甚シキヲ以テ、目下住民ハ改築ヲ要求シツ、ツアリ。

#### (六) 石狩病院

石狩町ニ於テ醫藥ヲ以テ業トスル者ハ左岸弁天町ニ設立シアル石狩病院ノ外右岸ニハ同院出張所並ニ他二名ノ開業醫アルモ開拓使以降系統連絡トシテ繼續シアルモノハ只此石狩病院アルノミ。

明治二年九月創立ノ計画アリ明治三年三月開拓使ノ命ヲ奉ジ四等醫小黒某函館ヨリ赴任若生町官舎ニ於テ醫術ヲ開業ス。明治五年辨天町旧本陣官邸ニ移リ同邸ヲ醫院ニ充用始メテ石狩病院ト稱ス、六年五月小黒氏辭任宮崎氏交代院長トナル、七年一月石狩出張病院ト改稱セシガ八年二月出張病院ノ名称ヲ廢シ官立札幌病院ノ直轄トナシ更ニ石狩病院派出所ト稱ス。

九年五月石狩大火アリ建物及ビ器具等全部烏有二歸セシヲ以テ直ニ横町通り金龍寺（日蓮宗）ノ一室ヲ借り受ケ院務ヲ執ル。

十三年八月官ニ於テ弁天町ニ洋式ノ院舎ヲ新築ス。

十五年二月開拓使ヲ廢シテ札幌縣ヲ置カル、ヤ開拓使廳ヨリ院舎器具器械等全部石狩町ニテ拂下ゲ町立ト為シ同時二三百二十円ノ補助金ヲ下付セラル。右補助金ニテ更ニ器具藥品等ヲ設備シ院務ノ擴張ヲ圖リシ為遂年盛大トナリシガ會々宮崎氏院長ヲ辭シ馬場氏次テ其職ヲ襲ヘリ。

二十五年五月大火アリ、入院室ヲ除キ全部類焼セルニヨリ七月親松町ナル學校付屬建物ヲ一時充用仮病舎トナシ繼續院務ヲ開ク。馬場氏辭シ松本、中山、森、宇谷、山本、佐々木、桐野、加藤、中平、桐野ノ諸氏相代テ院長タリ。

三十六年十一月生振村二病院出張所ヲ設置シ、三十八年弁天町旧敷地檢査所ノ建物（焼失残り入院舎ト交換セル分）ヲ改築シ八月移轉セリ。四十二年町立病院ヲ廢シテ町醫制度ニ改メ現院長千葉醫學士朽木尚義氏ヲ聘セシガ後大正四年三月同氏ニ於テ院舎建物ヲ譲リ受ケ、更ニ町醫囑託トナリ現ニ校醫ヲ兼務シツ、アリ。實ニ石狩惟一ノ病院ト云フベキナリ。

### （七）殖民ノ歴史

#### 開墾、採礦、漁業、商工業

**殖民ノ歴史** 維新前ノ事績詳ナラズ。按ズルニ昔時村山家石狩ニ来リ土人ヲ使役シテ漁業ニ從事シ、東西蝦夷地ノ漁業請負ヲ為セシハ抑々石狩開拓ノ嚆矢ニシテ村山家ニ於テ漁業ノ傍ラ石狩ノ公共ニ貢獻シタル其功勞甚大ナルモアリ。真ニ石狩ノ盛衰ハ同家ト消長ヲ共ニセリト云フモ溢言ニ非ルナリ。當初石狩ノ土着トシテハ素ヨリ土人ノ外ナカリシモ村山家率先シテ扶導誘掖ノ任ニ當リ、開拓殖民ニ力ヲ致セル結果、安政年間ヨリ維新前後ニ亘リ一般商工業者及ビ漁業ノ為メ入稼ニ来ル者陸續トシテ相踵ギタルモ純然タル農業ノ目的ヲ以テ移住セルモノハ絶無ナリシガ如シ。

降テ明治四年ニ至リ開拓使移民奨励ノ法ヲ立テ、先ヅ奥羽地方ヨリ生振、花畔ニ數十戸ノ保護移民ヲ渡航セシメ生計及ビ開墾其他一切ノ費用ヲ支給シテ専ラ農業ニ從事セシム、然レドモ北海ノ天地内地ノ氣候ト著シク相違スルモノアリ。且ツ土地肥沃ナラザルヨリ数年間ハ開墾ノ効果ヲ舉ゲル能ハズ。

延テ十五年樽川村ニ、十八年八幡町字高岡ニ數十戸ノ移住者アリ。

農耕ニ從事セルモ是亦容易ニ開拓ノ目的ヲ達スル能ハズ、諸種ノ副業ニ頼リ漸ク生計ヲ立ツルノ狀況ナリキ。

二十六、七年北海道廳殖民區画割ヲナシ一般ニ耕地貸下ヲ為シ、大ニ府縣ヨリ移民ヲ奨励セル結果三ケ年間ニシテ一部瘠薄ノ地ヲ除クノ外ハ殆ンド尺寸ヲ餘サザル程ノ盛況ヲ呈シ、数十町歩ノ耕地ハ開墾セラレテ始メテ殖民ノ目的ヲ達スルニ至レリ。農村ノ發達斯ノ如シ。石狩市街地モ之ニ伴ッテ逐年戸口増殖シ以テ今日ニ至レリ。今試ミニ明治五年以來墾成耕地ノ反別比較ヲ掲ケレバ左ノ如シ。

明治 五年 十八町歩

明治 十年 六十町歩

明治	十五年	七十二町歩
明治	二十年	百五十町歩
明治	二十五年	三百三十九町歩
明治	三十年	千二百五十町歩
明治	三十五年	五千五十町歩
明治	四十年	五千六百町歩
大正	元年	五千三百九十七町四反歩
大正	五年	五千四百五十二町五反歩
大正	十年	五千六百五十九町二反歩

**採 礦** 本業ニ就テ記スベキモノハ石油採掘ノ一アルノミ、石油杭ノ發掘ハ明治三十六年在横浜インタール、ナシヨナル、オイイル、コンパニーニ於テ着手シタルヲ嚆矢トナス。當初會社ハ多額ノ資金ヲ投ジテ八幡町字高岡五ノ澤ヨリ厚田郡望來村ニ亘ル廣大ナ地域ヲ相シテ宏壯ナル設備ヲナシ、坑數六ヶ所ニテ當時一晝夜二百石ヲ湧出シ品質可良ナリシモ、始業後三ヶ月間ニシテ漸次出量減退シ僅ニ二ヶ所ノ坑數掘鑿ニ止メ一日平均十石ヲ湧出スルニ過ギザルノ狀況ナルヲ以テ、四十四年四月六日日本石油株式會社ニ於テ事業ヲ繼承シ當初ノ設備ヲ縮小シ營造物ノ一部ヲ解体シテ勇拂郡鵠川村北海道鑛業所ニ移シ、後留萌地方ニモ巨資ヲ投ジテ試掘ヲ試シタルガ、何レモ成績不良ナルヲ以テ今や鵠川、留萌兩所トモ中止シ殊ニ昨年十月石油會社ノ寶田會社ト合併ヲ斷行シテヨリ更ニ資本ヲ増加シ、北海道鑛業所ヲ高岡字八ノ澤ニ設立シ事業ヲ擴張シテ前途益々有望ノ狀況ニ在リ。

**漁 業** 石狩ノ天地古來鮭漁業ヲ以テ特殊ノ業トシ其豊凶ハ直ニ市況ノ盛衰消長ニ影響ヲ及ボスノ故ニ、漁獲ノ方法モ夙ニ多年ノ經驗ニ依リ案出セラレタルモノニ二三ニシテ止マラズ。旧記ニ依レバ石狩漁場例年秋分ヨリ石狩川筋海濱共各場所ニ派出所ヲ設ケ、在住諸士及ビ部員ヲ派遣シテ漁政ヲ督シ江差、松前、函館、其他ノ地方漁業家陸續來リ漁場割付ヲ受ケテ營業ニ就ク。

又琴似、發寒、豊平、其他ノ各川ニ鮭魚種川ノ設ケアリ投網ヲ禁ズ云々、又村山家漁場請負ノ時同家ヨリ漁業熟練ノモノニ命ジテ製網及ビ漁獲ノ方法モ親シク土人ニ傳習セシメ改良法ニ基キ從事セシメタル結果漸次産額ヲ増大スルニ至レリト、寛政八年村山家初代傳太夫ノ用ヒタル建網、ザル網ハ即チ此類ナリ。

又文政四年ノ頃村山氏錢函北東石狩川ニ至ル間ノ海浜ニハ貝類ノ産額ナキヲ憂ヒテ、ホッキ貝ヲ移植シタレバ、爾來此種ノ漁業ノ基ヒヲ開キタリ。

當地方ニ於ケル魚族ノ豊富ナルハ云フ迄モナク其主ナルモノヲ鮭トシ鱒之レニ次グ。今俄ニ維新以前ノ漁獲高ヲ知ルニ由ナキモ魚族ノ多キ割合ニ收穫多カラズ。

明治初年以來平年ノ收穫高ハ二万石内外ナリト云フ、鮭漁期ハ毎歲九月一日ヨリ十二月末日マデ、鱒ハ五月一日ヨリ六月二十日迄其他ノ雜漁業ハ此外ノ期間ニ於テハ鮭鱒ノ漁業免許ヲ受ケタルモノ、外ニ所謂密漁者ナルモノアリ。開拓使時代ヨリ是レガ取締ヲ嚴シ今尚勵行シツ、アルモ、正業者ノ眼ヲ窺ミテ濫獲スル者少カラズ。為メニ魚族ノ保護蕃殖ヲ妨グルモノ甚シキハ頗ル遺憾トスル所ナリ。

**商工業** 生産業ノ盛衰ニ從ヒ消長ヲ共ニシ、昔時村山家ニ於テ漁場請負ヲ為シタル頃ニハ商店ハ一戸モナク唯村山家所有ノ船舶ヲ以テ雜貨産物ノ輸出入ヲナシ、移住者並ニ土人ニハ總テ同家ヨリ日常ノ需要品ヲ支給シタリ。

文久ノ末年佐渡越後地方ヨリ木綿小間物ノ行商入込ミ、明治五、六年頃ヨリ逐年商工業者移住シ來リ、明治十二年頃ニハ商業三十五戸、工業十二戸、貸座敷八本町、弁天町、横町等ニテ常住六戸漁季ニ至レバ小樽古平地方ヨリ多数入稼アリ、娼妓三百ヲ以テ算シタリト、當時ノ盛況察スルニ餘リアリ。

二十二年頃ヨリ漁業ノ不振ト数次ノ火災ニ際會シテヨリ商工業衰運ニ傾キタルモ二十七、八年ニ至リ生振、花畔、樽川、各原野ニ於ケル農村漸ク拓ケテ移民多ク渡來シ、一面近年石狩川治水事業ノ進捗ニ伴ヒ關係ノ官吏及ビ從業ノ労働者多数轉住シタルトニ因リ著シク生振村、花畔村ノ繁盛ヲ呈スルニ至レリ。

#### (八) 運輸交通

**道路、排水、運河、港津、郵便、電信、電話、渡船ノ來歴**

**道路** 維新前ハ道路ノ開鑿成ラズ、只荊棘密林ヲ伐リ開キ僅ニ人馬ノ通行シ得ルニ過ギズ。開拓使時代ニ至リ國縣道ヲ定メ札幌ヲ中心トシテ各方面ニ通ズル道路ヲ設定セリ。石狩ハ厚田、浜益、當別、錢函等ニ通ズル要路ニ當レルヲ以テ早く仮定縣道ヲ設ケラレ、明治八年當別ニ至ル里道、二十二年輕川ニ至ル里道ノ開鑿アリ。

爾來殖民滋々加ハリ漸次交通ノ頻繁ト共ニ道路橋梁ノ改修其多キヲ加へ、二十七年以降頓ニ増加シ到ル處道路開ケ、三

十五年ニハ錢國ニ至ル新道開通、三十七年ニハ高岡五ノ澤ニ至ル里道開修等交通ノ便至ラザルナク、最近調査ニ依ル石狩管内縣里道ノ延長ヲ舉グレバ左ノ如シ（道路法施行以前ノ調査ニ依ル）

縣道 五里十六町

里道 六十里八町三十五間

又縣道、里道ニ架設セル橋梁數左ノ如シ

縣道筋ニ架設 十二ヶ所

里道筋ニ架設 三百五十四ヶ所

**排水** 排水ノ掘鑿セラレシハ開鑿ノ盛大ナルニ至リ道路ニ伴ツテ施行セラレタルモノニテ、即チ明治二十七年、八年ヨリ三十年迄ノ間ニ最モ多ク開掘サレ、爾後年々數百間ノ掘鑿アリ。現今延長約二十餘里ニ及ベリ。

**運河** 錢函花畔間ノ運河ハ二十八年開鑿サレ、當時該付近ノ土地濕潤ニシテ穀物稔ラズ、農民ノ困難一方ナラザルヲ以テ、道廳ニ於テ排水及ビ農産物運搬ノ便ヲ圖ル目的ヲ以テ起工シタルモノニテ繼續三年ニシテ成ル。此運河開鑿後ハ土地大ニ乾燥シ農耕上ニ對シ非常ノ利益ヲ與ヘタリ。而シテ三十八年迄ハ花畔、錢函三里ノ間毎秋此運河ヲ利用シテ穀類ノ運送頻繁ヲ加ヘ尠カラザル効果ヲ及ボセルモ、此辺ノ地層皆砂地ナルヲ以テ年々兩岸缺壞ノ度ヲ増シ其後修繕セザルヲ以テ、現今ニテハ運輸ノ便杜絶シ只大排水ノ目的ニ過ギザルニ至レルハ惜ムベシ。

**港津** 石狩灣ノ河口水浅ク海面亦遠淺ニシテ大船ノ碇泊ニ便ナラズ、故ヲ以テ船舶ハ石狩川沿岸船場町約三百間ノ所ニ定繫スルヲ常トセリ。然レドモ石狩川ノ長流ハ以テ數十里ノ上流ニ遡上スベク旭川迄道路ノ開通セザル時代ニ於テ、此大河ガ如何ニ運輸交通上ニ便益ヲ與ヘタルカハ想像ニ餘リアリ。明治九年七月開拓使所有汽船弘明、豊平二艘ヲ以テ石狩、小樽、篠路間ヲ航行シ船客貨物ノ運送ヲ為シタルモ、現時ハ河口淺キヲ以テ六十噸以上ノ船舶出入困難ナリ。明治三十三年ヨリ石狩、江別間、國庫補助ノ下ニ命令航路ノ開始アリ。十數噸ノ小汽船ヲ以テ月二三回ノ定航アルモ貨物ノ乏シキ為メニ今ヤ殆ンド廢航ト同ジ。

石狩港ト需給ノ關係ヲ有スル諸港ハ小樽、余市、古平、美園、積丹、厚田、浜益等ニシテ、此間ハ五十石乃至二百石ノ川崎又ハ西洋形帆船ニテ航海シ、毎年四月ヨリ十月ニ至ル數十艘ヲ以テ往復スルヲ以テ、彼我商業ノ取引モ頗ル密接ヲ極メ盛況ヲ呈シタリ。茲二十年以降ノ商船出入數ノ統計アルモ略ス。

## 渡 船

石狩川渡船場ハ維新前ヨリ營マレタルモノニシテ、當時ノ制定分明ナラズ。明治五年開拓使出張所ヲ若生町ニ置カル、ヤ本廳ト厚田、浜益ニ官吏貨物ノ往復頻繁トナリ、且ツ同六年各漁場ヲ一般ニ拂下ゲタルヲ以テ、諸國ヨリ漁業ノ入稼人多ク從テ渡船事務益々繁劇ヲ加ヘタレバ、開拓使取締ノ下ニ町民小山某之レガ請負ヲ為シタリ、之レヲ私設渡船場ノ初メトス。其後數人ノ請負者交代アリ。延テ三十七年ニ至リ個人經營ヲ更メテ町經營トシ、収支ヲ特別會計トシテ設備ヲ擴張シ交通ノ便益ヲ計リ、以テ今日ニ至ル。二十七年茨戸ニ、三十三年生振村三線ニ、三十四年同村ニ二線ニ私設渡船場ノ許可ヲ受ケ現ニ繼續シツ、アリ。

## 郵便、電信

明治八年初メテ石狩郵便局ヲ開設ス。其以前ハ詳ナラズ。蓋シ駅通制度ニ依リタルモノナラン。二十一年ヨリ電信ヲ開通、三十九年ヨリ公衆電話ヲ開始セリ。又三十七年花畔村ニ郵便局ヲ増設シ、以テ通信ノ便稍々完備ヲ見ルニ至レリ。而シテ今ヤ若生町、八幡町付近ノ商業發達シ、益々通信機關ノ必要ヲ感ジ來ル八月ヲ以テ八幡町局ニ於テ公衆ノ電信電話取扱ヒヲ開始シ始メテ石狩川兩岸ノ聯絡ヲ通ズルニ至ル計畫ナリ。

## (九) 諸會社及工場

一、北海道萬年木株式會社 本社ハ東京海上ビルデング六階ニアリテ支店ヲ石狩町大字船場町番外地ニ設ク。大正八年九月ノ創立ニテ資本金額拾萬圓、社長ハ塚原嘉一郎、常務取締役ハ鈴木逸平ナリ。同社ノ萬年木ヲ以テ製作シタル書架ハ今回東宮殿下ニ献上シ、而シテ平和博覽會ニハ同材料ヲ以テ裝飾シタル應接室一間ヲ北海道館ニ出品シ好評ヲ博シツ、アルハ皆人ノ知ル所ナリ。

二、日本石油株式會社石狩鑛業所 日本石油會社ノ創立ハ明治二十一年五月ニテ、初メ新潟縣下ノ油田ヲ開鑿セシガ漸次各地ニ及ボシ、インタール、ナシヨナル石油會社ヲ買取シテ石狩油田ヲ採掘シタルハ明治四十四年四月ニ在リ。大正十年十月寶田石油會社ト合併シタル結果益々資本ヲ増加シ、新タニ石狩町字八ノ澤ニ鑛業所ヲ設立シ事業ヲ擴張シツ、アリ。本社々長ハ内藤久寛、副社長ハ橋本圭三郎ニテ石狩鑛業所主任ハ小野寺徳太郎ナリ。

三、日本麻絲株式會社石狩製線所 大正六年八月ノ設立ニ係リ本社ハ東京橋區新肴町ニ在リ。石狩特産ノ亜麻ヲ以テ製線事業ヲ經營スルヲ以テ目的トス。昨年四月火災ノ為メ機関室並ニ製糸工場ヲ烏有二歸セシメタルト、歐洲大戰後製品ノ價格ニ變動ヲ來シタル結果一時休業ノ餘儀ナキニ至リタルガ多少事業ヲ縮小シテ愈七月六日ヨリ再ビ事業ヲ開始

セリ。昨年ノ製造高八十九万四千円ニテ該工場管理人ハ淺見仙作ナリ。

四、**山本製粉工場** 大字八幡町山本菊次郎ノ經營ニ係リ、大正十年三月ノ創業ニシテ精米ヲ主トシ精麥製粉等ヲ専ラ為ス。

五、**刀根精米所** 大字八幡町刀根若松ノ經營ニテ、大正十年六月ノ創業ナリ營業前ニ同ジ。

六、**金子蚤取粉製粉工場** 大字花畔村金子清一郎ノ經營ニテ、大正七年一月ノ創業ナリ。除虫菊製粉ヲ業ト為ス、昨十年度ノ生産七百八十四貫、價格六千五百二十八円ニ及ブ。

七、**山岡澱粉工場** 大字八幡町字高岡藤岡京太郎ノ經營ニテ、大正六年九月ノ創業ナリ、澱粉製造ヲ業トス。

八、**長野酒造場** 大字八幡町ニ在リ、長野徳太郎ノ經營ニテ、大正元年二月ノ創業ナリ。石狩ニ於ケル惟一ノ酒造營業ナリトス。

九、**醤油醸造工場** 大字仲町林喜佐吉ノ經營ニテ、明治三十年二月ノ創業ニ係ル。昨年ノ醸造高三百六十五石ニ及ブ。

(因ミニ明治三十六年頃水産物ノ罐詰製造ヲ目的トシタル高橋合資會社アリシガ、惜ヒ哉鮭ノ原價及ビ諸材料騰貴ノ為メ遂ニ永久休業ニ歸シタリ)

#### (十) 産業組合

一、**石狩水産組合** 明治三十六年ノ設立ニテ、組合員百七十四ヲ有シ雜粕ノ検査及ビ漁業上ノ取締ヲ為ス機関タリ。現組合長ハ安保福藏ナリ。

二、**石狩漁業組合** 大正二年十二月ノ設立ニテ、組合員百三十二名ヲ有ス。漁業者ノ共同貯金、共同販賣、共同購入、漁業資本ノ貸付等ヲ其重ナル事業ト為ス。現組合長ハ鈴木逸平ナリ。

三、**石狩信用販賣購買組合** 大正四年五月ノ設立ニテ、農業資金ノ貸付、燕麥ノ販賣、肥料ノ共同購入等ヲ為スヲ目的ト為ス。平野寅吉其組合長タリ。

四、**東部販賣組合** 大字生振村ニアリ、石狩川東部農業者ノ為メニ燕麥ノ共同販賣ヲ以テ目的ト為ス。大正二年七月ノ設立ナリ。鳥羽熊三郎其組合長タリ。

五、**西部購買販賣組合** 大字花畔ニアリ、石狩川西部農業者ノ為メニ燕麥ノ共同販賣及ビ共同購入ヲ為スヲ以テ目的

トス。大正元年十月ノ設立。猪俣松藏其組合長タリ。

六、農業改良實行組合　石狩町農會ノ各部落別ニ設立シタル農事改良ノ實行機關ニテ、五ノ澤、高岡、生振北區組合、

生振中區組合、生振西區組合、花畔北區組合、花畔中區組合、花畔南區組合、樽川組合ノ九團體アリ。組合員計二百三十七名ニテ、町農會長ハ安孫子庄七ナリ。

七、畜牛共濟組合　石狩町ハ近年著シク畜産業發達シ、斯業者ハ互ニ畜牛ヲ飼育スルヲ獎勵シツ、アリ。北振畜友講、生振畜牛組合、樽川乳牛組合等ハ最モ有力ナル團體ナリトス。

八、貯金組合　石狩貯金組合ハ會員三十一名ヲ有シ、明治三十三年二月ノ設立ニシテ、志美貯金獎勵會ハ會員二十名ヲ有シ、大正八年三月ノ設立ニ係ル。共ニ健實ナル發達ヲ為シツ、アリ。

## (十一) 神社

郷社八幡神社(祭神　應神天皇、合殿保食命、宇迦之御魂命)　辨天町番外地ニ在リ。明治七年八月ノ創立ニテ、元

八幡町ニ在リシヲ現在ノ地ニ奉還シ、八年郷社ト公称ス。旧記ニ依レバ文久元年五月函館奉行支配調役並荒井金助石狩

役所在勤ノ砌り役所々在地八幡町ニ勸請シ創立シタルモノナリト。

境内ニ文化十年癸酉八月吉日願主當場所請負人中、同秋味建船中、栖原半助、米屋孫兵衛「奉納海上安全」ト彫刻シタル花崗岩ノ大華表一基アリ。蓋シ村山家ノ石狩場所請負ヲ再ビ命ゼラレタルヲ祝シ且ツハ更ニ將來ノ隆運ヲ祈ル為メ建

立シタル辨天社ノ鳥居ヲ、大正七年八月村山家船中代表者栖原半助一名ヨリ郷社ニ寄進シタルヲ以テ此處ニ移轉シタルモノナリト云フ。又境内ニ寛政元年三月吉日江戸本材木町願主小林店喜兵衛ヨリ奉納シタル古色蒼然タル御手洗石アルヲ見ル。(編者注・明らかな誤りで、村山家の寄進が正しい)

無格社生振神社(祭神　天照皇大神、合殿譽田別命、大物主神)　明治三十四年十月ノ創立ニテ大字生振村七線ニ在リ。

無格社花畔神社(祭神　金刀比羅大神)　明治三十四年七月ノ創立ニテ、花畔村八線ニ在リ。

無格社樽川神社(祭神　天照皇大神)　明治三十九年二月ノ創立ニテ、樽川村六線ニ在リ。



## (十二) 寺院

石狩町ニ於ケル公称寺院八十ヶ寺アルガ、就中古キ歴史ヲ有スルモノノミヲ左ニ掲グ。

金龍寺（日蓮宗） 本尊釈迦牟尼仏、大字新町ニ在リ 安政六年九月ノ創立ニテ當時金龍庵ト称セシガ明治十一年十

二月金龍寺ト公称ス、苗村旭應住職タリ。

能量寺（眞宗大谷派） 本尊阿弥陀如來、親船町ニ在リ明治十一年ノ創立ニテ二十七年十一月堂宇ヲ改築シ現在ノ處

ニ移転セリ、飯尾円藏住職タリ。

法性寺（浄土宗鎮西派） 本尊阿弥陀如來 横町ニ在リ、元有珠郡善光寺ノ出張所タリシガ明治十三年九月寺號ヲ公

称セリ、明治二十五年五月類焼に罹リ改築後再ビ類焼ニ會シ目下新築計画中ナリ、馬場興信住職タリ。

曹源寺（曹洞宗） 辨天町ニ在リ文久二年四月ノ創立ナリ明治九年類焼ニ罹リ十二年現在ノ地ニ移転新築ノ後二十五

年五月又焼失シテ次デ再築セリ、渡辺撤道住職タリ。

外ニ春光寺（臨濟宗妙心寺派）ハ生振村三線ニ、信教寺（眞宗本願寺派）ハ八幡町ニ、玉泉寺（眞宗高野派）ハ生振村

十一線ニ、生振寺（眞宗大谷派）ハ生振村四百二十六番地ニ、光明寺（眞宗本願寺派）ハ八幡町字高岡ニ、立江寺（眞

言宗高野派）ハ花畔村ニ、了恵寺（眞宗興正派）ハ花畔村南七線ニ在リ。又神道天理教教會所ハ横町ニ。

## (一三) 忠魂碑及記念碑

石狩忠魂碑 明治三十九年六月石狩軍人家族保存會ノ三十七、八年役後同町出身戦死者ノ英靈ヲ永久ニ祀ル為メニ建設シタルモノニテ石狩町市街地ノ西端ニ在リ。其氏名ヲ擧グレバ左ノ如シ。

陸軍歩兵特務曹長勲六等功七級畠山竹二郎外 勲八等功七級歩兵伍長横山仁作、全功七級歩ノ一島野保作、全賀勇太郎、全加藤金三郎勲八等坂田喜太郎、全河本文藏、全土山政次郎 全高島岩吉、全歩ノ二清野作太郎ノ名ナリ。

行啓記念碑 今上陛下東宮殿下トシテ明治四十四年八月本道へ行啓ニ際シ其二十七日石狩川河口御視察ノ御使者トシ

テ甘露寺侍從ヲ差遣セラレタルコトハ今尚ホ町民ノ記憶ニ新タナル所ナリ、大字花畔村志美、中央、南線、合同青年會ハ永久ニ其光榮ヲ記念センガ為メ花川小學校ノ正門脇ニ於テ一基ノ記念碑ヲ建立シタルモノ即チ是レナリ、同市街地ヲ

通行スル者ハ必ズヤ一見シテ同青年會員ノ如何ニ至誠敬虔ノ念ニ富ムカラ諒トスルナルベシ。

三十七、八年戰役紀念碑　花川神社境内ニ在リ題字ハ乃木閣下ノ揮毫ニ係ル、碑蔭ニハ大字花畔樽川両村ノ軍費應募者人名ヲ擧ゲ其額ニ萬壹千八百二十五錢ト註セリ、両村有志ノ釀金ニ依リ明治四十年九月十日之レヲ建設シタリモノナリ。

開村紀念碑　花畔開村五十年記念誌ハ花畔神社境内ニ在リ、同地ハ岩手縣ヨリ移住ノ者多キヲ以テ該碑ノ文字ハ旧南部藩主南部利淳伯ノ執筆ニ係ル紀元二千五百八十一年建設ト記セリ。

樽川忠魂碑　樽川村出身三十七、八年役戰死者ノ招魂ノ為メニ同村有志者ノ發企ニテ明治三十七年十二月五日樽川神社境内ニ建設シタルモノナリ、(故歩兵一等卒河本文藏外二名)碑文ハ碑ノ前面ニ刻シアルモ殆ド摩滅シテ讀了スル能ハズ。

郷社三十年紀念碑　郷社創設以後滿三十年ヲ祝ス為メ明治三十六年七月十八日漁業家忍路郡塩路村久保田慶太郎ノ建設シクルモノニテ郷社鳥居ノ左方ニ方リ巍然タル碑石ノ異彩ヲ放ツヲ見ルハ即チ是レナリ。

#### (十四) 名勝旧蹟

故木戸候ノ遺蹟　郷社八幡神社境内ニ於テ華表ヲ入りテ拜殿ニ進ムニ隋ヒ左方ニ屹立スルニ石柱ノ居然タルモノアリ、是レゾ故木戸候ノ揮毫ヲ彫刻シタルモノニテ當時ノ石狩役所司事(函館總督清水谷侍從ノ部屬)井上弥吉ノ北海鎮護ノ為メニ特ニ候ニ請フテ得タルモノヲ八幡社ニ奉燈シタルモノナリト。尔後五十年星移リ物變リテ風雨ノ暴露スル所トナリ獻燈ノ冠部○落シテ文意讀了スル能ハザルニ至レリ。曰ク(○字欽字)

文武一徳　○上二年

肇域四方　今上二年明治戊辰秋八月

縣令井○○○時敬建

然ルニ井上弥吉戊辰ノ革命ニ際シ徳川脱走隊ノ襲フ所トナリ危機一髮ニ迫ル小樽ノ人張白漁場主西谷嘉吉、擁護ノ下ニ辛フジテ一命ヲ全フシ得タルガ弥吉後ニ大ニ之レヲ徳トシ大正七年八月恩人ノ墓ヲ訪フベク來樽ノ序ヲ以テ石狩町ニ來リ該往年獻燈ノ事ニ及ビ時ノ社司故岡村靜雄之ヲ知リテ感奮措ク能ハズ更ニ断礎零石ヲ索メテ之ヲ綴合シ旧態ヲ窺フヲ

得テ此レガ為メニ更ニ該石柱ノ前面ニ左ノ如ク略叙セリ曰ク

石柱ニ基古石燈之遺材也明治維新石狩役所司事熊野九郎君

取献而其文係參議木戸公筆云冠礎燈龕悉散佚僅存此二石柱

耳周因加保護表君之誠敬

大正八年八月

社司 岡村靜雄

後熊野九郎(井上弥吉ノ改名)郷里山口縣鰯石ニ在リテ之レヲ聞キ大ニ喜ビ七十八ノ高齡ヲ提ゲテ大正九年五月再ビ石狩ニ來リ旧友ヲ郷社々務所ニ集メ酒ヲ置テ既往ヲ談ジ金五拾円及ビ來國光ノ寶劔一口ヲ八幡宮ニ奉獻シテ岡村翁ノ誼ニ酬ユル所アリタリト云フ共ニ美談ト謂フベシ。

**辨天社** ハ石狩開發ノ第一人者村山家ノ勸請シタル辨天社ニシテ大字辨天町ニ在リ明治七年以前ハ現今郷社八幡神社ノ境内ニ在リ、按ズルニ元禄七年松前藩家臣山下半左衛門此地ニ來リテ開運ノ為メニ辨天社ノ創立ヲ誘スル所アリ時ニ村山家ニ於テ旧地恢復ノ祝ヒ事アリタルヲ以テ一祠ヲ建立シ始メ辨天堂ト號シ後辨天社ニ改ム、爾來每歲鮭漁豐饒ナリト、文化十年ニ至リテ鳥居新設ノ舉アリ材料ハ大阪産ノ花崗岩ニテ同家ノ手船(千石積)モテ運搬シ來リタルモノニテ現今ノ位地ニ移轉スル迄ハ八幡神社ノ東方ニ存立シ石狩川ニ向ヒテ屹立シツ、アリタルモノナリ、石狩ニ於テ最モ歴史アル旧蹟ヲ尋ヌル時ハ殆ンド本社ニ及ブモノナシ、境内ノ獻燈ニハ文政十二丑五月吉日村山、栖原、ト刻シ拜殿ノ奉額ニハ文化辰子四ト記シタルモノナリ。然レドモ本社ハ正式ノ社格アルニ非ズ村山家ノ内神ナルヲ以テ漸クシテ社會ヨリ忘レラレタル如キ觀アルハ時勢ノ變遷トハ云ヒ転々桑海ノ感ナキ能ハザルモノアリ。

**石狩川ノ流燈** 石狩市街地沿岸少壯漁業者ハ旧盆ノ季節ヲ機トシ年歲懸賞ヲ以テ流燈會ヲ組織シ流燈ヲ行フノ慣例アリ。會員〇八區ニ區別シ懸賞ヲ以テ各意匠ヲ凝ラシタル燈籠ヲ持出サシムル故ニ恰モ青森ノ佞武多ヲ見ル如キ感アリ、其之レヲ執行スル年ハ豫メ四方ニ宣傳スルヲ以テ其盛大ナル光景ヲ賞觀セン為メニ札樽地方ヨリ來集ノ人多シ、將來石狩町ノ年中行事トスベク目下青年漁業者間ニ協議中ナリ。

**望來ノ貝石** 石狩町ヨリ東二里半厚田ニ通ズル道路ノ望來村海岸地層中ニ於テ諸種ノ貝石及ビ化石ヲ産出スルヲバ一度同地ヲ通過シタル人ノ皆知ル所ナリ其品質ニ於テ彼ノ末ノ松山産ノ物ニハ及バズト雖モ亦卓上ノ愛翫ニ適スルモノ尠カラズ、小西旅館主人此採掘ニ関シテハ多年ノ經驗上獨特ノ技能ヲ有セリト云フ。

**鮭漁ノ遊覽**

古來其味ノ特種ト産額ノ多キヲ以テ廣ク全國ニ著聞シタル石狩ノ鮭漁ハ其漁獲ノ方法規模亦雄大ナルヲ

以テ毎歲秋季ニ至レバ他地方ヨリ其光景ヲ觀覽センガ為メニ來遊スル者頗ル多シ。鮭ノ盛季ニハ投網ノ區域海浜五里ニ涉リ河流ハ十里ニ溯リ到ル處曳網ノ聲ヲ耳ニスルヲ常トセリ。因ミニ鮭漁ニ関シ一二書冊ヨリ左ニ之ヲ轉載シテ如何ニ鮭ノ北海道ノ生産物中重要ナル關係ヲ有シ又此ノ鮭漁ノ過去ニ於テ豊凶ノ甚シキ變化アリシ事實ヲ証スベシ。

一、石狩元場所ハ一箇年ノ産額一万二千石ト称セラレ時ニ多少ノ盛衰アリト雖モ通例全島總産額ノ約三分ノ一ヲ占メタリ、次ハ増毛、留萌、シコツ（今ノ千歲）余市等ナリ、霧多布場所モ亦天明以來産出ヲ増シ終ニ三千石ノ漁獲アルニ至レリ。寛政十年ノ西蝦夷地産額二万五千石、東蝦夷地産額一万二千三百石（知内村二百石ヲ含ム）合計三万六千三百石、シ一石ニ付鮭五十尾トシテ此漁數百八十一万五千尾外ニ拔荷鮭七十二万六千尾總計二百五十四万千尾ナリ。初メハ交易船ニ塩ヲ積ミ行キ生魚ヲ直ニ船ニ塩藏セシガ後ニハ豫メ塩ヲ送り置キテ塩藏スルコト、セリ、又後ニハ荒卷ト称シ薄塩ヲ為シテ移出スルモノアリ。

二、天保年間請負人ノ届書ニ據レバ一ヶ年鮭ノ總産額二万七千四百石ニシテ石狩ノ九千五百石ヲ最トセリ、根室ノ四千五百石、擇捉ノ三千五百石、勇拂ノ二千石、増毛ノ千五百石、宗谷及ビ國後ノ各七百五十石、留萌ノ六百石、樺戸、厚田、白老、釧路ノ各五百石等之レニ次ギ他ハ産額多カラズ。石狩ハ往昔一万二千石ト称セシニ當時代ハ大抵六七千石ヨリ一万石ノ間ニ在リシモノ、如シ、根室國後ノ如キモ亦漸次減少シ嘉永ノ頃ハ凶漁相續キ何レモ運上屋ヲ減ゼザルヲ得ザルニ至レリ。

三、鮭ハ鯨ニ次グ重要産物ニシテ蝦夷地ニ多ク松前地方ニ少ナシ、故ニ其漁ノ豊凶ハ松前人民ニ影響スル所少クシテ蝦夷ニ影響スル所多シ。鮭ハ蝦夷ノ交易品タルハ勿論地方ニ依リテハ鮭ヲ以テ冬季ノ主要食料ニ充ツルガ故ニ若シ著シキ凶漁ニ會フ時ハ必ず餓死スルモノアルヲ免レズ、享和八年石狩川凶漁ノ為メ其地ノ蝦夷二百餘人餓死セシガ如キ其實例ナリ然レドモ斯ノ如キ凶漁ハ稀有ノ事ニ屬ス。（以上三項ハ大正七年十二月發行北海道史ニ據ル）

四、鮭モ亦蝦夷地天賜ノ一大産物ニシテ何處ノ地ノ小流ニテモ漁セザルハナシ、是レヲ秋味ト云フ毎年秋彼岸十日ヲ經テ漁ヲ始メ十月中旬頃ニ至ル就中其盛ナルモノハ石狩川ヲ以テ第一トセリ、昨年ノ收穫 三万是レガ為メ石狩町ノ賑ヘル事他ヨリ集合セルモノ殆ンド二千餘ト云フ故ニ河縁處々ニ假家ヲ修理（シツラ）ヒ諸物品ヲ鬻ク依テ春夏ハ寂寞トシテ他ノ漁業ヲ為サズト云フモ敢テ意ニ介セズ依然トシ秋味ノ頃ヲ俟チ二年分利澤ヲ得ルナリ。

五、河ノ左右共人家アリ、河ノ左岸ニハ波止場並ニ開拓使出張所及ビ役邸其外木村萬平出張所其他出稼家六七軒アリ河ノ左右ニ 槽アリ旧幕府ノ頃秋味ノ節ハ役人此槽上ニテ鮭ノ登ル多少ノ検査シ何分ノ税ト云フ事ヲ定メタル由ナリ、

客歳石狩川へ鮭ノ登ル事夥多ニシテ人力ノ取盡ス事能ハズシテ是レヲ漁ルモ塩ニ盡キ腐敗スルニ及ビシト、大約客秋鮭ノ為メニ費ス處ノ塩ノ員数一万俵ニ下ラズ然ルニ大漁ニシテ塩不足シ初メ塩一俵一朱ノ處後ニハ一両ニ歩迄ニモ至レリト云フ。(以上二項ハ明治三十五年五月発行北海誌料ニ據ル)

(一五) 重要統計

石狩町ノ戸口、生産物及ビ其他重要統計ヲ挙グレバ左の如シ。

(イ) 戸口

年次	種別	戸数	人		合計
			男	女	
明治四十五年		一,三八七	四,七四九	三,五七四	八,三二三
大正元年		一,四一〇	四,三二九	三,三三五	七,六六四
大正二年		一,四三六	四,七九五	四,七三八	九,五三三
大正三年		一,四七六	五,三六七	五,一九九	一〇,五六六
大正四年		一,三七五	五,三五一	五,一一七	一〇,四六九
大正五年		一,四〇八	五,四一三	五,〇五三	一〇,四六六
大正六年		一,四〇七	四,六〇六	四,三九七	九,〇〇三
大正七年		一,三五〇	四,四〇九	四,一九四	八,六〇三
大正八年		一,四六二	四,五八一	四,三五九	八,九四〇
大正九年		一,四二一	四,四二五	四,二四八	八,六七四

(備考) 大正九年十月一日國勢調査ノ際八一・六二二戸。九・一三九名ニテ本年四月一日現在八一・四五〇戸。八・七〇〇名ナリ。

(口) 主要農産物

年次	種別	麥類		豆類		亜麻類	
		數量	價格	數量	價格	數量	價格
大正元年		三七, 一一五 石	二〇四, 〇六四 円	二, 七三〇	一三, 〇九〇 円	四, 六〇〇 斤	二, 七六〇
大正二年		四六, 七八六	二〇四, 〇六四 円	一, 六八〇	一三, 二七四 円	一八, 二〇〇 斤	三, 二七六
大正三年		四三, 五〇八	一八二, 七三〇 円	四, 九〇四	五四, 八一九 円	三八〇, 〇〇〇 斤	一, 〇四〇
大正四年		四二, 九五八	一五六, 三六四 円	五, 一八一	六〇, 八四二 円	四二五, 〇〇〇 斤	三, 八〇〇
大正五年		三一, 一七六	一一五, 九四二 円	三, 七一九	五七, 四一一 円	五〇八, 〇〇〇 斤	五, 七七五
大正六年		二七, 三七二	一八〇, 六二一 円	四, 六八二	七六, 六七五 円	一, 〇〇八, 六〇〇 斤	四, 〇二九
大正七年		二六, 一六〇	二七五, 〇二四 円	四, 〇一六	六九, 七〇三 円	二, 一八三, 〇五〇 斤	一五, 一二九
大正八年		二八, 五五二	二一九, 八七六 円	三, 一八八	三七, 一一六 円	二, 二一三 石	九〇, 一二四
大正九年		四三, 五五八	三〇八, 九二八 円	四, 〇八〇	五一, 五六七 円	五, 〇七二 斤	二一, 一一九
大正十年		五〇, 二二二	三三三, 九八七 円	二, 七〇四	四一, 五二四 円	二, 一六四 石	六四, 五〇一
						一四二, 〇八六 斤	四, 六〇〇
						二, 一六四 石	四六〇
						二七二, 一六〇 斤	六四, 五〇一
						一, 四五八 石	一八, 九五四
						一八七, 八五六 斤	二一, 二二八
						九八七 石	七, 〇九六

年次	種別	除虫菊		其他	
		数量	價格	数量	價格
大正元年		六〇〇	一, 四四〇 円	一〇, 一〇〇石	一〇七, 三三二 円
大正二年		七二〇	一, 八七二	一, 二四〇屯	一八, 六〇〇
大正三年		六五〇	一, 四三〇	三, 四九三石	三八, 九四二
大正四年		七一八	一, 八七二	一, 一五二屯	一七, 二八〇
大正五年		二, 五〇五	五, 五一一	九, 六三六石	七二, 〇四九
大正六年		九〇〇	二, 〇七〇	七, 七三三石	七, 一三〇
大正七年		七六八	五, 〇六八	一, 六一二屯	五七, 六二五
大正八年		八五八	四, 四六二	七, 七三三石	一七, 七三二
大正九年		七六八	五, 〇六八	二, 九七〇石	二二, 一九四
大正十年		八五八	四, 四六二	七, 一三屯	七, 一三〇

(八) 主要水産物

年別	種別	鮭		鱒		其他	
		数量	價格	数量	價格	数量	價格
大正元年		一二〇,〇〇〇	五四,〇〇〇	一六,〇〇〇	六,四〇〇	四,六〇〇	一,一六〇
大正二年		一一二,〇〇〇	五六,〇〇〇	一二,〇〇〇	五,四〇〇	一二,〇〇〇	一,八一〇
大正三年		一八三,六八〇	一〇一,〇二四	四,〇一二	一,六四八	四,三二〇	一,三二五
大正四年		八四,〇〇〇	六三,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,二〇〇	六,五二〇	一,七五九
大正五年		九四,四一一	七五,五二八	八,三八五	四,一九二	九,〇四〇	八,二七五
大正六年		八四,七一〇	二二五,二六五	九,八七〇	六,九〇九	二四,五〇六	一八,九二三
大正七年		八四,七一〇	二二五,二六五	七,四一〇	五,九二八	九九,五一九	二一,七六八
大正八年		一九六,四八〇	二九〇,四〇〇	六,九六〇	九,三九六	五七,五六二	一四,七五一
大正九年		七一,九四〇	一七五,三五〇	一六,五六〇	一四,九一四	二六,三二〇	一三,九五七
大正十年		五四,七八〇	九八,六〇四	一五,二八〇	一六,八〇八	三〇,五〇〇	一九,七四二

(二) 畜産

年別	種別	牛			馬		
		牝	牡	計	牝	牡	計
大正元年		一四七	六七	二二九	八一六	六七八	一,四九四
大正二年		一三二	九七	二二九	八一六	四七八	一,二九四
大正三年		一二三	九五	二二四	七七七	四二二	一,一八九
大正四年		二五一	五六	三〇七	八一二	四七五	一,二八七
大正五年		二五〇	五六	三〇七	八一二	四七一	一,二八五
							年内出産
							五九



(ホ) 移出

種別	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
大麥	價格 五〇〇 數量 四,二〇〇	二,八〇〇	五,二一五	六〇〇	五二〇
小麥	一,四〇〇	一,三〇〇	一,五〇〇	二,一五〇	一,五四七
大豆	一,〇八五	二六,〇〇〇	一,〇〇〇	三四,四〇〇	一〇,〇五五
小豆	二,二〇〇	二,二五〇	二,二八〇	八,〇五五	四,〇五〇
豌豆	二,一〇〇	三,七五〇	四,九六四	四,五六〇	三,八五四
燕麥	一,五〇〇	一七,九二〇	二二,九〇〇	一,一七〇	二七,九七五

年別	牛		馬	
種別	牝	牡	牝	計
大正六年	四五〇	一六九	二三八	一,一六八
大正七年	六七八	一〇七	三一二	一,〇二四
大正八年	五七六	八六	一四〇	一,二三二
大正九年	六六一	一〇六	一六一	一,一一六
大正十年	七六一	九七	二六二	一,三三四
				年内出產
				七六
				七五七
				七二七
				四二二
				二九七
				四四六
				三〇九
				三八〇
				九三四
				七五六
				八八七
				八〇七
				九三四
				三六八
				一,一六八
				一,〇二四
				一,二三二
				一,一一六
				一,三三四
				七六
				五七
				一四五
				一九四
				三四三

種別	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
白米	價格 二,六九〇 數量 四八,九〇〇	二,五八三 四六,八三八	二,五六七 九五,九五五	四,九〇〇 八八,二〇〇	三,二五八 五三,七五七
小麥粉	七五〇	六六五	一二	三五〇	一,一三〇
鹽	二,六〇〇 三,〇五〇 一,四二〇	三,六五七 二,九八五 二四,八五〇	一,九九九 八一〇 二,六七〇	一,七五〇 五八〇 一,八六〇	六,二一五 七六〇 二,四一六
鯉節	三六〇 五〇	二四四 三三	一九三	一〇〇	一六
味噌	二,六〇〇 二,四五〇	八,八五〇 六,六三七	四,二〇〇 四,二八〇	一,二三〇 二,七六〇	二,一三〇 一,五六〇
醬油	一,六二〇 六〇	二七三 七八	三三〇	二五〇	二八四
酢	三三〇 三五	一二	三六	一,三七五 五〇	一,六四七 八五

(ハ) 移入

種別	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
菜種	一,二〇〇	一,〇〇〇	二,五〇〇	一,八〇〇	二,六〇九
澱粉	二四,〇〇〇	二〇,〇〇〇	六,四〇〇	四四,六四〇	二一,三九三
木炭	一四,五〇〇 二二六,〇〇〇	一四,二七五 二一,二八〇 五七一	四六〇	二〇八,〇〇〇 三,六八〇	一八五,〇〇〇 二,四七〇

種別	清酒	麥酒	砂糖	菜種油	蠟燭	釘類	陶磁器	筵及菰	繩	畳表	叭
大正六年	一, 九九五 一, 九二〇 一九, 二〇〇	三〇〇	一, 二二〇 一, 五〇〇 五三〇	三三五	四四五 四四〇	一, 五〇〇 五〇	一, 〇五〇 三八	一, 五九〇 五〇〇	一, 七二〇 三五〇	二, 八五〇 二〇〇	二, 八〇〇 一六〇
大正七年	二, 〇六〇 二, 五〇〇	四四五	一, 六三七 一, 九〇〇	三, 〇九四 九	一, 〇八〇 五〇五	一, 〇一〇 四九	一, 二四七 一三五	一, 六二〇 一〇〇	一, 二五〇 二, 八七〇	一, 八六五 五〇〇	二, 〇〇〇 五二五
大正八年	二, 二五〇 一, 四二八	三三三 三五〇	一, 四〇〇 六〇〇	一, 三五〇 一二	二二四 四九三	一, 一八三 八五	一, 四八〇 一	一, 九〇〇 一	五, 九六〇 三九〇	三, 二六〇 三五〇	二, 六〇〇 三八七
大正九年	二, 五〇〇 六, 二五〇	三一〇	一, 二八〇 五〇〇	一〇, 〇〇〇 五	四, 八〇〇 八五	一, 四四〇 五〇	一, 五〇〇 一八	八〇〇 五九	一, 六八〇 三〇〇	二, 五五〇 四五〇	二, 四〇〇 四五〇
大正十年	一, 〇六二 二, 三七六	二六, 七三〇 九七	四, 三〇五 四四〇	七, 四八〇 三〇	四二〇 五六	一, 六八〇 七五	一, 三一二 三〇	三, 二〇〇 二七	七, 三六〇 二四〇	一, 二〇〇 二〇〇	三, 八〇〇 三〇〇

種別	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
帽子類	八,八九〇	七,〇〇〇	九,一〇〇	八,四〇〇	一一,六〇〇
下駄	五九〇	三六〇	四八〇	七三〇	一,一三〇
半紙	二〇〇	四五〇	六〇〇	七八〇	八〇〇
	三八〇	三八五	三六〇	六〇〇	五六〇
	一,五八〇	一,七六五	一,七二二	四八〇	二八五
	四,七六〇	四,五五五	四,六四八	三,〇二八	一,八五二

(下) 官公衙

- 石狩町役場
  - 札幌警察署石狩分署
  - 札幌區裁判所石狩出張所
  - 札幌營林區森林保護區出張所
  - 石狩郵便局
  - 花畔郵便局
  - 石狩八幡町郵便局
  - 石狩川水測所
- 
- 石狩川治水事務所
  - 石狩川治水工場
  - 石狩燈臺
  - 石狩川航路標識看守所
  - 若生巡查駐在所
  - 花畔巡查駐在所
  - 生振巡查駐在所

(子) 町名誉職員

- 町會議員 一六
  - 學務委員 一〇
  - 土地等級調查委員 一六
  - 部長 一二
- 
- 町是調查委員 一八
  - 土木委員 一六
  - 灌漑溝調查委員 一五
  - 部長代理者 一一

(リ) 學校

種別	校数	學級数	児童数		計
			男	女	
尋常高等小學校	三	一四	四七六	三八七	八六三
尋常小學校	四	七	一九二	二〇九	四〇一
尋常科分教場	五	七	一九〇	一四二	三三二

(又) 社 寺

郷社	無格社	三
曹洞宗	眞宗	六
日蓮宗	臨濟宗	一
浄土宗	眞言宗	一

(ル) 諸 團 体

團 体 名	會員数	團 体 名	會員数
石狩町農會	八六〇	石狩町水産組合	一七四
石狩町漁業組合	一三二	石狩町信用販賣組合	一〇七
石狩町東部購賣販賣組合	一五〇	石狩町西部購賣販賣組合	一三六
石狩町火災豫防組合	三三五	石狩町衛生組合	一二八
在郷軍人會石狩分會	四七〇	石狩町青年團	七五六
石狩町火防團	三〇	花畔自警團	三〇

(三) 町 財 政  
一、一般會計豫算

入	區 別	
	大正十年度	大正十一年度
使用料及手数料	五七〇	一, 六二二
國庫下渡金	一, 五〇〇	一, 五〇〇
交付金	九二一	一, 〇三二
雜種入	三, 七一八	四, 四八五
地方費補助	二七二	一, 三六八
教育受託費	二五〇	二五〇
前年度繰越金	二, 〇〇〇	三, 三八三
町税	四七, 三二一	四六, 七一三
貸地料	一, 〇三五	一, 〇三五
寄付金	二六九	五六〇
基本財産支消金		一〇, 〇〇〇
特別會計繰入金		三, 一〇五
合計	五七, 八四六	七五, 〇五三

(經常部)

歳	區 別	
	大正十年度	大正十一年度
役場費	一五, 〇〇九	一七, 九〇八
會議費	六九一	七四四
土木費	二, 四〇二	二, 二六〇

(臨時部)

出		區	別
土木費	九八三	大正十年度	六六八
警備費	五七六		一五三
教育費	二, 八七八		四, 二五七
財產管理費	一〇		八〇
基本財産支消金利子	六一		一六一
土地改良費	一〇		二〇〇
借地料	四三六		四三六

歳		區	別
教育費	三〇, 四五七	大正十年度	二二, 二四一
衛生費	七三三		九七九
町醫費	六〇		六〇
警備費	六九一		七一
補助費	五三九		六五二
勸業費	一五		一五
地方改良奨励金	九七		一三二
神社費	六一		六一
諸税及負担	三六〇		三五八
雜支出	五九九		一, 〇一二
豫備費	六八九		一六五
合計	五二, 四〇二		五六, 二九八

二、特別會計基本財産

出	區 別	
	大正十年度	大正十一年度
勸業費	—	二〇〇
町營住宅建築費	—	一〇, 五一一
水害復旧費	—	二, 〇九〇
合計	五, 四四四	一八, 七五五
物計	五七, 八四六	七五, 〇五三

入	區 別	
	大正十年度	大正十一年度
財産ヨリ生スル収入	三, 三六四	三, 四一一
雑収入	一五	一五
過年度収入	五〇	五〇
計	三, 四二九	三, 四七六

(經常部)

歳	區 別	
	大正十年度	大正十一年度
財産蓄積金	三, 三〇二	一四四
借地料	一七	一七
豫備費	一〇	一〇
計	三, 三二九	一七一



(臨時部)

出		區	別
合計	財產造成費 一般會計繰越金		
合計		大正十年度	大正十一年度
三, 四二九	一〇〇   一〇〇		二〇〇 三, 一〇五 三, 三〇五 三, 四七六

三、特別會計渡船場

(經常部)

歳入		區	別
計	渡船賃金		
計		大正十年度	大正十一年度
二, 八八九	二, 八八九		二, 八三四 二, 八四三

(臨時部)

歳		區	別
計	渡船場費 豫備費		
計		大正十年度	大正十一年度
二, 七五五	二, 七〇五 五〇		二, 六九五 一〇

出		區	別
合計	基本財産戻入金		
合計		大正十年度	大正十一年度
二, 八八九	一三四 一三四		一一九 一二九

## あとがき

石狩市郷土研究会の創立四十五周年を迎えるにあたり、記念誌を作ろうと提案したのは、創立当時の会の会員である田中實氏であった。「石狩の歴史ならこの人に聞く」と、私たちがもつとも頼りにしている大先輩の言葉に、あらためて研究会の足跡の重みに感じ入ったのだった。

もちろん異論があるはずはなく、会のこれまでの四十五年の歩みを振り返りながら、石狩のサケ漁の衰退と回帰、農業の発達と減反、住宅団地開発と石狩湾新港の開港などを平行して考えてみるきっかけにもなる、と思った。

編集委員会が作られ、昨年四月末に第一回の編集会議が開かれた。話し合いを重ねるうちに記念誌の内容がかたまり、「目次」が決められ作業分担がそれぞれに割り当てられた。一番苦労する資料集めは、幸いなことに設立当初から現在まで、克明な記録（チラシや新聞記事、四十五年間の例会内容や出席者名ま）を年代順に九冊の分厚い綴りに纏めて田中氏が持つておられ、それを借用したため作業が軽減した。ほかに、写真は吉本愛子氏、村山耀一氏の両会員から提供された。執筆にあたり、これら第一次資料のほかに設立当初のことを知るため「石狩の文化」（石狩町教育委員会・石狩町文化協会／昭和六十一年発行）を参考とした。

記念誌の表題は、石狩から銭函の海岸線に沿って十五キロにもおよぶ柏林をイメージした。この林は、天然林として日本一の面積で海風から私たちを守ってくれている。冬でも落葉しない柏の木は、源氏物語のなかで葉を守る神が宿る木と記述がある。私たちの会も、たくましく成長する柏の木のようにでありたい。記念誌を作るにあたり、編集委員の星川富美子氏はもとより、ほかの会員も連絡などを引き受けてくれた。会員みんなで作るをモットーとしていたから、たいへん嬉しかった。そして、「さすが」と感心させられたのは、会員が寄稿した回想録の原稿やその校正が締切り日よりずっと前に届き、こういう作業に手慣れていることがうかがわれた。おかげで編集がじつにスムーズに行われ、五月から開始した作業は十二月になると原稿の第一回の校正が終わるまでになっていた。

各章に分担して執筆が進められたが、それぞれの章の終わりに文責者の氏名が記されている。また、発刊図書で紹介はその著者が編集者に執筆していただいた。回想録は会員三十二名のうち二十二名から寄せられ、資料編は村山耀一氏と鈴木トミエが編集した。「石狩案内」は三島照子氏が、「石狩町勢要覧」は吉本愛子氏と三島照子氏、村山耀一氏が編集した。表紙題字は原澤文子氏、挿絵は吉岡玉吉氏が引き受け

てくれた。この記念誌の校正は村山耀一氏、石橋孝夫氏、三島照子氏、吉本愛子氏、鈴木トミエが担当した。忙しいなか、記念誌の全体校正はもとより監修を田中實氏にお願いしたところ、快く引き受けて下さった。

また、山口福司氏より創立四十五周年にあたりお祝い金をいただいた。お礼を申し上げると共にその一部が記念誌発行にあてられたことを報告する。

最後に、会員みなさんから多大な協力を得たことに感謝する。

平成十六年三月

(文責 鈴木トミエ)

石狩市郷土研究会

創立45周年記念誌

編集委員会編集委員

青木 隆

石橋 孝夫

駒井 秀子

鈴木トミエ

高木 憲了

田中 實

星川富美子

三島 照子

村山 耀一

山口 福司

吉本 愛子

(五十音順)

いしかり暦第十七号

創立45周年記念特集号

柏林 郷土研究45周年

発行日 平成十六年三月三十一日

編集者 石狩市郷土研究会

記念誌編集委員会

発行人 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目

一三一番地 村山耀一方

電話 ○一三三―七二―七四八九

印刷所 (有)日孔社

